

宋銭の裏表

梅原郁

はじめに

黒川古文化研究所にご厄介になり、さしあたり何を研究テーマに選ぶか、あれこれ考えをめぐらした。私はこれまで五十年以上、前近代中国の歴史と取り組んできたが、その主たる研究分野は、十〜十三世紀の宋代であった。研究所の貴重な収蔵品は、青銅器、鏡鑑、刀剣、書画など幾つかの柱が立てられ、内外各方面の研究者の利用に供している。それらのほか、両替商だった初代黒川幸七と密接に関する、日本近世の貨幣や江戸時代の藩札の蒐集も、収蔵品の重要な一部を占めている。この貨幣に関しては、二代目以降もその蒐集が継続され、その中に中国の貨幣も多数含まれるようになっていった。私の専攻する宋代の貨幣「宋銭」は、周知の通り、江戸時代以前では、日本で最も大量に存在した中国銭だった。従って本所の収蔵貨幣のうち、宋銭の占める割合が大きいのも当然である。すでに先人たちの努力により、『黒川古文化研究所収蔵品目録』の一冊として、貨幣類の全貌を知る目録が発行されている¹⁾。こうした目録として、限られた条件のもとで作成することは容易なことではない。研究所に来てから、それを繰り返して通覧していると、できればもう少し手を加える方が、研究者や利用される方々にとって望ましいのではない

かという気がしてきた。そこで、所員の人たちの協力も得て、まず、唐・五代・宋の銅銭・鐵銭の精査から取り掛かることにした。具体的には、二千数百枚に達するこれら貨幣の拓本を採り、個々の貨幣の正確な分類・整理を行なうと同時に、自分自身が、この時代の貨幣に直接触れる実感を味わいつつ、その理解を深めることに努めた。

さて実際に銅銭の拓本を一つずつ丹念に取り始めると、今まで考えてもみなかった事柄が次々と姿を現わす。宋銭の現物を手にせず、写真や図録からの知識で、宋銭とはこういうものだと思われて、勝手に決めて、物事を判断していた方法に、少なからぬ戸惑いが生じ始めた。たとえば図版で頭に入れてきた綺麗で立派な宋銭はむしろ稀で、冷静に眺めると、大多数のそれはすべての面で些か薄汚く、むしろガラクタ然としている。使用による磨耗、銅の削り取りその他の原因を割り引いても、本来あった形制そのもののさえが、図録と違うように思えてくる。それが一番特徴的に現れるのは背面である。この時期の銅・鐵銭の裏面は、大部分は外輪と内郭から成る光背と、全く平板な平背に大別される。磨耗や削り取りなどで、本来は光背だったはずがフラットになっている場合も珍しくはなく、また私鑄銭などは平背が圧倒的に多い。しかし私が言うのはそうした点ではなく、外輪と内郭を作りながら、その形が必ずしも正常ではな

く、いわば良い加減な不良品が意外に多いことなのである。唐代の「開通元寶」以来、銅錢裏面の錯範はつきものである。翻沙法で表面の范と裏面の范がズレると、何十枚もある錢の裏側に同じような錯範が起る。現代的常識からすると、こうした錯範錢は鑄造段階で排除されるべきなのだが、当時の中国の感覚では、皇帝への納入など特別な場合を別として、裏面の状態などはほとんど考慮に入れず、平気で流通に回されていたように思われる。その感覚で錢譜や図録を見直すと、当然ながらいたるところに裏面の錯範を見出せる。一つの砂型で錯範が起れば、百枚近くの裏のズレた貨幣が鑄造されるわけだから、予想以上にそうした宋錢が残存していても怪しむに足らない。研究所には、かかる裏面に難のある宋錢がむしろ普通に存在する。だからといって、研究所の藏品の質が劣悪だという意味にはならない。恐らく、日本に現存する宋錢や、中国で夥しく発見される窖藏の宋錢のうち、かなりの分量が嚴密に言えばそうした不良品で占められ、逆に有名な図録に載せられたり、美術館が展示したりしている貨幣は、特別な上等品と見做すこともできそうである。参考までに付け加えると、日本古代の「皇朝十二錢」でも、特に八世紀中期の「承和昌寶」以降の小型錢では裏面の錯範が目立ち、全体の三、四割にも達するかと思われる。拓本技術は暫く措き、表・裏の字や文様さえ十分に浮き出てこない、唐宋錢貨の拓本ばかり眺めていると、宋錢の本来の姿、その在り方を従来とは違った視角から追求できないかという思いが浮かんできた。私の恩師宮崎市定先生は、「その時代の当たり前のことは、殆ど記録に残されていない。だから、次の時代になると、この間まで当たり前だったことが、今度は一番分かり難いことになる。歴史をやるものは、ここのとこを十二分に注意しなければいけない」と何度も繰り返しておられた。唐でもそうだが、宋代に入ると、貨

幣は、特に城市の中では、最も当たり前な代物となる。しかし、それぞれ同じく三百年の王朝でありながら、唐代と宋代では貨幣の様態が全く違う。唐のそれは、ほとんど「開通元寶」一色で塗りつぶされているのに、宋代は各皇帝ごとに何種もの年号錢が鑄造され、しかもそれぞれに「元寶」「通寶」などがあり、また複数の字体を持つことが通例となる。その理由はどこにあるのか、どの貨幣概説にもそんなことは説明されていない。日本でも中国でも、宋錢は普遍的な研究材料あるいは蒐集品として扱われ、研究されてきている。しかし宋代の、それが当たり前だった時代の実態や背景は、殆ど顧みられず、現代世界に残る骨董的な「宋錢」としての扱いに力点が置かれているように、私には感じられる。黒川古文化研究所でのそれらの精査を機会に、多数の実物を通して、宋錢における幾つかの未解決な問題につき、一石を投じてみようかと考える。

第一章 宋錢の概観

わざわざこのような一章を立てることに、疑問を持たれる方も居られるであろう。貨幣専門の中国の辞典や、数多くの宋錢関係の書物や文献では、大なり小なり、それ相応に概説や概観が載っており、改めて論じる必要はないと言われても、一応は尤もである。だが、ことはそう簡単にはゆかぬ。中国においては、貨幣の歴史は古くて長い。宋錢といっても、それはこの国における長い貨幣の歴史の一齣に過ぎず、他の時代と同様に簡単な扱いで済まされる方が通例であろう。他方、日本では、元・明時代、大量に宋錢が流入し、大きな影響を受けたとしても、何よりも宋代そのものの知識の絶対量が不十分なため、宋錢は輸入銅錢の中では

際立って数が多い程度の認識だけで十分だったのである。従って、蒐集に熱心な「泉幣家」たちが、多種多様な宋銭蒐集に努め、それらの微妙な版別差異の同定に大部分の精力を費やしたとしても、それはむしろ当然の成り行きだった。

いったい、南北両宋三百年に及ぶ宋代、「天聖元寶」とか「慶元通寶」など名をつけた貨幣の銭文が何種類あったか。正確な数字は出せないにしても、その概数を挙げている辞典がどれ位あるだろうか。また、銅銭と鐵銭によって、これら銭文はどのように違い、さらに銭文の読み方は、縦読みすなわち直読と、時計回りの回転読みの旋読が、どう区分されているか、宋代の銭文には、「通寶」「元寶」「重寶」の三種、いわゆる「三寶」があるが、その区別の基準はどこにあるのか、と言ったような初歩的な疑問にさえ、概説書類には、満足のゆく説明がない方が普通である。これらは総て、些細なことのように見えながら、その裏に検討すべき政治や社会問題を多く含むため、「泉幣家」や「愛泉家」ではそこに切り込むことが難しく、反対に貨幣の現物に疎いおおむねの研究者は、多種多様な宋銭の区別や整理すらできず、難問が続出する結果になってしまう。私とて貨幣については、所詮素人の域を出ないが、取り敢えず、いくつかの基礎的な事柄の整理・分析を通じて、宋銭の実態に迫ることから始めたい。それは、これまで指摘されていない、存外重要な問題の解明に結び付く可能性を秘めていると感ぜられるからである。

本論に先立って、使用した宋銭の基本的文献のうち、比較的簡単に見られる幾つかを提示しておきたい。本稿では、最も多く中華書局の『中国錢幣大辞典』（二〇〇五、以下『大辞典』と略す）の「北宋」「南宋」に拠った。但し記載は二〇〇三年までだから、その後の多くの発見は別に調べなければならない。併せて、国家文物局編纂の『中国古錢譜』（一

九八八、中華書局）、朱活『古錢新典』、丁福保・馬定祥『歷代古錢圖說』（一九九一、上海人民出版社）や、鮑康・李佐賢『古泉匯』、奥平昌洪『東亜錢志』の宋代の部分、そして閩福善編『北宋銅錢』（二〇〇八、中華書局）、同編『兩宋鐵錢』（二〇〇〇、中華書局）などを参照した。

序説 銭文の種類

宋銭は原則として、その時期の年号を使った銭文を持つ。宋代はまだ明清のように一世一年号ではないから、同じ皇帝でも、改元される度に銭文が変わってくる。唐代までは「五銖銭」の時代が長く続き、王莽の「貨泉」や、北魏の太和、永安、常平等の名をつけた五銖銭や、北周の「永通萬國」などは、むしろ例外と見做してよく、たとえそこに年号が加わっていても、宋代の年号銭と同次元には考え難い。唐代三百年、銅銭は「開通元寶」によって独占され、肅宗時代の「乾元重寶」がやや目につく程度で、乾封、咸通、そして大曆、建中などの諸銭は、短期間もしくは安西などの特殊範囲で鑄造・行使されたに過ぎず、たとえ年号銭であっても、やはりその「開通元寶」への影響は少なかつたと見做し得る（図1）。

十世紀前半の五代十国では、質・量は二の次として、各国で貨幣の鑄造が行なわれ、特に十国の中の四川を始め、南唐、楚、閩などの諸国では、鉛銭や鐵銭の鑄造が目立つ。この間、中原王朝では、後梁の開平、後唐の天成、天福といった銅銭の存在が知られるが、その数量は限定されており、わが国には全くと言ってよいほど渡来していないため、日に触れる機会は多くないだろう（図2）。異民族主体の政權が漢民族に移行し、新しい時代の曙光の射し始めた後漢になり、唐の「開通元寶」を手本として作られた「漢通元寶」と、それを踏襲した後周の「周通元寶」、

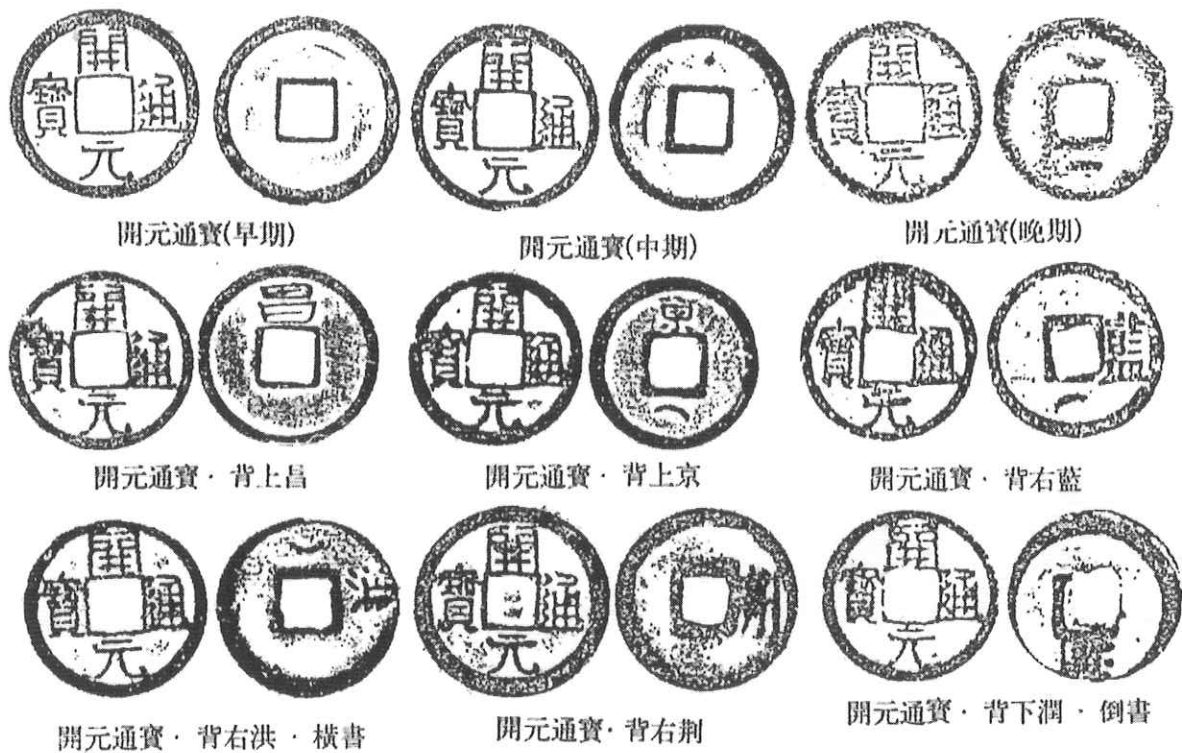


図1 唐代の「開元通寶」(上段)と「会昌開元」(下二段)

そして宋初の「宋通元寶」の過渡的時期を経て、二代皇帝太宗の太平興
 国年間、「太平通寶」が鑄造され、ここに「開元通寶」に代わる、本格
 的な宋代の貨幣鑄造が開始される。このことは、唐から宋への大きな変
 化を踏まえており、単に貨幣の様態が代わっただけの問題に止まらない
 ことに注意を払う必要がある。^①

なお、五代では、社会・経済の面で、次の宋代に繋がる意味から、中
 原王朝よりも四川や江南の幾つかの独立政権が重要である。特に四川成
 都の王氏前蜀と、江南江寧(現南京)の南唐は双璧をなす。前蜀の永平、
 通正、天漢、光天、乾徳、咸康といった年号を持つ銅銭は、日本各地の
 中世埋蔵銭にもおおむね一〜二枚程度含まれており、後蜀毛氏の銅銭が
 全くないので対照的でさえある。そうなる理由は、今後の研究課題とも
 なり得よう。一方南唐では、前期の大銭は珍しいが、後周末期から宋初
 にかけて、「唐國通寶」、「大唐通寶」、そして「開元通寶」がかなり多数
 鑄造されている(図3)。参考のために数字を挙げれば、永井久美男氏
 の『中世の出土銭』では、「開元通寶」など唐代銅銭に比べ、五代のそ
 れは四パーセントにも達しない。ただ二千三百枚余の五代銭の中では、
 後漢・後周一六・六パーセント、前蜀一六・九パーセントに対し、南唐
 は全体の六割を超え、特に「唐國通寶」は四一パーセントを占めている。^②

二代太宗二十一年の治世は、単に宋代史のみならず、十九世紀に至る
 ほぼ一千年の前近代中国の方向の基礎を築いた極めて重要な時代であっ
 た。「科挙」の改革とその恒久的実施を想起するだけで、それは十分に
 であろう。金属貨幣の改革も、当然ながらその新しい政策の一環をなして
 いる。そこで、宋代金属貨幣の主な特色と、未解決の問題点や疑問点を、
 やや詳細に列記しておきたい。宋銭を、少なくとも学問的な研究対象に

図2 五代・中原王朝の銅銭

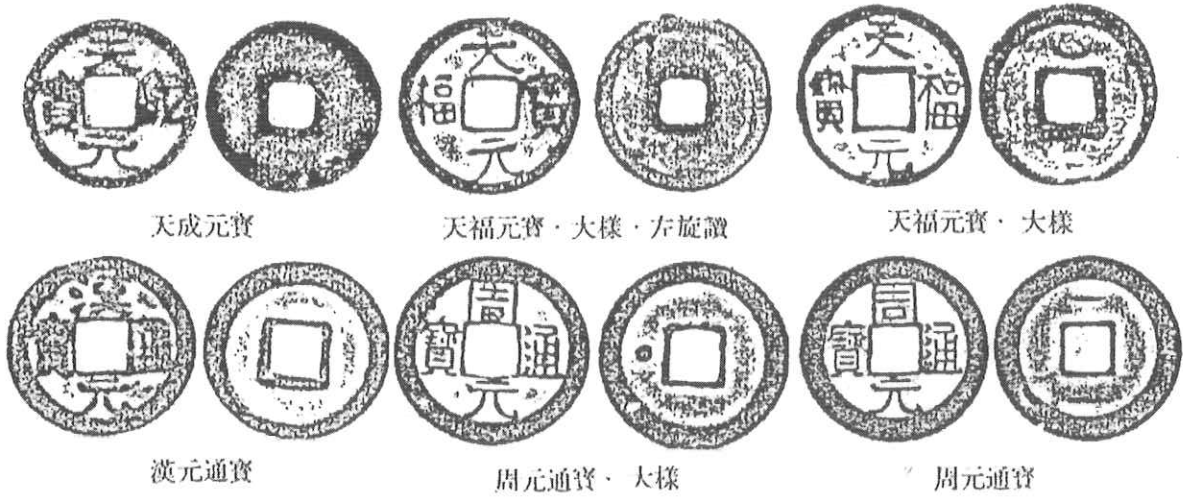
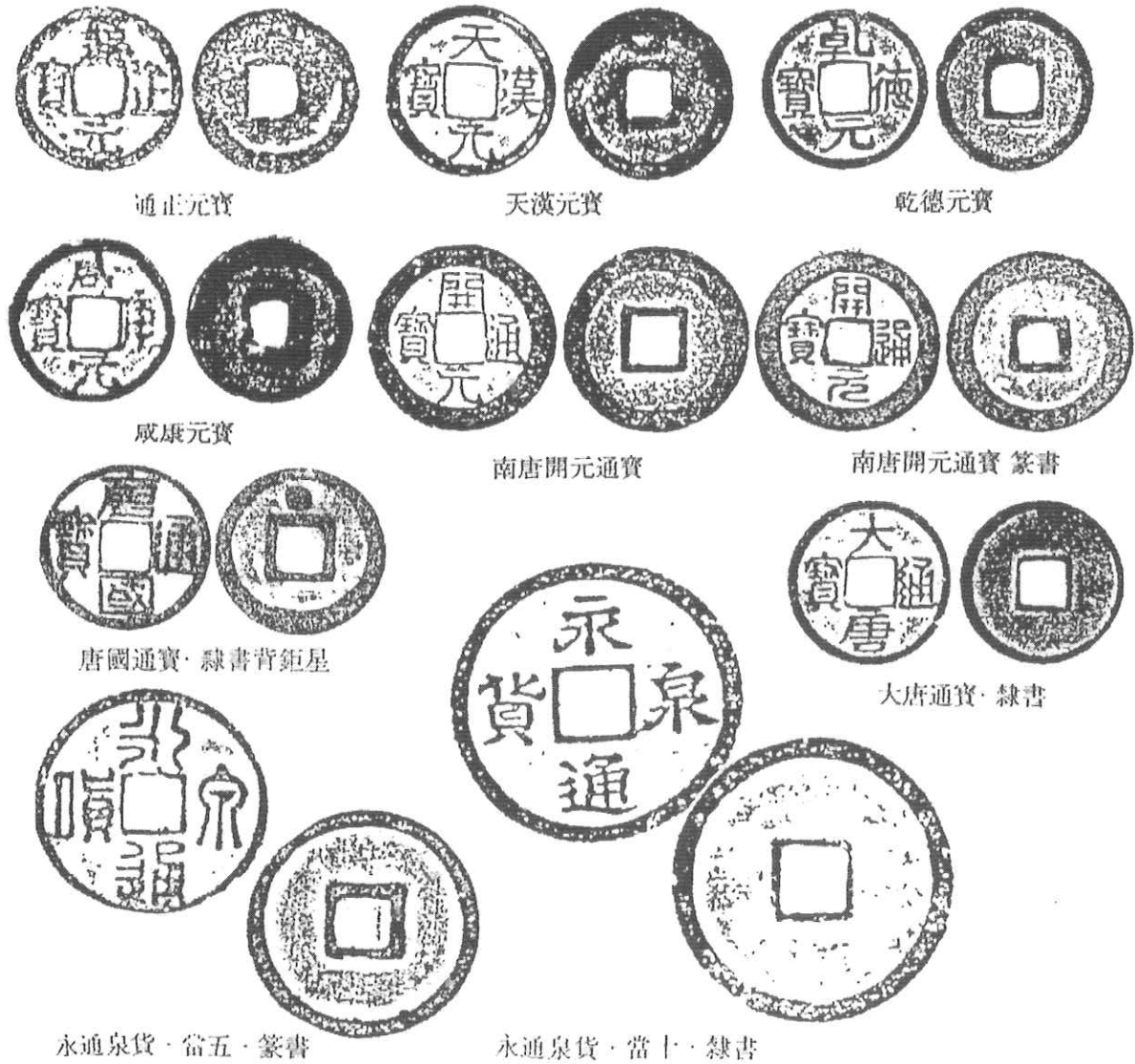


図3 五代・前蜀と南唐の銅銭



する限りは、以下に述べる知識がどうしても最低限必要で、それに基づき事柄を解決すべきだと私は考えている。

① すべて年号銭で、ほぼ皇帝の改元ごとに改鑄される。ただし幾つかの例外がある。年号に「元」もしくは「寶」を含む時は、年号以外の銭文とする。たった四字のうち二字が重なることを嫌ったためである。そこで仁宗の寶元は「皇宋」、理宗の寶慶と宝祐は「大宋」、「皇宋」に変更される。そうは言っても、南宋には「慶元元寶」や「寶慶元寶」の鐵銭が鑄造されていたりして、必ずしも原則が徹底していない。上記「皇宋」などの他には、太祖の「宋通元寶」、徽宗の「聖宋元寶」があり、「皇宋」は「通寶」「元寶」両者があるから、宋代の非年号銭は都合六種類となる(図4)。なお徽宗初年の建中靖国には、「建国通寶」があつたと、『中国古銭譜』には図版つきで記載されているが、論理的にもそうした名称は不自然で実在は疑わしく、ここでは除外しておく。

② 宋代三百年の年号銭ないしそれに準ずるものは、最も単純には九十七種類となる。然るに『大辞典』では北宋の条目二千四百四、図四千百二、南宋は条目千七百四十六、図二千四百十八を挙げる。挿図は兎も角、条目は個々の宋銭の相違を区分して網羅したものと解釈できるから、その限りでは、宋銭の種類は四千百五十という途方もない数になる。最低が上記九十七種なら、最高は四千百五十種というのでは説明にならない。それは何故で、そこにどのような意味があるのだろうか。

③ 銅銭の成分は、北宋では平均パーセント銅六五・八、鉛二四、錫八、鐵その他であるが、南宋になると銅五六・八、鉛三五・六、錫四、鐵一・三の割合となる。但し、時期や恐らく個々の鑄銭監の状

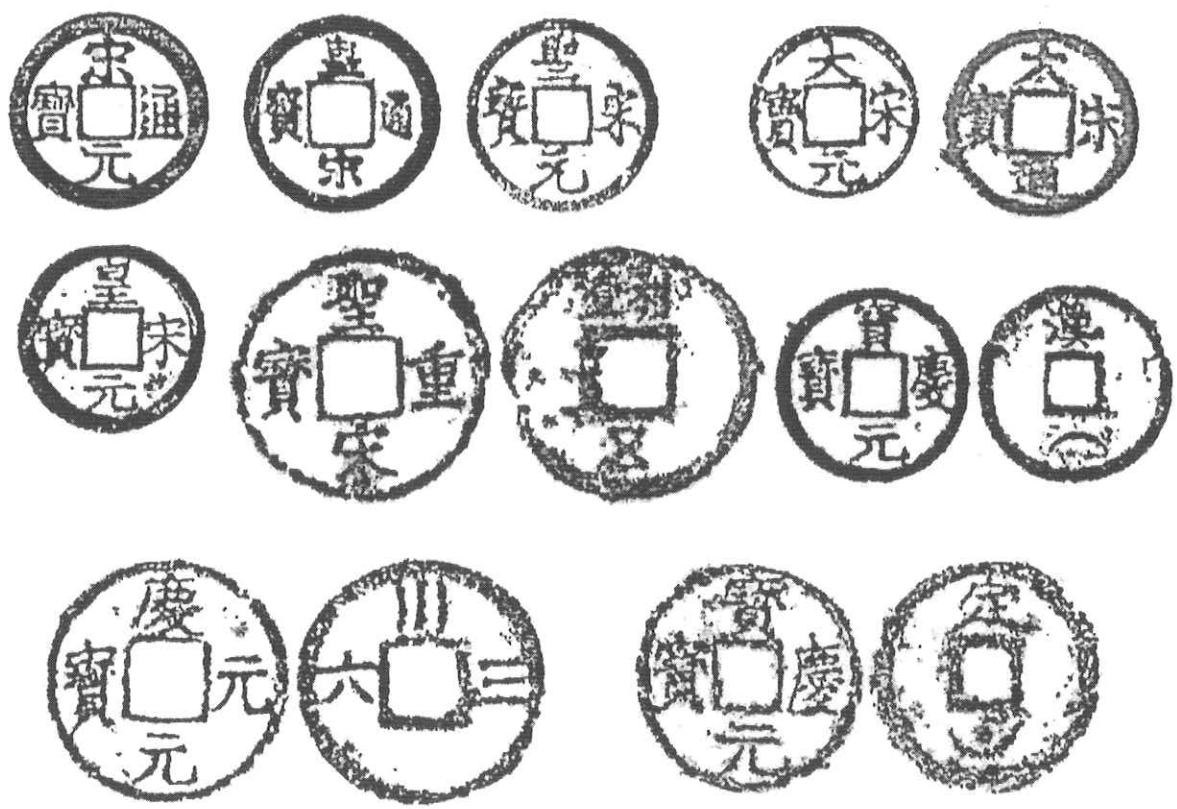


図4 宋代の非年号銭と「元」「寶」重複銭

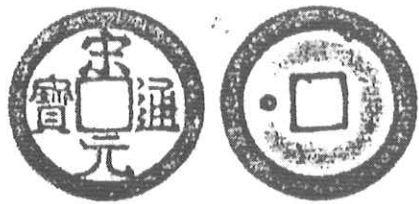
況により、この成分比にはかなり異同が大きく、「至道元寶」や「紹聖通寶」などは銅が八〇パーセントを越すのに対し、篆書の「皇宋通寶」小平銭は五〇パーセントを切り、その代わり鉛が三八・七パーセントと高い。それが南宋になると、最初の「建炎通寶」が九二パーセントと突出しているのを除くと、おおむね銅は五〇パーセント台で、北宋より相当品質が低下している。

④ 銭文は四字に固定されるが、その字体は八分隸書、楷書(真書)、隸書、篆書、行書、草書と多岐に分かれる。字体が一つだけの年号銭はむしろ少なく、北宋では真書と篆書、行書と篆書、あるいは篆書と隸書などの両方が、並铸される場合が通例である。そのうち、「淳化元寶」と「至道元寶」は、太宗皇帝の御筆とされ、それぞれ楷書、行書、草書の三体がある。また北宋末の、「崇寧通寶」、「大觀通寶」などは、風流天子徽宗の得意とした「瘦金体」の楷書で書かれている。南宋では、前半三分の一の孝宗淳熙年間までは、楷書・篆書の二体が多かったが、次の光宗紹熙以降は、おおむね楷書一体とされ、篆書は例外的に鐵銭に使用されるに過ぎなくなる。最近になって、中国の泉幣家の間では、同じ年号を持つ字体の違う二枚の内、大きさ、重量、形体などの酷似しているペアを「對銭」とみなし、異常なほど「對銭」探しに熱中している傾向が見える。上記『大辞典』などは、その好例であろう。日本では、早くから「符合銭」と呼んでこの問題に関心を示し、専門の錢譜まで刊行されている。ところで、改元のために銭文を改铸し、おまけに同一銭文に複数以上の字体を何故使用するのか。それは宋銭の性格を考える上で重要なポイントの一つであろうが、「對銭」と併せ、その検討は後節に譲りたい。このような字体の相違が、宋銭の種類増加と当

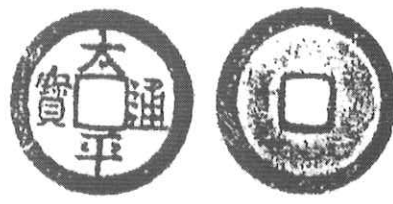
然繋がる。厄介なことに、楷書と隸書の区別が見方により異なったり、隸書や行書の中に楷書が混じるように見えるケースなどもあり、種類の数え方はさらに混乱を招く(図5、6)。

⑤ 一つの年号銭は、我々が頭に浮かべる「寛永通宝」的な銅銭、中国の用語で言う「小平銭」だけではない。建前では、「小平銭」つまり普通の銅銭の倍が「折二銭」、三倍が「折三」、五倍が「折五」、時には十倍の折十(當十)から當百まで存在する。但し実質的価値はこの通りではなく、背後には常にその時期の経済・政治の影が付きまとい、現実には「折三銭」以上は様々に変化する。ただ、付録の銅・鐵銭明細一覧の通り、多くの場合は同一年号銭に「小平」と「折二」が並存する点も、念頭に入れておくべきであろう。ここでも、年号だけ同じ貨幣が、複数以上存在することになる。おまけに「折二」、「折三」の区別、「折三」と「折五」の扱いは、銅銭と鐵銭で違ったりするため、折二以上の貨幣を単純合計しても、あまり意味のない場合も起り得る。従って種類計算はスムーズにはゆかないわけである。

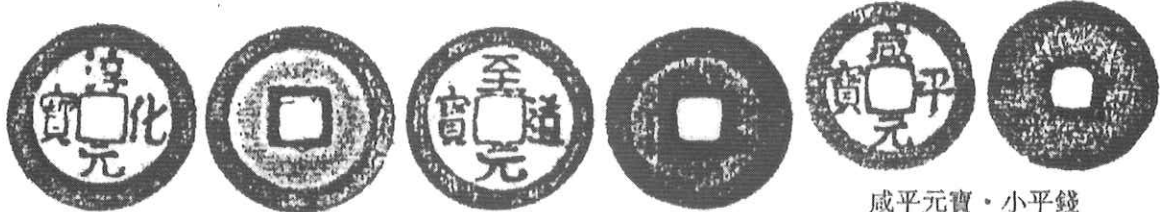
⑥ 宋銭の錢幣記号は、原則としては「通寶」「元寶」「重寶」に区分される。つまり年号の次にこれら文字のいずれかを伴うことになる。後述するように、南宋後半の四川鐵銭では二十に達する錢幣記号が氾濫するが、それらは一時的例外に過ぎない。但し、「通寶」では、熙寧、聖宋、隆興、乾道、紹熙、大宋、端平の七種、「元寶」では康定、聖宋、宝慶の三種、「重寶」は嘉定の一種が鐵銭にしか存在しない。とりあえず三者の数字を数えると、「通寶」は北宋と南宋が十九対十六、「元寶」は十八対十八、「重寶」は六対四で、「三寶」の合計八十一種となる。この中で、「通寶」と「元寶」の両方



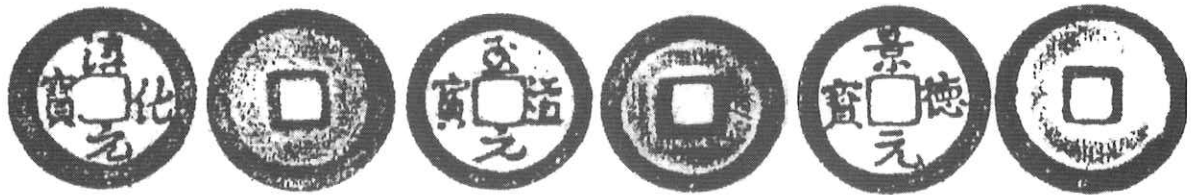
宋元通寶・小平錢・隸書大字背星



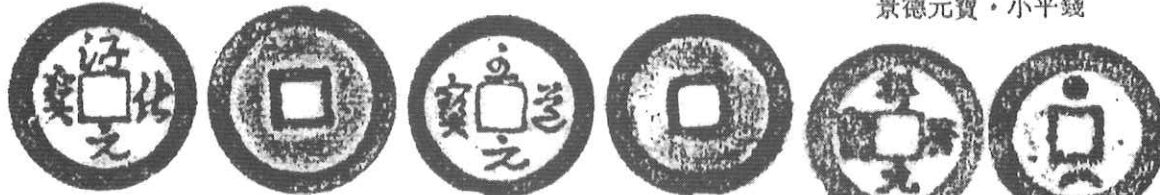
太平通寶・小平錢・隸書正字



咸平元寶・小平錢



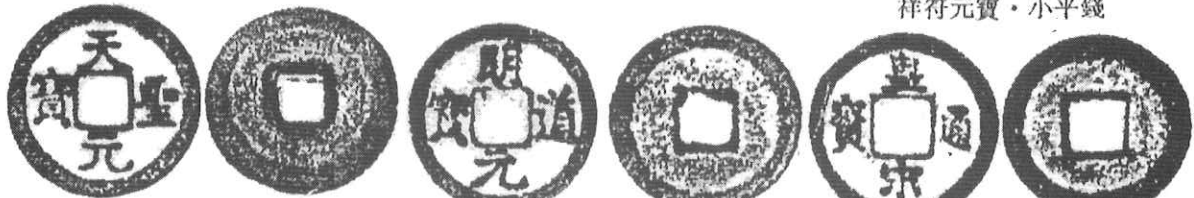
景德元寶・小平錢



淳化元寶 楷行草書小字三體錢

至道元寶 楷行草正字隔輪三體錢

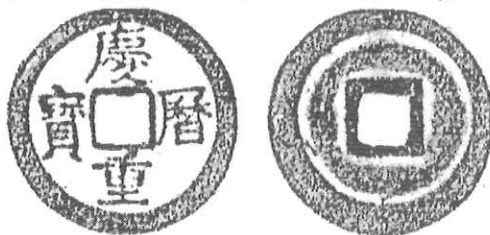
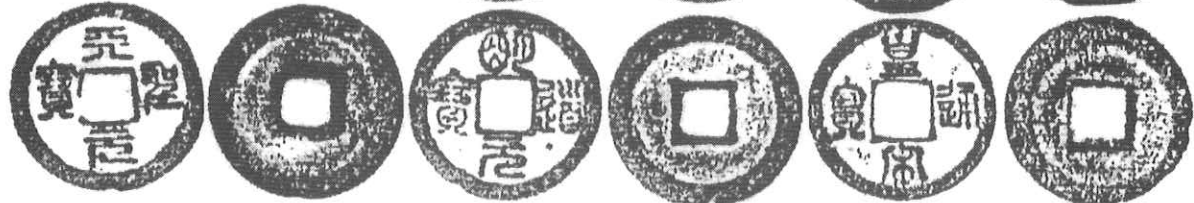
祥符元寶・小平錢



天聖元寶 楷篆書昂寶對錢

明道元寶 楷篆書大字對錢

皇宋通寶 楷篆書狹通廣穿對錢

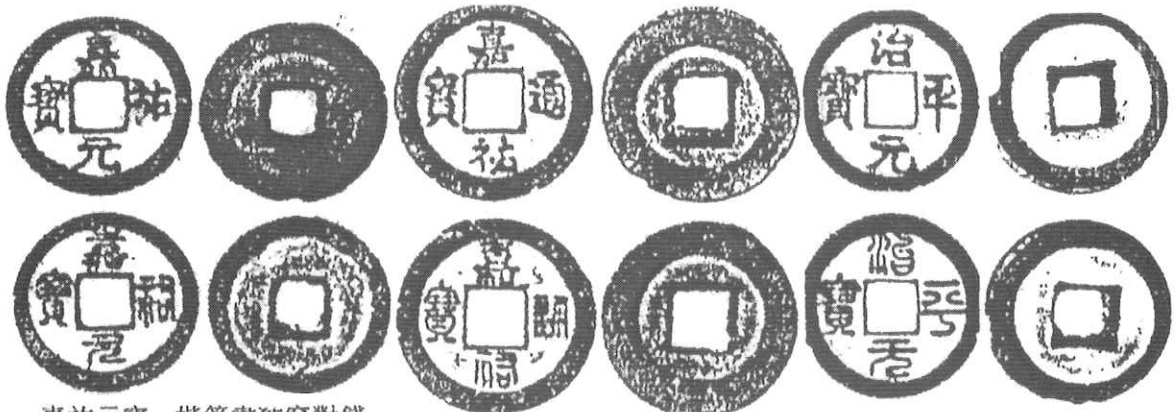


慶曆重寶・折十・楷書旋讀大字



慶曆重寶・折十・楷書對讀長重

圖5 北宋前半の銅錢(含御書錢・對錢)



嘉祐元寶 楷篆書狹穿對錢

嘉祐通寶 楷篆書闊輪對錢

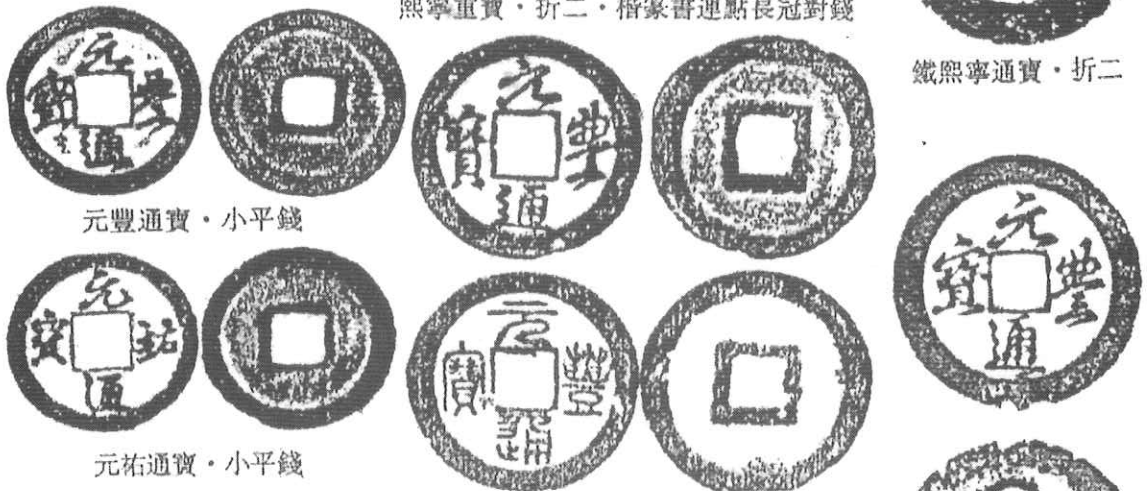
治平元寶 楷篆書背反邪對錢



熙寧元寶 楷篆書短寧狹降熙對錢

熙寧重寶·折二·楷篆書連點長冠對錢

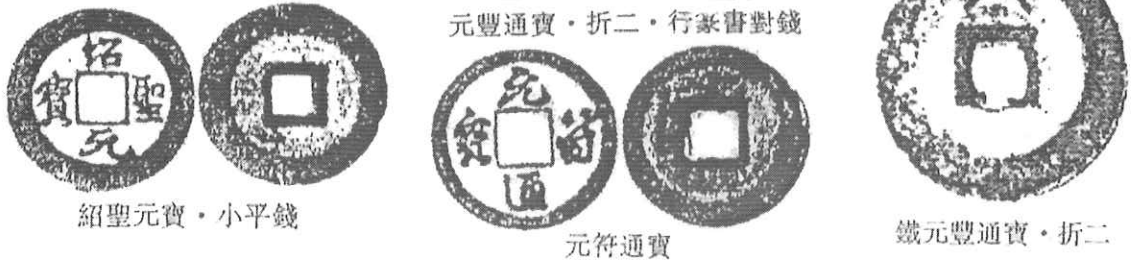
鐵熙寧通寶·折二



元豐通寶·小平錢

元祐通寶·小平錢

元豐通寶·折二·行篆書對錢



紹聖元寶·小平錢

元符通寶

鐵元豐通寶·折二

圖6 北宋中期的貨幣(含對錢·鐵錢)

のある年号は、銅銭では北宋九に対し南宋十の十九種、鐵銭は北宋四に対し南宋十二の十六種類とやや相違が見られる。話がこまかくなるが、仁宗の天聖、明道、景祐には「通寶」がない。これは眞宗皇后で、仁宗初期権力を握っていた章獻明肅劉太后の意を汲み、その父劉通の名を忌避したためで、『宋史』卷二四三の伝にも、「天下に令し、太后の父の諱を避けしむ」と、明記してある。また、元豊、元祐、元符は「元」字の重複を避けて「通寶」しかない。

改めて勘定してみると、銅銭と鐵銭を合せて二十二、つまり兩宋全体の年号数の半分が、「通寶」と「元寶」兩者を持つことが分かる。貨幣がこの両方の称呼を持つことは、他ならぬ「開元通寶」「開通元寶」の読み方に淵源し、すでに唐代、「大曆元寶」と「建中通寶」でその実例を知ることができる。かくて宋に入って両方の年号銭が氾濫するわけだが、ではその区別はどこにあり、なぜ両方作る必要があるかとなると、これがまたよく分からない。銭文には、向かって上から下、右から左と読む「直読」と、上から右回りの「旋読」がある。調べてみると、北宋では「通寶」が直読十二、旋読八に対し、「元寶」は十八すべてが旋読、南宋になると「通寶」は直読八、旋読三、「元寶」は直読五、旋読十二となるほか、数種が直・旋の兩者を持つことが知られる。つまり、「通寶」の七割は直読、「元寶」は八割が旋読で、特に北宋時代の「元寶」は十八種すべて旋読という結果となる。北宋では比較的整然としていた貨幣が、南宋になるとかなり雑然たる様相を帯びてくる一端を、ここでも窺うことができる。また、同じ年号の「通寶」と「元寶」の鋳造量も取り上げねばなるまい。鐵銭が混在するため、正確に行かぬ部分もあるが、二十二種類の個々に当たってみる限りでは、其処から統一性を引き

出すことは困難に思われる。北宋の祥符、至和、嘉祐、治平あたりは、「元寶」と「通寶」の比は二対一あるいは三対二程度だが、紹聖、聖宗と「通寶」は激減し、宣和は逆に「元寶」が極めて少ない。南宋でも兩者の關係は不安定で、建炎、淳熙そして慶元、嘉定などは「通寶」が圧倒的に多いのに較べ、紹興、乾道、紹熙は「元寶」が優越する。ここで列記した事柄は、あまり意味があるようには見えないかも知れぬ。しかし何処かで、これと結びつくヒントや資料が発見できれば、例えば鑄銭監による銭文の区分とか、銭文の決定を誰が行なうか、といった問題解決の足がかりになるまいかと、私は思っている。このような宋代の「通寶」と「元寶」の状況を、日本中世の出土銭と対照してみると、その多少や有無に、かなり正確に、宋代中国の状況が反映していて興味深い。当然のことながら、日本で出土する宋銭は、最初からその枠がある程度定まっており、現実に存在した宋銭の種類は、それより遥かに多かったことも忘れてはならない。

最後に、残った「重寶」について触れ、この項を結びたい。唐代肅宗の乾元元年（七五六）の「乾元重寶」でその名が出現し、「開通元寶」十に対し一という「折十（當十）」の価値を与えられた。五代の閩や楚その他でも「重寶」は部分的に存在したが、宋代では仁宗の「慶曆重寶」以後約十種が鋳造された。「重寶」は本来の建前では一枚が小平銭十枚に相当する。ところが、実際にはその金属としての質量は一对三程度に過ぎない。「重寶」発行は、政府としては、当面の財政危機回避策つまり応急措置の意味が強いが、民間では小平銭を鑄潰して「重寶」に吹替えれば大儲けになるから、当然私鑄の横行を誘発する。その対策として、「折十」を「折三」か

ら「折二」に引き下げたりするから、却って貨幣価値の混乱を招き、財政的・社会的に別の悪影響を生む。日本でも「神功開宝」以後、旧銭と新銭の比が十対一とされるが、実際にはそのようなことは行い得ないのと同様である。

⑦ 宋代の金属貨幣はその九九パーセントが銅銭と鐵銭で占められる。鉛銭や夾錫銭もありはしても、大勢には殆ど影響はない。また銀貨や金貨は、少なくとも王朝の法定流通貨幣としては存在しない。銅銭と鐵銭は原則的にはそれぞれの流通区域を制限され、北宋時代の陝西のように混用される場合も皆無ではないが、それはむしろ例外に属する。これも、北宋と南宋とはその性格や様態に相違がある。そのうち四川、特に成都と梓州を中心とした東西兩川（成都府路と梓州路―のちの潼川府路―）は兩宋を通じて鐵銭使用区域であり続けた。⁽⁸⁾北宋前半は、中原や江南は、五代以来の一部例外を除き、全部銅銭区域だったが、仁宗なかば西夏の衝突が起ると、増強した軍隊の給与や軍糧調達に大量の貨幣を必要とし、陝西と甘肅全体、山西の一部が鐵銭区域とされ、結果として銅銭・鐵銭が併用されるように変る。靖康の変（一一二七）で、女真族金のため國都開封を追われ、江南杭州に都を遷した南宋では、貨幣事情そのものに著しい変化が生じたことも加わって、北宋とは異なった銅・鐵銭の使用区域を設定する。金との境界線は淮水と大散関を結ぶ北緯三四度線に設定されたが、それより南、長江に至る地域は、いわば緩衝地帯として、宋の軍隊とそれを取り巻く人たちの居住区となった。従って、江蘇、安徽、河南、湖北、四川などの江西北部は、大部分鐵銭区域に指定される。すなわち四川でも漢水流域の利州路と安徽・江蘇江北の淮南路が、鐵銭使用の中心としてクローズアップさ

れてくる。他方銅銭使用区の江南でも、銅産出量の減退が著しく、銅銭鑄造量も北宋の比ではない。日本出土宋銭の総数で、南宋が北宋の僅か四十分の一に激減している点も、そうした状況を如実に証明している。ここでも、北宋銭と南宋銭を単純に同じ平面で扱ってはいけないことに留意すべきであろう。

⑧ ところで、銭文は表の面だけとは限らない。すでに唐代、「開通元寶」の最初から、裏面には月や星が刻まれ、やがて鑄銭監の略号などが加わる。初期の「開通元寶」では、月は新月、星は黒点で表現され、デザインとしても洒落ているが、それが次第に変化する。月は上弦・下弦、その位置も中心の四角穴（「穿」）の上下左右と自在に変化し、孕み月と俗称されるように、新月の下や上に星が置かれたりもする。裏面に何故新月と星が置かれるか、様々な議論が繰り返されるが、所詮推測の域を出ない。宋代もそれらを踏襲し、その時々事情を反映して賑やかさは増す一方である。とりわけ南宋中期、孝宗淳熙七年（一一八〇）以降は、銅銭は鑄造年の数字、鐵銭はそれと同時に鑄銭監の略号をつけることが通例となる。例えば「紹熙元寶」は、「穿」の下に、元から五まで、鑄造年の数字を入れる。一年号の使用期間が短ければまだよいが、嘉定のように長くなると、十一以下は「穿」の上下に十と一を分けて刻まねばならぬ。それが淮南の鐵銭になると、年号数字のほかに、鑄銭監の略号をも添加するから、よりごたついてくる。同一年号の小平銭と折二銭に銅・鐵両者があったとすると、その年号銭は四種に過ぎないが、その年号が五年続くと合計二十種類となり、鐵銭で五錢監あれば全部で四十種と跳ね上がる。⁽⁹⁾机上の計算ではそうであっても、現実には五錢監・五年間の鐵銭が全部発見されて現存するわけではないから、

本当は何種铸造されたのか断定できない。宋銭蒐集家ならこれら鐵錢全部を集めようと目を輝かせるかもしれないが、それを目当ての偽造錢まで加わると收拾がつかなくなる。宋代の貨幣種類総数を明確に挙げ得ない原因は、こうしたところにも潜んでいる。

第二章 宋銭铸造をめぐって

第一節 翻沙法の始まり

「開通元寶」に至って、中国の铸造貨幣は画期的な新しいスタイルを持つことになり、それと同時に铸造量も桁違いに増加する。秦漢から隋代までの八百年に及ぶ長い期間、銅銭を中心にした铸造貨幣は、石や銅で铸型（范）を作り、高熱で溶融した金属を流し込んで製造した。これら铸型、特に石に刻んだそれは、各時代に亘り、数多くのヴァリエーションをもって残存し、博物館でも出土報告書でも容易に見ることができ。

この時期に主流だった銭文は、「半両」、「五銖」、「貨泉」とおおむね簡単な二字であり、しかも范を作るための陰刻の難易に殆ど差がない。またその铸造量とて多いといってもたかが知れており、一度に四枚とか八枚を铸造する范で、十分ことが足りたであろう。ところが、唐の「開通元寶」となると話が違ってくる。その铸造期間の長さを勸案しても、日本の中世埋藏錢だけで、優に十万を超える数となり、中国の錢幣雜誌で取り上げられる頻度も、他を遥かに引き離している。ところが、正直のところ、「開通元寶」がどのようにして铸造されたかの詳細は、十分に証明されているとは言い難い。一九八八年七月の『陝西金融』の「錢幣專輯」第九、唐代貨幣の特集では、最初に铸造方法なる項目を設け、内容的には必ずしも統一はとれていないにせよ、長短取り混せて十三の論

稿が掲載されている。その詳細はここでは省くが、精選された特殊な砂と土に錢母を捺す「翻沙法」の優越を、大勢では認めつつ、なお別の铸造方法に拘る論者が少なくないことを覗わせる。要は、前代までのように錢范が発見されていないことが、最大の理由となるうか。この点、唐の真似をして、泥土と砂で范を作りつつ、なおその一部が錢范として出土している、わが国の「富本錢」や「和同開珎」とは若干事情が違い、その相違を探ってみる必要があるかも知れない。

唐代のことは暫く措き、私は宋代では「翻沙法」以外の铸造方法は、例外的にあつたとしても、殆ど問題にするに足らないと思つてゐる。文献で見える限り、北宋の銅銭铸造量は、十世紀の太宗の時代で五十万貫から八十万貫、十一世紀の真宗に入ると百万貫を軽く突破し、仁宗・英宗をへて神宗熙寧年間まで、百五十万貫以上で推移する。そして、神宗の元豐三年（一〇八〇）には、十七鑄錢監合計五百六万貫の最大値に達する。ちなみに同時期の鐵錢数は九錢監百四十万貫である。銅・鐵いづれにおいても、個々の錢監の铸造能力にはかなりの差があるにせよ、銅銭は年間十萬か二十萬、鐵銭は二十五萬かその半分が一鑄錢監の平均定額とされている。銅銭十萬貫といつてもすぐにはピンと来ないかも知れぬ。もし一貫を正確に千錢とすれば、十萬貫は小平錢一億枚に相当する。これを三百六十日で割れば、毎日の铸造量は二十八萬枚という途方もない数字になる。小平錢だけでなく、折二や折十錢を混じえ、あるいは省百で計算したとしても、恐らく半分の十四萬枚は下るまい。明末十七世紀前半の科学技術書『天工開物』では、「百枚の母錢を長方形の砂枠内に並べて、その上に別の一砂枠を置いて反対面の型をとる。母錢を砂枠から取り出して同じ作業を続け、砂枠を重ねて堅く縛り、湯口から融銅液を注入する」と記す。仮に裏表十個ずつの砂枠を重ねたとしても、一

回の鑄銭量は千個に過ぎず、その作業を百四十回繰り返さなければ一日のノルマは達成できない。砂枠二十個を一度に操作することなど多分不可能だろうから、半分の十個としても、一日二百八十回同じことをやらざるを得ない。母銭や砂枠、あるいは一枠の中の鑄銭数を増やしても、原金属の溶融、開「穿」や、仕上げなど、他に幾つか同時進行的作業工程も必要なはずである。一銭監の鑄造額毎歳十萬貫と書くのは易しいが、本当にそれが毎年達成されていたのならば、北宋の貨幣鑄造技術とその能力は、まことに驚異的な水準にあったと評価せねばなるまい。

南宋後期の鐵銭鑄造についての文献史料としては、張世南の『游宦紀聞』(卷二)の記事がよく知られている。短い文章なので、全文を紹介しておく。『蕪州鐵銭監、五月至七月、号為鐵凍、例閣鑪輔。本錢四可鑄十、鐵炭稍貴、六可鑄十、工僱費皆在焉。其用工之序有三、曰沙模作、次曰磨錢作、末曰排整作。以一監約之、日役三百人、十日可鑄一萬緡。一歲用工九月、可得二十七萬緡』(蕪州の鐵銭監は、五月より七月に至る、号して鐵凍となし、例として鑪輔を閣む。本錢四にて十を鑄すべし。鐵・炭稍貴ければ、六にて十を鑄すべし。工僱の費皆これにあり。その用工の序三あり。曰く沙模作、次に曰く磨錢作、末に曰く排整作。一監をもつてこれを約するに、日ごとに三百人を役すれば、十日で一萬緡を鑄すべし。一歲用工九月、二十七萬緡を得べし)。ここでは上記の十萬貫の三倍近くを、それも夏期休業を除く九ヶ月で鑄造すると、こともなげに記している。鑄銭労働者を三百人としてはいるが、それでも年間二十七萬緡は、一日にすれば七十萬枚に達する巨大な量である。断るまでもなからうが、「緡」は銅・鐵銭一貫^{びん}一十錢を通す「あおざし」の意で、貫と同義に使う。ついでに参考のために日本の例を引用しておこう。『寛永通宝』の鑄造を詳細に描く、『石巻鑄銭場作業工程絵図』¹⁰⁾で

は、「砂枠で銅銭を鑄造する「型場」(錢吹所)が、一つの錢座に十四乃至二十あり、一型場の一日の鑄造量は五貫文を最高とし、一個の型では約二百個の錢を鑄造する」と解説されている。一つの砂枠で五千枚、石巻の場合は絵図では十一ないし十二の型場が描かれているから、一日六萬枚が最大量となる。これは宋代の上例と比較して五分の一弱に過ぎないが、それでもかなりの額といえよう。話を戻すと、私見では、毎日二十八萬枚というようなノルマは、一見不可能に見えても、それなりの工夫、方法により、数字的には達成されていたと考える。ただしそれは、年十萬貫、二十萬貫と定められた規定額に到達しているというだけで、個々の銅銭の精度は必ずしも均質・均等とは限らない。そうした所に宋錢問題を調べる一つの面白さが隠れているように私は思っている。西歐の合理主義、あるいは現代日本の感覚で、生真面目にそれを扱えば、その間の事情は理解できなくなるだろう。とまれ、ここはその指摘だけに止め、その詳細は後章に回すこととしたい。このような大量の銅・鐵銭を鑄造する方法としては、どう理屈をこねてみても、翻沙法以外には想定できないであろう。

それなら宋代の「翻沙法」の詳細が判明しているかとなると、必ずしもそうではない。日中両国の銅銭の説明書や、博物館などの展示目録などでは、大抵上記「天工開物」を引用するのが通例で、その内容は残念ながら通り一遍になりやすい。唐代は暫く措き、十世紀後半の宋代から、十七世紀半ば近くの『天工開物』まで、六百五十年以上の歳月を経過しているからには、翻沙鑄銭の方法にも少なからぬ変化が生じていた筈である。そのことは、日・中の違いはあっても、飛鳥・奈良時代の、「富本錢」や「和同開珎」の土製の残存范型や、下って石巻鑄銭場での翻沙法の作業過程などを参考にしても明らかであろう。同じく砂型といって

も、日本と中国で使用する用土やその配合には当然相違が予測されようし、地域や時代による異同も考慮に入れねばなるまい。舶載鏡と倣製鏡の精粗の問題に関して、考古学の研究者の中に、鑄型に使う「土」の違いを指摘する人がいる。貨幣の場合も、「和同開珎」の冒頭からそうした問題は存在していたろう。「開通元寶」の砂土の範は発見されぬのに、「和同」の方は幾つかの土範が残存しているところからも、それは推測できる。また枠内の砂土に母錢を並べてから、石巻のように軽く松根に点火して上下の砂型をあぶり固めるといった、各時代独自の技術的工夫も当然多様だったろう。それらの詳細を、中国の文献に期待することは無いものねだりに等しいが、かといって何でもかんでも『天工開物』で済ませるのはご安直に過ぎよう。また、現代の技術を駆使して、当時の銅錢の鑄造を再現することが、民博や歴民博はじめ、各処でしばしば試みられるようになった。ただそれはあくまで一つの参考、研究を進める手段に過ぎず、それを宋代の翻沙法と安易に重ね合わせるにはゆかないだろう。以下、文献と残存遺物、これまでの研究成果を踏まえて、宋代鑄錢の実態にできる範囲で接近を試みたいと思う。

第二節 鑄造までの過程

翻沙法は最も単純化すれば、砂型に捺す「母錢」あるいは「錢母」と呼ばれる模型を必要とする。従って「母錢」をどうして作るのかがまず問題となる。この場合、内外の研究者は、「例由戸局、先鑄祖錢・母錢・制錢各一文、頒發各省、令照式鼓鑄之」(例として戸局より、先に祖錢・母錢・制錢各一文を鑄し、各省に頒發し、式に照らしてこれを鼓鑄せしむ)と言う『皇朝文献通考』(錢幣考)に見える、清代の記事を引くのが決まりである。ここでは、「母錢」のほかに、「祖錢」と「制錢」が登

場するが、そのほかにも、清朝後期では、「祖錢」の上に「錢樣」、「制錢」の下に「樣錢」が加わり、一般に流布する流通銅錢鑄造のために、「母錢」を含めて五種類の特種貨幣(模型乃至母錢)が準備されねばならなかった。それに遡ること六七百年の宋代ではどんな様子だったろうか。中国泉幣学界で重きをなす戴志強氏は、『中国錢幣』一九九〇年第二期に、「兩宋木質母錢鑄現和研究」なる論文を寄せられているが、副題に「兼論宋錢的鑄造工藝」とあるように、宋錢の鑄造問題にも論及され、示唆に富む内容を持つ。その中で氏は、兩宋鑄錢の全過程が、一、錢樣の審定、二、樣錢の頒部、三、祖錢の刻成、四、母錢を刻鑄、五、子錢の鑄造、からなることは確実で、この工程を経て、正式に流通錢貨となると述べられている。この五者のうち、前二者は宋の朝廷とその主管部門が、後三者は各地の鑄錢監が受け持つと区分される。私もこの推定に大筋では異論はないが、幾つかの問題については、なお論及すべき余地が残されているように感じられる。特に前二者については、清朝ではその事例が比較的豊富である。すなわち、最初に象牙に彫刻した「錢樣」が作られ、皇帝が裁可して「祖錢」とされる。「祖錢」は良質の銅に彫刻されて、各地の鑄錢監に配られる。それを手本に多数の「母錢」が原則として刻まれ、それをもとに大量の流通銅錢が鑄造される順になる。戴氏の論文でも、宋代すでにそれに近い流れが出来上がっていたことは指摘されているが、象牙の樣錢の実物は残っていないうえ、それを確実に裏付ける文献も必ずしも十分ではない。『玉海』卷一八〇には、南宋の紹興元年八月十八日のこととして、「工部進真篆当二小平銅鐵錢牙樣、詔下鑄錢司」(工部、真・篆の当二・小平の銅・鐵錢の牙樣を進む。詔して鑄錢司に下す)という記事が見える。これは工部が、新しい年号である「紹興」をつけた楷書と篆書両方の、これまた小平・折二兩

種の、銅・鐵錢いずれにも使用できる「牙様」を皇帝の御覽にいれ、裁可されて、当時の鑄錢の責任官署であった鑄錢司に下された、という内容である。この記事だけでは、「牙様」を象牙彫様とは断定できないため、象牙の様錢が宋代に存在したかどうかは不明とされてきている。私自身は象牙を使った工芸品は宋の宮廷には溢れており、そうした宮中工芸の製作所である文思院には、象牙彫刻専門の達人が多数いたから、年号の変わる度に、数種類の象牙の様錢を刻むことなど朝飯前の仕事だし、また「牙」とあれば象牙以外は考えられないと思うが、学界には慎重な先生方が多く、まだ決着はついていない。そこで、これまた決定的と言えないかも知れぬが、これまで不思議に中国でもとりあげられなかった史料を提示してみたい。

『宋史』卷一七九、食貨志、會計（『宋會要』職官二七—四、太府寺、熙寧元年十月十三日）には、次のような神宗の発言を載せる。「比閩内藏庫籍、文具而已。財貨出入、初無閔防。旧以龍腦珍珠、鬻売於權貨務、數年不輸直、亦不鈎考。嘗聞、太宗時、内藏財庫、每千計、用一牙錢記之。凡名物不同、所用錢色亦異、他人莫能曉。匣而之置後閣、以參驗帳籍中定數。晚年出其錢、示真宗曰、善保之足矣」（比内藏庫の籍を閲するに、文具たるのみ。財貨の出入、初めより閔防なし。もと龍腦・珍珠をもつて權貨務に鬻売せしに、數年値を輸さず、また鈎考もせず。かつて聞く、太宗の時、内藏財庫、千計ごとに、一牙錢を用つてこれに記す。凡そ名物同じからざれば、用うるところの錢の色もまた異なり、他人曉かなるあたわず。匣してこれを後閣に置き、もつて帳籍中の定數と參驗す。晚年その錢を出だし、真宗に示して曰く、善くこれを保すれば足れり、と）。

宋代の國家歳入は、皇帝直屬の財庫内藏庫に入る部分と、大藏省に相當する三司（のち戸部）に屬する左藏庫に入る部分に大別されていた。

後に触れるが、新しく鑄造された銅錢も、その大部分はまず内藏庫に納され、皇帝の命令という形式で、左藏庫その他にまわされる。此処にも記されているように、香藥や珍寶を筆頭とした外国からの輸入品や、専売品として、まず内藏庫に納められ、そこから然るべき筋、たとえば權貨務に払い下げられた。このため内藏庫は、皇帝の別藏と呼ばれて、その私物と変わりなく、内容や會計は外部からは窺えず、また管理も宦官を中心とした、皇帝の息のかかった連中に限られていた。国初から百年の歳月を経て、改革に本気で取り組んだ六代皇帝神宗は、内藏庫の管理があまりに弛緩しているので、太宗の話を持ち出して引き締めを図った。その太宗の逸話の中に「牙錢」が登場する。内藏庫は金銀、珠玉香藥、錦帛、錢の四庫に区分されるが、たとえば金銀珠玉で十、錦帛で十四に細分され、当事者以外は實際の會計はわからぬ仕組みであつたろう。そこで太宗自身が簡単に内藏庫の中身を確認するために、牙錢の利用を思い立つ。千単位になつて品には、一枚の牙錢をつけた恐らく紙か木の札に簡単な事項を書いておく。その牙錢は物品の相違により、色づけして区別の利便を図る。様錢としての牙錢は、宮中の工房で作られる以外は考えられないから、見本ともども御用済みの牙錢も、宮中の外に出ることはあるまい。かといつて捨てたり、粉砕したりもできず、皇帝が記念品として保存する価値とて薄いだらう。かくして同じ皇帝の財庫の収納品の目印用に使われ、小箱にしまつて御座所近く置かれたのは、まさしく適材適所というべきだろう。ここで区別のため色をつけると書いてあるのも、牙錢がアイボリー色で、いくつもの色付けが可能だったからを物語る。もしその数が足りなければ、類似の牙錢など幾らでも作れよう。そのように推測を重ねてゆくと、少なくとも宋初第二代皇帝の太宗の時には、清朝同様に、象牙の「錢様」が作られていたことは

ほぼ間違いないと推定できる。「牙銭」の二字は、宋代では、牙儉（仲間）と関係した用語として時々使用される。しかしここで挙げた「牙銭」はまず間違いなく象牙製の「銭様」の意味である。「牙」は象牙以外を指す可能性があると反対されても、ではこのような用途に使われる、どんな動物の牙が存在するのだろうか。

清朝の制度では、何種類かの牙銭の中から、皇帝が選別した一枚を元に、「祖銭」、「母銭」、「制銭」各一枚を作り、それを各省に頒布する、とある。宋代でも、皇帝の裁可をうけた牙銭を、中央の文思院で、熟練者が銅などの金属に精密に彫刻して各地の鑄銭監に配り、それに基づき、各鑄銭監でまず母銭を作ると想像はできよう。しかし実際には、清代のような手続きはとらず、「牙銭」の文様が各鑄銭監に渡される程度ではなかったろうか。そうした文様から母銭が刻され、実際に砂型に並べる数多くの、日本という「種銭」を鑄造し、それを使って「流通銭」が大量生産される、という筋道を想定してほぼ誤りあるまい。ところで、『大辞典』を始め、宋代の各種銭譜や論文では、この過程での用語上、やや統一性を欠く部分や、過去の日本の泉幣家とのズレも感じられる。たとえば、上記「種銭」は日本語で、中国の人は使わない用語である。要するに母銭と総称できる一貨幣の原型を指す用語が、幾つかに分けて任意に使用されるために、若干の混乱あるいは概念の不統一が生じることになってしまふ。

「母銭」とは、現代の銭幣事典の定義では、「鑄銭の時、まず極めて精密な銭を鑄造し、それぞれを各爐に分発、用いてもって泥模に印して鑄銭するもの」とされ、清朝の小平銭の例を挙げて、「およそ鑄銭の法、まず淨銅をば整鑿し、二銭三分となしたものを祖銭という。随いて重さ一銭六、七分不等なるものを鑄造し母銭といい、しかるのち制銭を印鑄す」

と記されている。前者の説明では、「極めて精密な銭を鑄造し」とあるだけだが、後者では「(牙銭を)銅に彫刻したものを「祖銭」と呼び、それを本に鑄造したものが「母銭」で、それを使って流通銭を作る」と解説する。この限りでは「母銭」は、本格的な大量鑄造のときの「種銭」の意味となる。もし「母銭」が鑄造銭ならば、泉幣家が常用する「雕母」は「祖銭」と同列に見做さざるを得なくなり、事実そうした定義で書かれている論文もある。その一方で、「雕母銭」という表現もあり、「母銭」が常に鑄造母銭と言いくいケースも出てくる。さらに「母銭」をひっくり返した「銭母」のほか、「鐵母銭」あるいは「鐵母」などの用語が重なり合うと、概念の混乱が生じやすい。現に先の戴志強氏の解説でも、「祖銭の刻成」に対し、「母銭の刻鑄」と表現が変えてある。刻成が彫刻であることは明白だが、刻鑄は微妙な熟語で、彫刻・鑄造両者があり得るようにも受け取れる。こうした点を勘案して、本稿での用語を、主観的であるが次のように統一しておきたい。牙銭を模して作られた祖銭それ自身、もしくは祖銭を手本として彫刻された、すなわち非鑄造の母銭はすべて「雕母」と呼ぶ。その特色は、1. 材料の如何を問わず、技術者の手で刻成されており、鑄造品でないこと、2. 普通には「母銭」や「流通銭」よりも、径や厚さが僅かに大きく、重量も重い。つまり、これを砂型に捺して鑄造すれば、必ず鑄縮みが生じ、比較すれば鑄造銭は心持小さ目となってしまふ、の二点が挙げられよう。従って、「雕母」から砂型で丁寧に鑄造され、「流通銭」の母型として使用される鑄造銭はすべて「母銭」と呼び、混乱を避けるため「銭母」の語は使用しない。当然ながら、日本の江戸時代に鑄銭場で使う「種銭」は、この「母銭」と同義になる。「母銭」は「雕母」よりやや小さく軽く、「流通銭」はさらに鑄縮みがでるため、いっそう小ぶりになる(図7)。

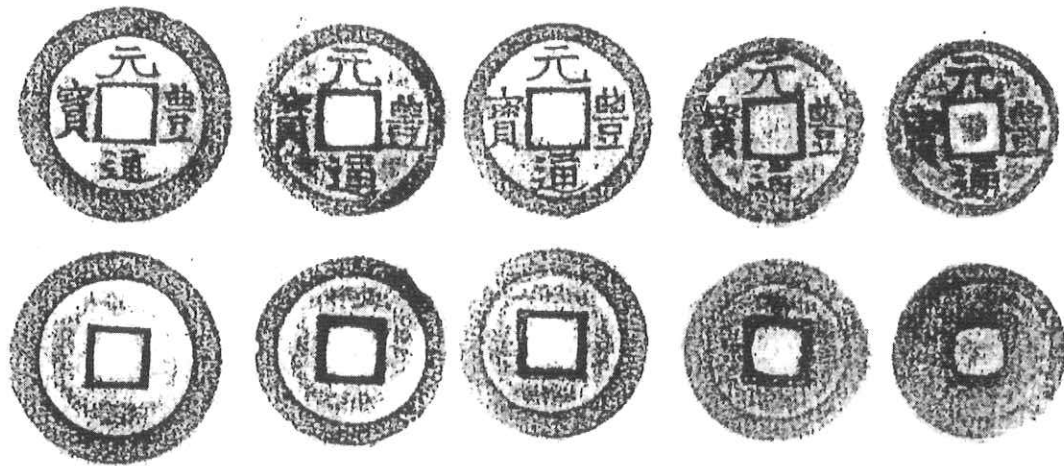


図7 雕母・母銭（種銭）・流通銭の実物例（左から）

この「雕母」と「母銭」については、日中両国の泉幣家が強い関心を持ってきた。新しいところでは、戴保庭氏の『足齋泉拓集珍』に、宋銭の珍品二百六十種を収録するうち、「鐵母」が約半数を占めるし、『大辞典』の南宋部分だけで、「鐵母」を百三十種以上採録している。「鐵母」は後述のように鐵銭を鑄造する時の銅の「母銭」だが、これら「鐵母」がすべて鑄造銅銭なのか、中に「雕母」が混入していないかといった点は、必ずしも十分な説明がなく、日本で図版だけを眺めていてもわからない（錢卓「試談雕母母銭の鑒別」、『中国錢幣』一九九三（一））。

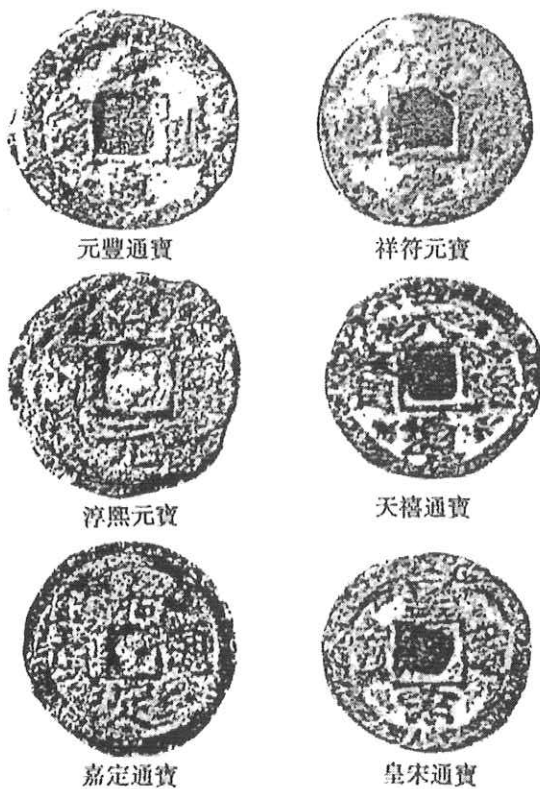


図8 廣元発現・四川鐵銭木雕母

第三節 雕母をめぐる
 ここでとりあげる「雕母」は、中央から送られた、その時々「錢様」に従い、各鑄銭監の技術者が刻んだ、最も重要な母型銭である。材質により相違はあるにせよ、中国の泉幣家たちは、それを「文字は細瘦・高挺、字口と内外郭は深峻」と形容する。「雕母」の素材としては、銅や錫が主流だったろうが、一部に木彫があったことは興味深い。一九九九年、四川省最北端の廣元の嘉陵江大橋下流の川底から、採沙船が北宋時代の鐵銭を引揚げた。その中に何種類かの北宋時代の木質雕母が混じっていた。それからほぼ一年後、約五〇〇メートル下流で、今度は南宋時代の鐵銭とともに、四種の南宋年号を持つ木雕母が発見された。これまで、木彫の雕母の存在は想定されていても、実物は殆ど知られていなかった（図8）。これより先一九九〇年に、陝西の臨潼県でも、北宋銭に

混じって「元祐通寶」の木雕母が発見されており、廣元のこの資料は、鐵錢使用地域に、ある程度広範かつ持続的に木雕母が行なわれていた証拠とできるであろう。この廣元の木雕母とそれに関する興味深い問題が、戴志強氏の上記論文で扱われている。¹⁴⁾

現在の廣元は、宋代の利州綿谷県に当たる。宋代の四川四路のうち、利州路は甘肅・陝西と境界を接し、東は漢中に及ぶが、所謂蜀の棧道が通る山岳高峻の地帯を含む。そのうち、現在に至るまで、最も重要な交通路が、涇水上流の寶鶏から分水嶺を越えて南の嘉陵江最上流に達し、利州に下るものである。ここから西南に向かえば成都、川沿いに南下すれば、東川の各州から重慶に達する。モンゴル蒙哥可汗の侵入は、このルートを通った。さて、この付近の鑄錢監は、北宋真宗の景德三年（一〇〇六）という早い時期に、興州順政県（のち沔州略陽）に濟衆監の名で鐵錢監が設置された。この監の鑄錢量は、三万から五万貫で、成都の南にある眉州錢監五十万貫の十分の一に過ぎず、その鐵錢は、興州周辺からせいぜい興元府（漢中）一帯をまかなっていただけであろう。最初に王仕國氏が報告したところでは、木雕母は、「景德元寶」「祥符元寶」「天禧通寶」「天聖元寶」「皇宋通寶」「元豐通寶」「聖宋元寶」などであるが、発見当初、王氏は北宋の木錢を二十枚あまり手にし、古物商もやはり二十枚ほど掻き集めていた由である。このような点から、一応、北宋時代の大半、この鑄錢監では木の雕母が使用され続けたと考えることができる。ところで、靖康の変前後、この一帯は金軍との戦いの第一線となり、鑄造どころではなくなつた筈である。秦檜の和議が締結され、淮水と大散関を結ぶ北緯三四度の線が境界と決まると、今度はこの境界線の要衝に大量の軍隊を駐屯させねばならず、彼等の給料や軍需物資、糧食の支出その他諸般の理由により、鐵錢の需要が格段に高まる。とこ

ろが、興州濟衆監は大散関に近過ぎて危険である。そこで、軍隊駐屯地と遠くない、相対的に安全な場所に錢監が移される。それが利州綿谷の紹興監にほかならず、濟衆監より嘉陵江を約一〇〇キロ下つた場所にあたる。当然、一〇〇キロもの下流から、五〇〇メートルほどの間隔で、北宋と南宋の木の雕母と鐵錢が、行儀良く発現するのは何故かという疑問が生じるだろう。それについて戴氏は次のように説明する。「利州綿谷に紹興監が置かれたことは、王之望の『漢濱集』で裏づけられる。濟衆監の設備や鑄錢工などと共に、そこに保存されていた歴代の木雕母や鐵錢類も、一緒に紹興監に移された。恐らく紹興監は嘉陵江に近く、何らかの原因で、北宋と南宋の収蔵資料が、別々に川に投棄されたことであろう。」戴氏は言葉を濁しておられるが、何らかの原因とは蒙古軍の侵入のほかにはあるまい。私もこの推定は可能性が高いと思う。ただ、「南宋時期の利州路錢監では、すべて木で母錢を雕して模と為し、錢幣を鑄造していた」と言われるのに関しては、こと南宋に関しては修正を要するのではなからうか。利州に錢監のできた紹興半ばであるが、その当時すでに、「紹興通寶」の小平、折二兩方の鐵錢の裏面に、「利」の刻印を持つものがあり、それが「淳熙」「嘉泰」「開禧」「嘉定」の各「元寶」の鐵錢にも散見する。さらには「嘉定之寶」の折二錢、「大宋元寶」の折三錢などの鐵錢には、ご丁寧にも「利州行使」の四字が刻まれている。いま『大辞典』などで見られる木の雕母は、いずれも「折二」「折三」の大型錢で、小平錢の雕母を目にすることはできない。『朝野雜記』などの文献では、紹興監で大・小錢が鑄造されていた記述があり、『大辞典』にも、「利州・一」と裏面の刻印を持つ「嘉定元寶」小平鐵錢を掲載しているから、その母錢が木ではなく銅製だったことが判明する。もし木雕母と「鐵母」が並存していたとすると、そこから、予想外の新し

い事柄を引き出し得るかも知れない。

木質雕母以外に、両宋を通じた廣元河底の遺物には、通常の鐵錢鑄造で必ず用いられると想定される、銅製の「鐵母」（鐵母錢）は全く含まれていない。そこで木の雕母と翻沙鑄錢がどのように繋がっていたのかという疑問が生じる。王氏から戴氏への報告では、雕母と鐵錢の他に、通常の鐵錢より大きく、厚く、黒光りがして錆がなく、そのくせ普通の鐵錢より軽い貨幣が少数含まれ、王氏はこれを「夾錫錢」かと疑っている¹⁵。それにヒントを得た戴氏は、以下のような仮説を提示する。「錫鋌石には必ず鐵が含まれている。錫を精鍊する時、その副産物として、「硬頭」と俗称される鐵と錫の合金を生ずる。錫の含有量は通常は一〜三割であるが、鐵製品鑄造の絶好の原材料で、鑄造の性能がよく、成型は容易である。河底から發現した、この一種の特殊な錢幣は、「硬頭」を材料として鑄成した「鐵母」ではあるまいか。戴氏が論文を發表された段階では、まだこの「鐵母」の成分分析や、写真そのほか実物の詳細は知り得ないけれども、戴氏の想定が正しい可能性は高いと思われる。のちに触れるように、「母錢」を作るための「錫」の雕母の存在は、普及度は別として、宋代すでに確実に存在した。時代は下がるにせよ、日本の「寛永通宝」鑄造の種錢では、明白に錫母で彫刻されている。そうした点を併せ考えると、この「硬頭」製の「鐵母」は、錫の雕母の範疇に入れて然るべきであろう。

宋代の「雕母」のうち、各種錢譜を通して最も頻繁にお目にかかるのは、「鐵錢母」あるいは「鐵母」と呼ばれる、鐵錢を鑄造するための銅製の鑄母であり、これは銅に彫刻して作られるものと、通常は考えられている。銅を中心にして經驗的に作られた合金は、比較的柔軟で、精密

な雕母を作り易いほか、砂型から抜き易いのが、その理由である。「鐵母」を砂型に捺し、鐵液を流し込み、鐵錢を鑄造する。最初にできた、相対的に良質な数多くの鐵錢を使用して、次に大量生産が行なわれる手順となる。鐵錢の場合は、鐵液の流れが不均等だったり、毛刺、砂眼、疤痕などの不都合が生じ、銅錢ほど綺麗にできないうえ、重く錆も出てくる。そのためもあってか、両宋を通じて、鐵錢行使地域では銅の「鐵母」（雕母）がかなり作られたようで、稀少とされつつも、百三十以上の「鐵母」の拓本や写真を見ることができるといえる。

四川鐵錢の「鐵母」は、宋初は少ないが、仁宗「慶曆重宝」以降の、陝西における、折二錢を中心とした「鐵母」は比較的多く、出土地もある程度特定できる。とりわけ、「元豐」「元祐」「紹聖」「元符」、そして「聖宋」などの、行書と隸書の二種がある折二鐵錢は、いずれも外輪が闊く、字も明晰で、堂々たる姿をしている。「聖宋元寶」を例にとると（図9）、隸書の「鐵母」では、幅三・一四センチ、穿〇・八八センチ、重二二・三グラム、行書の「鐵母」三・五、〇・八一、一三・八に対し、これと酷似した鐵錢本体は、隸書幅三・三センチ、穿〇・八一センチ、重二二・三グラム、行書三・二七、〇・八、一二・一となっている。ここに挙げた「鐵母」から、該当鐵錢が直接作られたとは言えないけれども、およその見当はつくであろう¹⁶。北宋末の崇寧、大觀、政和という時代は、蔡京の貨幣政策の影響もあり、大型錢が鑄造され、とりわけ陝西を中心に、徽宗自身の瘦金体の錢文を含めた折二鐵錢が大量に鑄造された。日本には殆ど渡来してこなかったそうした鐵錢の実物が、中国における近年の開發の影響で、各地から夥しく発見され続けている。それと同時に、その「鐵母」も我々の目に触れる機会が多くなった。

十二世紀以降の南宋になると、これまで通りの四川鐵錢区以外は、金

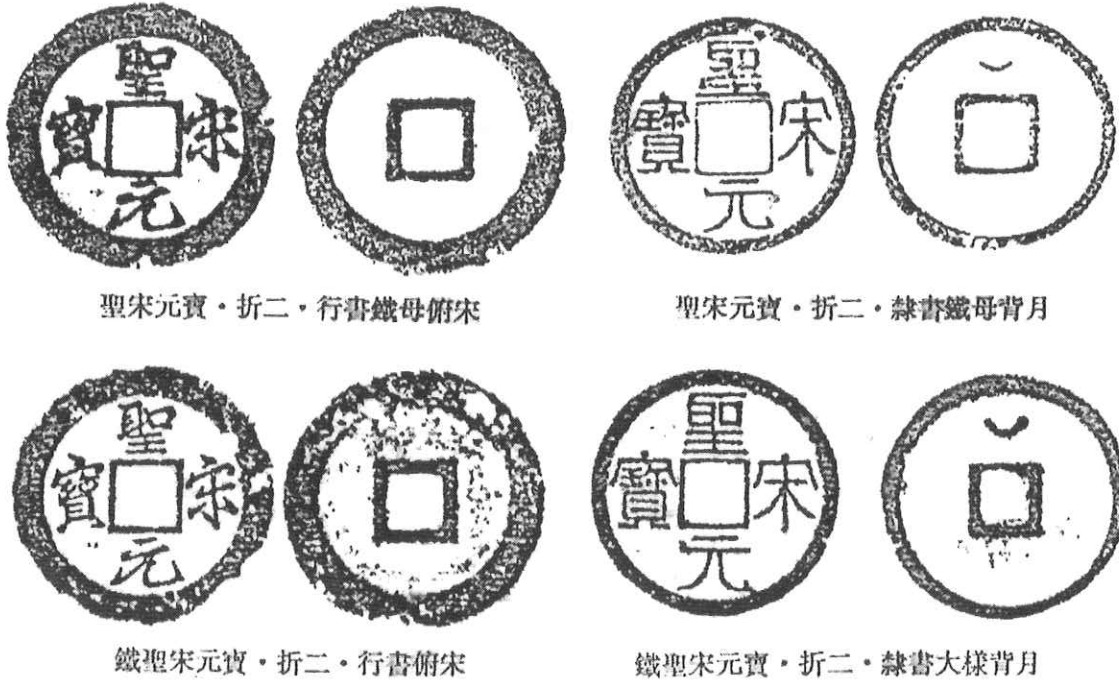


図9 「聖宋元寶」の鐵母(上)と鑄造鐵錢(下)

領となった陝西の代わりに、揚子江と淮河の間、すなわち安徽、江蘇の江西北部、湖北の一部が鐵錢区とされる。ここでは安徽、湖北の幾つかの鐵錢監で鑄造された、監名と年号を裏面に刻んだ鐵錢が、これまた水中などから多量に発見され、ほぼ全容がつかめるようになっていた。そうした鐵錢の「鐵母」も、稀にはあるが錢譜に登場する。また南宋後半、蒙古侵入の前夜になると、四川で各種の大型鐵錢が濫造されるが、その「鐵母」も知ることが出来る。なお、鐵錢鑄造と関連した用語に、「鐵範銅」(鐵範銅錢)あるいは「銅範鐵」(銅範鐵錢)などもあるが、煩瑣に巨り問題も多いので、ここでは省略しておく¹⁷⁾。このように書いてくると、鐵錢鑄造のための鐵母としての「鐵母」銅錢の存在は、比較的詳細に跡付けられるが、それなら肝腎の銅錢の「鐵母」の方はどうなっているか、という疑問が出てきよう。しばしば引用する宋代の諸錢譜には、「鐵母」ばかりが目につき、南宋を通じて、鐵錢より遙かに広範囲に、かつ主要経済地域に流通していた銅錢の「鐵母」についての記載が殆どないのは何故であろうか。

参考のため、清朝の「鐵母錢」を一瞥してみよう。宋代より遙かに整備された政府の鑄造組織を持つこの異民族王朝では、各皇帝一世一代の年号を冠した銅錢が鑄造され、裏面にはその通用価値のほか、満州語で該当各省の鑄造錢監名を具備する。念のため、鮑康『大錢図録』の記述を引いておきたい。「每改元鑄新錢。先選至潔之象牙、刻作錢樣、呈錢法堂侍郎、然後以精銅鑿成祖錢。其穿孔非錢局人不能鑿。再用祖錢沙鑄母錢」(改元ごとに新錢を鑄る。先に至潔の象牙を選び、錢樣を刻みて、錢法堂の侍郎に呈し、しかるのち精銅をもって祖錢を鑿成す。その穿孔は錢局の人にあらざれば鑿するあたわず。再び祖錢をもって母錢を沙鑄す)。ここでは、「祖錢」と「鐵母」が同一のレベルのもので、それによ

り砂型で母錢(種錢)が鑄造される点が明白に記されている。清朝貨幣の論考では、しばしば「母錢」の熟語が使用されるが、精銅に彫刻された「雕母」と、それをもとに鑄造された、「流通錢」を大量生産するための「母錢」は区別せねばならぬ。宋代はさて置き、元・明時代のこうした銅錢鑄造のための「雕母」は、鉛製を含めても数枚に過ぎない。清代になると、やはりその管理体制の整備、具体的には寶泉局、寶源局や各省鑄錢監での保存などが行なわれ、清末の混乱で少なからぬ民間流出があつたにせよ、なおかなりの「雕母」の実物が現存する。北京の故宮博物院九十四枚、上海博物館の百三枚などは良く知られている。それらの合計は約四百枚あまりとされるが、なかでも「咸豐」年代の各式雕母は百八十枚を超え、全体の四割に達している。¹⁸⁾

こうした知識を踏まえ、宋代銅錢の基本となる「雕母」につき検討してみよう。すでに唐初、「開通元寶」のあるものは、芸術作品と呼ぶに相応しい美しさと風格を備えている。唐一代三百年、実質は低下しても、その外形が遵奉されたのも不思議はない。その余波は日本にも及び、長屋王邸の井戸から発見された「和同開珎」(新和同)は、他の和同開珎を圧倒する品格を持ち、「開通元寶」を意識した、銅の「雕母」であることは間違いないであろう。漸く統一の氣運に向かう五代の末、後漢、後周そして宋初と、「漢通元寶」「周通元寶」「宋通元寶」と、錢文は異なるが、すべて「開通元寶」に摸した銅錢を鑄造したところにも、その影響力の強さが窺える。さすれば、唐初から存在した銅の「雕母」刻成技術は、その衰退は一時的に起つても、全体として見れば、継承・定着していたと考えて大過あるまい。何よりも、鐵錢の分野では、上述のような銅に刻した「鐵母」が多数残存し、金属「雕母」の製作が不断に行なわれていたことは疑いない。戴志強氏は『蜀中廣記』卷六七に書き留めら

れた、四川交子務の人員構成を参考にし、たとえば上記紹興監の「雕母」技術者は一、二人と推定しておられる。唐代と異なり、宋では改元のたび毎に錢文が変更され、多くは「通寶」と「元寶」があり、さらに二種類以上の字体の相違が加わる。既述のように、南宋の斬春監では、一日三百人の労働力で、年間二十七万緡の鐵錢を鑄造したとされる。この中には雕母職人は含まれていないと思われるが、廣元と較べてその人数はより多かつたと想定できる。それならば年間平均四十万緡に達する、饒州永平監を始めとした江、池、建などの大錢監では、十人以上の雕母彫刻者がいても不思議ではない。特に太宗御書の錢文を筆頭に、元豊以降の行書、あるいは篆書、隸書、そして徽宗瘦金体の「雕母」などは、練達の彫師が活躍する場であつたらう。すべての錢監にそれができたわけではあるまいが、中心となる幾つかの銅錢監の銅錢には、宋代芸術品の一翼に加えることができる優品が含まれているといつてさしつかえあるまい。

そうした背景を考慮に入れ、何故宋代には、「鐵母」のような形で銅錢鑄造のための「雕母」が殆ど発見されないのかを想像してみたい。宋代の銅錢監は、長江中流の安徽・江東に跨る饒州(永平監)、江州(廣寧監)、池州(永豊監)と福建建州の豊国監の四監に代表される。¹⁹⁾いずれも太宗・真宗治世の十世紀末には鑄造を開始しており、唐代以来の鑄錢の伝統と実績を持ち、五代南唐によつてそれが曲りなりに継承され、新生の宋王朝に引き継がれる経緯をとつたと見て間違いあるまい。建州を除くと、いずれも周辺に幾つかの銅鉞があり、長江の水運を簡単に利用でき、鑄造新錢を容易に国都開封府に船運できる共通点を持つ。特に饒州永平監は、屈指の銅産地である信州鉛山県に近接し、江・池両監とともに、宋代銅錢監の中核を形成していた。その鑄錢額を『宋史』卷一

八〇、「食貨志」の錢幣で概観すると、四監合計で、太宗至道中（九九五〜七）八十萬貫、真宗咸平三年（一〇〇〇）百二十五萬貫、数年後の景德年間すなわち十一世紀初頭には百八十三萬貫に達し、以後は最低百萬貫の線を保持する。神宗時代、元豊三年（一〇八〇）の十七監で五百六萬貫という狂気に近い鑄錢額のうち、どれだけをこの四監が負担していたかは不明だが、徽宗崇寧二年（一一〇三）には百三十萬餘の数字が残っている（『宋会要』食貨一、錢幣雜錄）から、北宋一代を通じて約百二十五萬貫の定額で推移していたことであろう。なぜこのようなことに拘るかという点、私は仁宗時代の陝西における、銅錢と併用した鐵錢使用や、治平から元豊に至る異常な銅・鐵錢鑄造をやはり特別な事態と考えている。それは經濟の高度な發展により、大量の貨幣を必要としたのではなく、むしろ軍事的、政治的理由により、為政者が無理矢理に作り上げた、その限りでは「貨幣經濟」のお芝居に近いとさえ思っている。銅の産出地だからといって、遙か僻遠の廣南韶州に永通監を設け、運搬の利便を考えて惠州にも阜民監を作り、熙寧には八十萬貫から百六十萬貫（内折二錢五十萬貫）、徽宗の大觀時代でも、永通で大錢三十二萬、小平錢八萬、阜民では三十五萬という多額の數値が残されている。そうした急増あるいは僻地の錢監で、制度で決められた手順に従い、良質で均等な銅錢が鑄造されていたとは、私にはどうしても信じ難い。要するに、牙錢↓銅雕母↓母錢（種錢）↓流通錢といった鑄造過程は、宋代では伝統ある四監でさえ遵守されていたかどうか怪しいが、雨後の筍のように増設された總計十四にもなる錢監では、原則は原則として、鑄造額のノルマを達成するため、なり振り構わずひたすら鑄造に励み、恐らく銅の「雕母」を一定數作るといような面倒なことは、殆どしていなかったように想像される。繰り返しになるけれども、四大錢監の年額

が各三十萬貫として、一監あたり年間三億枚、一日にすれば八十三萬枚という天文学的鑄造量になる。さすれば砂型にならべる「母錢」だけでも気の遠くなる數になる。その「母錢」を鑄造するために、少なからぬ「雕母」を銅で刻む工程はできれば省きたかったであろう。四大錢監では、錢文の字を彫るのに熟達した工人が、休む暇なく「雕母」を彫り続け、それらを砂型に埋め込み、それで「母錢」を作り、「母錢」をもとに「流通錢」が鑄造されるのが建前であった。しかし、磨耗した「雕母」は日常的に補充せねばならず、改元ともなれば、大急ぎで新しい錢文を彫る必要が生じる。かくして、銅錢鑄造に際しては、鐵錢の「鐵母」のような「雕母」は省略され、いきなり「母錢」が作られる。それとて勘ぐれば新鑄の銅錢のうち、鑄上がりのよいものに手を加え、「母錢」に流用し、時間やコストの節約を図る方法も十分考えられる。私は実際にある程度の數の宋錢に触れてみて、それが世に流布している図録類や写真とかなり違っていることを知って愕然とした。書物で見る宋錢は、拓本も含めて、一級品ばかりと言える。だがそうした一級品は、宋錢全体からみれば、ホンの一部に過ぎないのではないかと、今の私は思っている。上記石卷の「寛永通宝」鑄造場の一日のノルマは六萬枚、宋の四大錢監は一監八十三萬枚である。石卷の鑄錢場では、製品の管理が厳しく、少しでも疵や不都合があれば、排除されて、再鑄造の原料に戻されている。ところが宋錢の方は表と裏がズレていても一向に気にする様子もなく、表は一応形を整えているが、裏は輪郭や穿の形などまことによい加減なものが多く、製品管理などがなされていた痕跡は窺えない。途方もない鑄造定額に達するためには、そんなことに構って居られぬのが実情だったろう。正直な日本人は、宋代の權威ある文献や法律に規定があれば、その線できが進んでいると考えがちである。しかし、少し裏

側の事情を探ると、規定とは看板で、予想もしなかった現実が背後に浮かび上がってくるところに、中国研究の面白さが潜んでいると言えそうである。

ここまでの推論は以下のように纏められる。宋代、銅・鐵の穴あき銭は、まず象牙で彫刻した牙銭を試作して皇帝の裁可を得、多分文思院で牙銭を銅に彫刻、各錢監に式様（様銭）として配布する。各錢監ではそれから一定数の「雕母」を作る。「雕母」を砂型に入れ、「母銭」（種銭）を鑄造し、はじめて「流通銭」を大量生産する。しかし、宋代は行政、軍事、経済あらゆる面で、唐代とは比較にならない拡がりを持つ。特に国都開封府は、官僚、事務関係者、軍隊が集中し、家族やその周辺の人間を加えて百万都市に膨れ上がっている。その官僚や軍隊には、給料の一部が必ず銅銭（一部の地方では鐵銭）で定期的に支払われたから、宋朝の全国統一の進展に伴い、銅銭の鑄造量は饅登りに上昇する。かくて、十一世紀に入った三代皇帝真宗の時代には、鑄錢額は年間百万貫を軽く突破する。こうして、少なくとも国都を始め、各路の中心となる人口十万程度の大都市内では、あたかも日本の江戸や上方のように、銅銭の流布が定着する。さらに、北、西の異民族との抗争で、多くの軍隊が山西・陝西・甘肅に駐屯すると、彼等への給料支給のため、鑄錢量が増加し、従来それら地方にはなかった鐵銭で通貨が補われる。さらに、十一世紀後半、王安石・神宗による改革「新法」が実施されると、貨幣への比重が増大し、一部農村からもそれを徴収することになる。その結果、神宗の元豊三年には、十七の錢監で総計五百六万貫という銅銭鑄造のピークに達する。太宗初期の五十万貫から、百年の間に鑄造量が十倍になる理由は、経済的というよりも、政治的・軍事的な上からの政策の色彩が強い。原料の枯渇を始め、幾つかの理由で、それ以後の貨幣政策あるいは

通貨事情は次第に行き詰まり、変転を余儀なくさせられる。そのことは後回しとして、以上の理由により、各鑄錢監ともフル回転の操業を続けなければ、割当額を達成できなかったであろう。そのためには、いろいろな工夫があるが、さしあたりは「雕母」の過程を省略したと推定できる。鐵銭の場合は、溶解した鐵を均等に流し込むためには、銅製の「雕母」で砂型を作る工程が不可欠だが、銅銭では「雕母」は必須のものではない。「母銭」と「流通銭」の間には、外觀や大きさと重さに当然差異があるが、「母銭」として磨耗してくれば流通過程に混入したであろうから、区別はつき難く、あるいはそうした中に、稀に「雕母」が混じっていないとも限るまい。如上の事柄は、さほど重要なことではないと思われるかも知れない。しかし私は、以下に述べる「活字字母」や「版別」、そして「對錢」といった、宋代の貨幣関係の未解決の問題を考える時、いずれの場合にもその底流と深く関わっていると思わざるを得ない。

雕母↓母銭↓流通銭か、母銭↓流通銭の相違はあっても、流通銅銭が銅に彫刻された「雕母」を持っていた点は否定できないだろう。その点は次の母銭活字問題でも再び言及したい。

なお、「雕母」に使う金属は、銅だけではなく、各鑄錢監で最も入手し易く、かつそれに有効なれば何でもよかった。ただ現実には「雕母」に適した金属となると、銅以外では錫が最も多かったかと推測される。宋代の文献にはそれを裏付ける記事もあるが、例によって実物を手にすることは困難だった。一九九八年、湖南省南端の宜章県で、農民が水の中から徽宗時代の行書「聖宋元寶」折二銭の錫製雕母を採取した。直径三・一センチ、重六・四八グラムで、分析の結果錫が九五パーセント以上と報告されている（『中国錢幣』一九九九―四）。「字迹は清晰秀美、質地はやや軟、裸露の処は潔白銀の如し。聖宋元寶四字の神韻なお存す」と

は報告者の言である。宜章に最寄の錢監は衡州の熙寧監であり、「聖宋元寶」当時はまだ鑄造を行なっていた。ここは錫や鉛鉱山で有名な桂陽監に近接し、錫の入手が簡単だったと推測できる。

附論 宋代の様銭・錢様

宋銭の錢譜を捲っていると、稀にはあるが「様銭」と名付ける貨幣に出くわす。既述のように、清朝では「様銭」は、各地錢監が様式により鑄造し、皇帝に進呈する新銭を指す。ただ『錢幣辞典』によると、その定義は必ずしも単一ではない。たとえば以下の如き例があげられる。

(一) 京・省各鑄錢局は、制によって銭を雕刻する。皇帝に進呈して採択に備えるものを「様銭」と称す。雕成して鑄母銭の用に備えるから、「雕母」とも称し、鑄銭最初の「かた」であるから「祖銭」とも呼ぶ。

この説明では、「様銭」、「雕母」、「祖銭」は同じものとなってしまふ。

(二) 清代では、戸部局から雕母で母銭を鑄出し、各省の鑄錢局に頒ち、それにより首爐銭を鑄出し、進呈するものもまた「様銭」と称する。

前者が「牙銭」から彫刻（あるいはそれを鑄造）したサンプルであるに對し、後者は各省鑄錢局で鑄造した、最初の銅銭ということになる。つまり(一)はその貨幣の採否を、形式的にせよ最終的に皇帝が決定するサンプルであり、(二)は、すでに決定した錢様で、最初に鑄造した「流通銭」の記念品に過ぎぬという相違がある。この二つの定義そのもの、とりわけ(一)に、やや疑問が残るが、それはともかく、宋代ではこうした定義が当て嵌まるものであろうか。

宋代の「様銭」に関する專論としては、屠燕治氏の「南宋錢様考」（『中國錢幣』二〇〇二—一）が有益である。ただ氏は「錢様」と「様銭」を

同一として扱われているので、若干不都合も生じる。この論考に教えられることは多いが、それは後回しにして、とりあえず、『大辭典』北宋卷から実例を拾うところから始めたい。「元豐通寶」の行書小平錢（二四三頁）と同じく篆書小平錢（二六五頁）がまず挙げられる。全体、篆書の錢文は、個々の筆画が直線的で抑揚と変化に乏しい。従って「元符通寶」「聖宋元寶」「宣和通寶」などは、小平、折二を問わず、針金のような細く鋭い線が共通して見られ、「鐵母」には特にそれが顕著である。正直に言うとならぬと拓本だけからでは、「鐵母」と「様銭」の区別など殆どできないのではあるまいか。ただし、『足齋泉拓集珍』（四四七—六）

に載せる篆書「元符通寶」小平錢は、並べてある楷書と隸書の「鐵母」と比較して、各字の筆画が糸のように細く、「雕母」とは明らかに異なる版面だから、それを「様銭」と名付けられると、納得できる気分になる。「元豐通寶」でも、篆書の方は、安徽出土の条件も考慮し、「鐵母」でないからには「様銭」であると判定されたかに見える。しかし行書の方は輪郭の太さが表と裏で全く違い、彫刻、鑄造いずれも甚だしく粗雑で、このような銅錢が本当に進呈されたとは信じられない。ちなみに「崇寧通寶」の初鑄当十錢について、次のような報告があるから、比較のために引用しておきたい。これは江蘇省高郵の中学教師が入手したもので、王乃建氏の報告では「ごく薄い紅緑の錆はあるが、錢面は平らに整い、縁輪・内穿・内郭すべて狂いが無い。ほかの崇寧通寶とくらべ、筆画は明顯・細挺、鋒芒悉くあらわれ、字口は峻深。錢肉の平面と錢文の側面が交接する折角・稜角は分明である」と述べ、鑄工精美な「崇寧通寶」當十錢のうちでも屈指のものだとして、上海博物館の孫仲匯氏のお墨付きも加える。これは「様銭」とは言っていないが、進呈する「様銭」であれば、せめてこれくらいは精品でないと具合が悪いのではなからう

か(王乃建「崇寧通寶當十錢初鑄大樣」『中国錢幣』一九八九—二〇。その孫仲匯氏当人が、『錢幣觀賞』の中で次のように述べる。「徽宗時代にはある種の特異な銅銭が存在する。その文字は小平銭に近いが、作りの厚重は折二銭と同様である。すでに聖宋元寶と宣和通寶に数点が見つかっている。これらは小平銭とするには全体からして不都合で、あるいは折二様銭ではなからうか」。一九九三年、尚經氏は、大小、書体、形制、風格が孫氏のあげた例と一致し、背面がやや平夷という「宣和通寶」を入手し、「この銭は母銭の特徴がなく、様銭の風格を具えている。輪郭規整、銅質精良、銭文清晰、地張光潔」と報告している(尚經「隸書宣和通寶折二様銭」『中国錢幣』一九九八—二〇)。「母銭」の特徴とか、「様銭」の風格といわれるが、日本人である私には、その具体的な区別が、いまひとつ正確に把握できない。

一方南宋に入ると、北宋とは違った「様銭」の実物が出現する。『大辭典』南宋(五五頁)の「紹興通寶」楷書折五、折十銭と、『同』(二〇二、二〇三頁)の「紹熙元寶」と「紹熙通寶」楷書折五銭がそれで、後者は当時の規定に従い、背面に「四」一字の紀年を刻し、これには「試様銭」の名が与えられている。これら三種の貨幣には、銅・鐵ともに折五、折十の流通銭は存在しない。折五銭で三・三センチ、三・七五グラム、當十銭は四・一五センチ、一五・五グラムという立派な品である。中でも「紹興通寶」はわざわざ旋読にしてあり、「雕母」からこの「様銭」を作って進呈したとか、この「様銭」の結果「雕母」が決められた、などといったことは想定しにくい。小平銭と折二銭以外に、このような様式で、折五、折十銭を作ってはというサンプルに相当する「様銭」ではあるまいか。北宋末、蔡京が陝西で「夾錫銭」使用を行なわんとした時、次のように上奏している。「陝西轉運副使許天啓の、申して送到せ

る新鑄銅銭・鐵銭様に拠り、已に指揮をくだし、銅銭は歳終にすべからく三十万貫を鑄し、鐵銭は二百万貫を鑄すべし。」(『文献通考』卷九・錢幣考二)にも、新たに鑄造する銅銭・鐵銭のサンプルの意味で「様」の語が使われている。

以上のような宋代の事例から帰納すると、「様銭」は、「雕母」と同格に近いが、彫刻、鑄造を問わず、新しい銭文の貨幣で、最初に成型されたものを、皇帝もしくは中央責任部局に進呈する意味と、ある貨幣を鑄造しようとして、そのサンプルが同じく上部に進呈される両者があつたと解釈できる。さすれば、始めに引用した『錢幣辭典』の記述と、大筋で一致し、宋代すでに、数百年隔たった清朝と、似通った意味で「様銭」の用語が存在していたと言えそうである。

第四節 いわゆる活字母銭をめぐる

ここで雕母と関連して、鑄銭に活字が用いられたという議論を検討してみたい。一九九九年九月、中国錢幣学会の代表団と関西古泉研究会が、大阪で学術討論会を行ない、その要旨が『中国錢幣』(二〇〇〇—二〇〇一)に掲載された。そこで吉田昭二氏の「宋代錢鑄造工藝的一項考察」に、雕母に活字が採用されていたのではないか、という見解が提出されている。私は批判を受けることは承知で、本稿で「泉幣家」とか「愛泉家」の名称を使用し、宋代史の研究者との間に一線を引いている心算である。爾來、古錢研究はその多くが蒐集家や愛好者により推進され、その状況は中国・日本とも、現在とて変りないであろう。歴史学研究者は、とかく文献に依存し、あるいは理論に走り過ぎて、貨幣の実物に疎いという一般的欠陥を持つ。従って、貨幣を扱おうとすれば、どうしても愛泉家の意見を参考にしなければならぬ。ところが愛泉家の方では、とか

く稀少・珍奇な貨幣を追い求め、様々なかたちで蒐集に情熱を燃やされる。このため愛泉家と歴史研究者は、それぞれが目指す方向や興味焦点にズレがあり、とかくお互いの交流が疎遠になり易く、相互理解も不十分となってしまう。戴志強氏の論考を読むと、すでに何人かの活字論者がおられ、それが日本の愛泉家の主流であり、いわばその代表という役で、吉田氏が発表されたような印象を受ける。ただあえて申せば、昭和五十一年（一九七六）刊行の、山田孔章『北宋符合錢志』の重刊影印本の後記で、小川浩氏が引用されている田中啓文氏の意見の重要性を忘れてはならない。そこでは、「北宋錢は母錢から製造するものだが、かなり多くは活字の方法を使用している。同一書体の文字が、同じ種類の錢の各種版別中に存在する。錢範に圧製する時、着手・用力の状況に随い、昂、降、あるいは左、右、俯、仰が生じる」と明記されている。愛泉家と交渉がなく、同じ関西にしながら、吉田氏らの活動を全く知らなかった、私の不勉強はお詫びしたいが、かといって氏の母錢活字説にも俄に賛同でき難い。

『中国錢幣』に掲載された吉田氏の説は、私の理解する限りでは、「銅錢鑄造の雕母の段階で、錢体とは別個に、錢文四字を一個ずつ作成しておき、砂型にまず錢体で型をつけたあと、その中に四字を一つずつ捺す」、というものである。この推論が出てくる理由として、氏は、(一) 行書「元豊通寶」のあるものは、「元」の一字がかけ離れた位置にあらぬ方向を向いている、(二) 篆書「聖宋元寶」に「聖」字だけが楷書のものがある、の二例を提示される。また、「元祐通寶」を五枚挙げられて、各四字の草書の字体と字形が完全に同一だとして、自説を補強される。念のため繰り返し返せば、銅錢本体と四文字それぞれを別個に作成し、砂型で組み合わせて原母錢を作る。それから大量の母錢を鑄造し、それ

で流通錢生産と、いう順序になろう。氏はこれを「活字母法」と名付け、その出現は鑄造量の著しい増大と関係があり、「皇宋通寶」「治平元(通)寶」「熙寧元寶」「元豊通寶」「元祐通寶」の大部分は、活字母式で製造されたものと推論されている。

吉田氏の討論会要旨は、中国の錢幣研究者たちにある程度の反響を呼んだようである。『中国錢幣』に掲載された幾つかの論議のうち、賛成と反対を一編ずつ紹介しておこう。魏勇氏の「小議活字技術在『元豊通寶』錢中の応用」(『中国錢幣』二〇〇〇—二)は賛成派である。氏は吉田氏より早く、一九九九年十月、廣西柳州市の錢幣学会で、この論文を発表し、吉田氏の観点は自分と謀らずして合致したとの前置きで、以下のように活字説を展開する。

「元豊通寶」の版式は浩繁で、銅質小平錢で三百種以上、折二錢で百種あまりを数える。ただ、錢文と書体の変化は大きくなく、錢文の位置の不同と出来上りの多様さが大部分を占める。そこで詳細な検討を加え、それらを二種に大別する。第一は、版別の形式が似ており、書体の風格が一致、精神も相通じるが、仔細に観察すると字ごとに異なり、筆跡は同じではない。ところが第二の、特に版別で「大字」とされる錢文は、書法の結構、字体の形態・大小から、甚だしきは筆画の形状・精粗・陰実など微細に至るまで完全に同じで、個々の字の位置だけが違っている。魏氏は第二類につき、更に詳細な観察を行なった結果を、六項目に纏める。

- ① 一組の錢文は輪・郭の突起と高さは変らぬが、四字の高低は一樣に水平ではない。
- ② 錢文と輪・郭の空間がやや広い。
- ③ 文字が正常な位置から偏離し、書写による誤差の範囲を超えてい

る（通常の祖銭や流通銭は、銭文が端正飽満で、銭面は平整だが、それとは異なるかに異なる）。

④ 版を異にする銭どうしでも、両面の外輪の内側の弧線、内郭直線形状の局部変化、相応する尺寸などは完全に同じである。

⑤ 第二類の「大字」小平銭では、行書では「元」「豊」は各二種、「通」「寶」は三種の字体の相違がある。また篆書では、「元」「豊」各四、「通」「豊」各三の字体異同がある。それらの組み合わせにより、十五種類の銭文ができ、字の位置の不同が加わるから、全部で百以上の「元豊通寶」の版別を生じる。

⑥ この種の「元豊通寶」は豊富な版式にも拘らず、「對銭」が見られない。

魏氏のこの論考は、吉田氏の発表が問題提起的であるのにくらべ、より精密で、検討しなければならぬ論点を多く含んでいる。

こうした吉田、魏両氏の活字母銭論に対し、呂恒氏は「対北宋銭活字母式々鑄造工芸的質疑」（『中国錢幣』二〇〇〇—四）で反対を唱える。これも要点だけを列記しよう。

① 吉田氏が例示する行書「元豊通寶」の「元」を始め「通」「豊」、篆書「聖宋元寶」の下三字は、仔細に観察すれば微妙に違い、一個の字母で押したものではない。それは「元祐通寶」の場合も同様である。魏氏の版別「大字」の「元豊通寶」とて、『古泉大全』を参照すれば、一個の字母で押したものでないことは、一目瞭然だ、と斬って棄てる。

② 篆書「聖宋元寶」の「聖」が篆書体でないのを、活字使用の一例とすることはできない。字体の混ざったこの種の俗称「雜書銭」は、五代の「漢通元寶」に先例があり、「皇宋通寶」の隸書、楷書の銭

文には「雜書銭」の版式が多い。

③ 銭文の位置が偏離し、誤差の範囲を超えたとの指摘はその通りである。自分はそれを工匠が雕母を作る時の故意の仕業と思う。北宋の銭文には、楷・行・草・隸・篆書の各書法があり、各字の大小長短、位置の上下左右への偏り、あるいは仰・俯などが加わった多様性こそが、北宋錢幣の芸術風格の表現にほかならない。

④ 活字母式が労力や経費の削減につながり、有効であるならば、どうしてそれが鐵銭に応用されず、また南宋以降清朝に至るまで採用されなかったのか。

この反論は、②と④を除いては、必ずしも説得力があるとはいえず、見解の相違として水掛論になる危険性もある上、何よりも魏氏の説には、正面から反駁していない点が物足りない。ただ、現在の中国では、活字母式説もありはするが、それは一つの意見で、大筋としては、そして問題にならない、というのが大勢のように思われる。すでに何回も引いたかのように私には受け取れる。そこには、日本人的発想からは出てこない、中国人の宋錢觀が濃厚に滲み出ているから、これも紹介しておきたい。

(一) 前近代中国人の哲理思想、正統觀念は強烈で、国家発行の貨幣にはある種至高な尊厳性があつたから、錢幣形成の規範を追求した。それは統治者の意向であるのみならず、一般庶民の願望でもあつた。古代の銭が採用した「方孔圓銭」は、四角の穴を真ん中に、上下、左右に銭文を分列し、重厚かつ嚴肅である。このような制作特徴の本質は、上述の一点で説明できる。

(二) 南宋は「文」を重んじた国家である。その統治者皇帝が、自身銭

文を書いたことも、かれらが錢幣を重視した証明になる。また対称の美を求める「對錢」が作られ、現実には、「對錢」の鑄造で、一層厳しく高い要求が出されることになる。活字式鑄錢法では、それは甚だ困難だった。

(三) 大部分の宋錢は、書法は考え抜かれ、配置は妥当で理に叶っている。芸術的に良好なばかりでなく、錢体は平整で制作は規範に則している。このような整った全体は、活字圧模では達成できない。

ちなみに戴氏は、宋錢の錢文の相違は、すべて雕母を刻む工匠の技術と気分によると言っておられる。細かな部分的差異は別にして、全体を整える効果は統一的で、神韻はすべて一致し、一氣呵成の氣勢がある、このような内在的精神の表出は、活字圧模ではなし得ないというのが結論である。

長く宋代を研究対象としてきた私は、基本的には戴氏の言は納得できず、現時点ではとりたてて異論はない。しかしなお若干私見を付け加えることをお許し願いたい。吉田氏の論を読んで、正直なところ、これはいかにも日本的、かつ現代的発想だと思った。その後、中国にも同様の論者がいると知って、日本のという表現は撤回せねばなるまいが、宋代中国人、とりわけ「士大夫」が、活字母法を思いついて実行するか否かという点では、やはり否定的である。その理由を以下に述べよう。吉田氏らは、それは畢昇の陶活字印刷を踏まえ、鑄造の効率を高める、いわば合理化を念頭に置いて議論されているように感じられる。木版印刷の場でさえ、畢昇の活字は、宋代には全く定着せず、清朝に至って漸く皇帝の絶大な後援で、木版活字の「武英殿聚珍板全書」として陽の目は見えたものの、印刷全体からいえば、所詮主流にはなれなかった。それと単純には比較できないにせよ、錢文鑄造に活字を使う思いつきが、畢昇

と前後して、ただちに実用に供されたというのは、些か飛躍があるように感じられる。実物が発見されれば問題ない話だが、一字ずつ金属に刻字されたとして、その活字は、つい先頃まで見られた、鉛活字と似たようなものを想定すべきなのであるか。先に輪郭と穿を持つ錢型を彫り、それを砂型に置いて、手仕事で四字を、一字ずつ錢型の上下左右に捺し込んでゆく。母錢の元になるものだから、それほど多量ではないにせよ、果たしてそれがどれだけ鑄造効率を上げるのに寄与するだろうか。また、小さな一字を、たとえば立方体か直方体の金属に刻むことは、雕母となる銅に直接四字を刻むのとどちらが楽で、早いだろうかという疑問もつきまとう。私も宋錢の錢文は、大袈裟かも知れぬが、書法芸術の中で一席を占め、かつ宋代文化全体を構成する一役を担い、重要な意味を担っていた、と考える者の一人である。吉田氏らの言われる活字母法は、いかにも即物的で、現代的とも言える方法である。断っておくが、私とてそれが絶対になかったなどと言う心算はない。可能性は低いけれども、活字使用が行なわれたかも知れない。ただその場合でも、何故それが伝統に反して直ちに採用されたかという理由を、もう少し深く考察せねばなるまいし、呂氏が指摘するように、後世との関わりを視野に入れた議論も必要であろう。のちにも触れるが、私は、北宋の銅錢や鐵錢が、何故年号毎に改鑄され、例外はあるにせよ、その字体が何故二種類以上だったのか、という疑問に答えられないと、活字問題の展望は見えてこないと思っている。最も多く活字母式が使われた時代は、神宗元豐年間以後とされる。周知のように、それより数年前、同じ神宗の熙寧年間、王安石の新法と呼ばれる大きな政治改革が断行された時代である。その精神を継承して、鑄錢の分野でも新しい改革が行なわれたと想定するのは勝手である。しかし、神宗を継いだ哲宗元祐時代の前半、か

りに「元祐通寶」に活字母の使用があつたとすると、新法の多くを廃止した元祐の旧法党が、どうしてそれを継承したのかという厄介な質問も出るだろう。要するに、十分な裏付け資料がないと、思いつきだけではこうした問題は解決しないものである。近代科学の機器を使用して字体の同異を計測すれば、あるいはより確実な証明ができるかも知れないが、実物の大量保有者である現在の中国で、それがすぐに実現可能だろうか。この問題は、別に確証が現れるまで凍結して置くのが最良と考えられる。

第三章 宋銭の特異性

第一節 對銭

小論で順次取り上げているように、宋銭にはそれまで見られなかった幾つかの特別な性格が現れる。愛泉家が熱中する「對銭」も、その一つに数えられる。辞典では、「同一銭文で書体の異なるもの同士を配對する」といい、具体的には、「書体の不同以外は、銭制・銭風・銭文の位置・文字筆画の粗細深淺・肉の厚薄・輪郭の闊狭・銭体と穿孔の大小などが同一で、その一つでも欠けてはならぬ」と規定する。「對銭」は日本では「符合銭」と呼び慣わされ、十八世紀後半の天明時代、大阪の泉幣家安田而唐がそれを提唱、寛政年間の福知山城主朽木昌綱『弄銭奇鑑』、文化十一年江戸の村田元成『對銭譜』などの継承を経て発展し、文化十年（一八一三）、山田孔章の『符合泉志』に集大成された。山田の蒐集した数万枚の宋銭は、明治以後の荒波を潜り抜けて現存し、一九五一年小川浩氏により、「對銭」を軸にした新拓本を採取して纏められ、『新訂北宋符合泉志』の名で上梓された。それは、一九九六年、「中国

錢幣叢書甲種本之三」として中華書局から影印出版されている。

一方中国では、奇しくも時期を同じくして、乾隆後半から嘉慶にかけて、著名な金石学者翁方綱の息・翁樹培（一七六五—一八〇九）が、数万枚の古銭を精査した畢生の成果を『古泉匯考』八卷にまとめ、その第五卷「北宋南宋」の冒頭で「對銭」の概観を行なっている。その部分の日付は、乾隆丙午（五十一年、一七八六）だから、天明六年に当たり、山田に先立つこと二十七年である。この書物は数種の抄本が存在しただけで、日本では目睹できなかったが、一九九四年、中国公共図書館古籍文献珍本匯刊として影印され、私も一本を座右に置いて恩恵に与かれるようになった。

翁は卷五の冒頭で、大略以下のように「對銭」について記述する。「天聖以降、毎種篆・楷あるいは篆・草（ママ）二体が作られる。その銭文は某種と某種を相配して同じ場所で鑄造される。家藏する何万という宋銭は、字の漫漶・輪郭の夷坦・土中での腐蝕・材質による剥蝕などさまざまな原因で、眞の姿を決め難い。数万の銭の模範・形製を合わせ、繰り返し拓本をとり、漸く信ずべき正本が精選できる。そこで、字・形・色・質・声を弁別し、五者を兼ねる者から、對銭の相手が取り上げられる。字について言えば、書体の異なる二者でも、位置・大小・濃淡・粗細に必ず精神融貫、同じ手に出ると思しきものがある。形は、輪の闊細、郭の濃纖、辺の厚薄から近辺の銅塊、郭間の四出菱花などが類推の材料となる。色は、その銅銭の流伝来歴により、同じ場所の鑄造品でも著しく異なってしまう。その神味韻致がおのずから一片をなすことは、熟達者でないとい見極められぬ。質とは、赤銅・白銅・雜銅など、その鑄造地による精粗を指す。声は銅銭と鐵銭を弁別する際に問題となる」。こうした基本原則を下敷きに、翁は北宋の十六種の年号銭文につき、篆・楷

あるいは篆・行を微細に分析し、百十九種類を「類を成す」として抽出する。「天聖元寶」から、その説明の一端を引用してみよう。「一種。郭細し。背郭は方瘦・緊整。篆は寶字僅かに低く、肩僅かに側に倚りて寛、右高く左下がる。楷は天・元の二字、下の両畫やや収しやや単細に就く。一種。郭細く浅し。字は肥腴にして郭より高し。背郭隆起し四角やや円。篆は天・寶二字、下の両畫ともに肥厚。楷は天の下の兩畫飄動、中に肥潤の意を具す。郭を隔てることやや空、諸畫ともに肥厚濃湛。背穿の下一星あるもの、小にして円」といった具合である。全体として翁氏の説明は、経験を積み重ねた名人芸の趣きがあり、慣れなければ、文章だけではすぐにはイメージが浮かんでこない。そこで戴志強氏におでまし願ひ、特に字・形につき、現代風にパラフレーズされているものを参考に供しておきたい（『對錢』浅釈）『中国錢幣』一九九六一）。氏は「對錢」製作の特徴を区別・鑑定するには、おおよそ四つの方向から着手すべきだとし、具体的に次のように説明される。

① 錢体の大小軽重。小平大様・小様、折二廣穿・狹穿、薄肉、等等。
② 輪・郭の製作特徴。闊・中・狹縁・背闊縁、肥・細・正・決・陰・背肥郭、等等。

③ 錢文の書写特点。大・中・小字、長・短・紆字、大頭・廣・隸通、平頭・尖頭・肥・狹元、横点・方貝・円貝・隸・長寶、政和錢の文政、抱正、長尾、宣和錢の円冠・長冠・巨冠、等等。

④ 錢文の位置布局。離・寄・接郭、隔・連輪、進・退通、仰・俯元、昂・離寶、宣和錢の俯宣、治平錢の直平・斜平、等等。

戴氏は、「對錢」は、伝統的哲理思想と中国民族の審美観念を背景に持ち、錢幣対称美の芸術効果の表現に他ならず、兩宋の芸術・文化崇尚の風気を示すと同時に、錢幣鑄造に、より嚴格でより高度な要求を提出

したものと高く評価される。また、個々の「對錢」は、同一錢監、同一時期に、一人の工芸師あるいは工匠の手で作られたとされる。実例として挙げられた「元祐通寶」小平錢では、「篆書・行書とも「寶」が上昂し、「祐」が普通より偏下している。そして内外輪郭の粗細闊狭は相似て、形が同じのみならず、神も似、相互に呼応し、心に靈犀あり（あい通じる）」と解説される。戴氏の言をいまま少し借りると、「對錢」は五代十国南唐の「開元通寶」「唐國通寶」に始まり、宋の四代皇帝仁宗の「天聖元寶」以後盛行して制度となる。それは天聖元年（一〇二三）から南宋孝宗の淳熙六年（一一七九）まで、中断はあったが百五十六年続いた。宋代「對錢」の特色は、原則として篆書体が配対の基本になり、時期により、篆・楷、篆・行、篆・隸が組み合わせられた、ということになる。

ところで、翁樹培は十六錢文で百十九種を「對錢」としたが、小川浩氏の『符合泉志』では、翁と同じ十六錢文に限っても三百六十二種を数え、現在最も権威を持つと思われる『大辭典』では四百六十種に跳ね上がる。これは小平錢だけの話で、折二錢や「熙寧重寶」を加えると『大辭典』の對錢数はさらに百近くも増える。素人の単純な印象では、現代愛泉家はどうかやら翁樹培の精神や苦勞などすっかり忘れて、「對錢」探しに異常に熱中しているように見える。宋錢の知識も碌でない自分が不思議に感じるのは、泉幣家の諸氏が、一体「對錢」とは何かという、最も基本的な疑問は棚上げにして、まさしく重箱の隅をほじくるように、微細な相違を取り上げて「對錢」仕立に余念のない現状についてである。何故北宋仁宗時代に「對錢」が定着し、南宋半ばに消滅したのか、その原因の究明は、たとえ困難であったとしても、正面から取り組むべき重要な課題のように私は考える。上記のように、戴氏は「對錢」の出現を、

中国人の哲理思想や審美意識に求め、錢幣の世界でそれが頂点に達した時、「對錢」が出現し、それがさらに錢幣の質を高めたとされる。私はそれ以外に、「對錢」を生み出す本質的とも言うべき原因があり、そこに踏み込まないと、問題の眞の解明には繋がらないのではないかと考える。

私の仮説の前提として、北宋錢の錢文を取り上げたい。周知のように、宋初太祖の十五年の治世と、二代太宗の半ば過ぎまでの十三年間は、唐代「開通元寶」の流れに沿った「宋通元寶」と、新しい年号錢「太平通寶」の二種類の通貨しか鑄造されなかった。全国統一が進行中の太祖の時代はさて置き、漸く統一が完成し、新しい諸制度を実施する段階に入った太宗の時代でも、その前半は通貨問題、特に江南の大唐南唐を中心とした十国の錢幣と中原のそれを、どのように整合させるかについて、試行錯誤が繰り返されたと推測される。三十年近い五代から宋へのいわば移行期が過ぎ、太宗淳化元年（九九〇）、皇帝御筆の「淳化元寶」が、それも楷書・行書・草書三体の書体をもって鑄造された。その鑄造額は年間八〇万貫程度と推定される。皇帝直々に錢文の筆を執ったことと、同一錢文に三種の字体を使用した点は、前例のない、それだけ注目すべき出来事であった。太宗が、特に内政において、前代とは大きく異なる政策を採用し、清朝に至るまでの、所謂「君主独裁制」の基礎を確立したことは認めてよいと思う。その彼が、質量ともに飛躍的に発達した商業・流通の媒体である貨幣の錢文を書いたことは、従来なかった權威を貨幣に賦与したとも考えられる。²⁰農村の出身で、太平興國八年（九八三）進士に合格した王禹偁は、詞学敏贍の才を太宗に認められ、詔勅起草官に抜擢された（『宋史』卷一九三）。その文集『小畜集』卷二一には、淳

化御書錢に関する二つの文章を載せる。「為宰臣謝御書錢」では、宰臣たち三体の字様の銅錢各一貫を賜ったと記し、やや遅れて、自分が翰林学士になった時のこととして、学士院でやはり御書三体の字様の淳化錢寶を分賜されたと書き残す（『謝賜御書字樣錢表』）。余談に属するが、彼がのち追放の憂き目にあった時、「御書錢」と題する詩で、「囊中なお貯わう御書の錢」と詠んでいるのは、この時の錢をお守りのように持っていたためであろう。淳化の次の年号は至道だが、この「至道元寶」もまた楷・行・草の三体で、御書とする文献的裏付はないが、実物の筆跡は淳化と酷似し、太宗親筆として誤りなからう。この二つの錢文が、宋の新制度を積極的に推進した太宗の御筆とあつて、錢文の価値や注目度を一躍高め、文化・芸術の面からも、改めて評価を受けることになる。王禹偁の多分に儀礼的な言辞や、「淳化法帖」と太宗のイメージを重ねることは別にして、正直なところ、「淳化」と「至道」の御書錢六枚を何度眺めても、唐初の歐陽詢の「開通元寶」や、徽宗瘦金体の「大觀通寶」から受ける芸術性やインパクトは、残念ながら私にとつては希薄である。とりわけ草書体の有難味は薄く、享保年間、瀬尾柳斎の『板見録』で、草書「至道元寶」を「五道元寶」と読み違えた指摘があるのも、庶民ならさもありなんというご愛嬌である。三代皇帝真宗の年号は咸平・景德と続くが、折りしも契丹が南下し、宋朝は上を下への大騒ぎ、錢文どころではなくなった。宰相寇準の努力で、契丹と澶淵の盟が結ばれ、平和が回復し、天書降下のバカ騒ぎの始まった大中祥符元年六月（一〇〇八）、輔臣に新鑄の御書「祥符元寶」を賜ったという記事が、『続資治通鑑長編』（卷六九）に残されている。現存する「祥符元寶」は、多少の版別の差異はあるにしても、概して言えば外輪が闊く、周囲に空間を持ちつつ、比較的小ぶりの楷書体四字が収まっているものが多い。これ

を真宗御書とする証拠はなく、何でも御書にしたがる翁樹培は、残存している二つの真宗御書銘と「元」が似ていると指摘し、李日華の『紫種軒雜綴』の「真宗は虞世南の字法を好んだ」ことを引用して、景德・祥符の銭文はいずれも虞の体だとするが、説得力は弱い。結論としては、真宗時代の四種の銅銭銭文はすべて楷書で、その形制も相近く、良質という共通性をもっていた程度のことしか言えない。それが四代皇帝仁宗の天聖に入ると、篆書・楷書の二体の銭文が出現し、同時に「對錢」が生まれて様相を一変する。その背後には如何なる理由があったのだろうか。

文字の国中国で、最も権威のある字書が、後漢許慎の『説文解字』であることは断るまでもなからう。またこの書に採録された各文字が篆書であることも、周知の事柄であろう。ところが、後漢から魏晋南北朝そして唐代への文字流伝は、隸書から楷書が基調であり、筆記に便利な行書や草書が加わったけれども、篆書は必ずしも陽の当たる場所には置かれていなかった。篆書の字書である『説文解字』も、書写で流伝する間に、当然ながら多くの錯誤が生じ、世を迷わす有様にさえなっていた。そうした状況の中、五代南唐に徐鉉と徐鉉の兄弟が出て、説文学の発展に画期的な寄与をしたことはいわば常識に属するだろう。その徐鉉は宋に仕え、太宗の勅命により、数人の学者とともに、「説文」の定本ともいべき『新校訂説文解字』を作り、国子監に版木が置かれ、希望者は紙墨の費用を納めてそれ入手できるようになった。太宗の「淳化元寶」出現より四年前、雍熙三年（九八六）十一月のことである。出版事情が現在とは全く異なる当時、この字書がどの程度流布したかは不明だが、少なくとも「篆書」に関して、欽定とも言うべき刊本が登場した事実は、篆書の銭文の創設と無関係ではあり得ないと私は推測する。もし、一定

の知識階級に、篆書への共通した価値観と親近感がなかったならば、庶民には読むことにも不自由な篆書が、わざわざ銭文の主役に使われるわけがないからである。但し、雍熙三年から、篆書の「天聖元寶」が姿を現わすまでには三十七年の長い隔りがある。その間の事情を私は次のように想像する。

宋代に入り、「科擧」は面目を一新し、君主独裁制を支える官員を定期的に一定数誕生させる制度として、何よりも重要な役割を果たすことになった。全国統一の過程にあった太祖時代を別にして、皇帝自らが最終試験（殿試）を主宰することが定着した太宗と、三代皇帝真宗の時代四十二年の間、まだ後世のように三年一度の制度は確立せず、若干の不安定性は残るにせよ、二十回の科擧で三千三百二十二人の「進士」が生じている。一回につき平均百六十六人の合格は、唐代とは隔絶した数字である。この進士科のほかに、やや程度の低い官員資格を与える「諸科」が並置され、二代で六千二百六十人の合格者を出している。上下優劣の差はあるにせよ、太平興国二年（九七七）から天禧三年（一〇一九）の間に、約九千五百人の中・高級文官官僚の予備軍が誕生し、やがて全国に、宋朝の官員としてばら撒かれると同時に、前代の世襲的な貴族階級に替り、新興科擧官僚いわゆる「士大夫」階級の中核を形成することになる。宋代新しく生まれ変わった「科擧」とて、太宗と真宗時代は、その生育期に当たり、第四代の仁宗に入って、初めて所期の効果を挙げ始める。「慶曆の士風」と喧伝される、范仲淹・韓琦・歐陽脩たちを筆頭とした新興科擧官僚の活躍は、どの概説書でも取り上げられている。こうした動きと、銭文の書体、それに付随した「對錢」の出現は、同じ地平に立つものだと私の目には映る。さらに忘れてはならぬのは、中央の財務官僚たちの動向である。国都開封府は官僚と軍隊を中心に、百万

の人口を集める大消費都市に膨れ上がった。ここではその給料の一部をなす貨幣の調達が大きな問題となる。また専売制度や商税制度など、唐代とは質量ともに異なった財政の主要問題をめぐり、様々な試行錯誤が繰り返され、そこでも貨幣が主要な役割を担うことになる。そうした国初以来の新しい経済・財政問題を担当した財務官僚の中には、五代十国のうち、江南地方、とくに南唐や呉越の出身者が多かった点に注意しなければならぬ。太宗時代になると、強大な財務官庁となった三司（大藏省）が彼等とその子弟たちの働き場所となる。従って、貨幣のハードな側面に対する彼等の影響は、決して小さくなかったと私は推定している。そのような諸条件を頭に入れて、銭文に戻ると、どういうことになるのだろうか。

太宗が「淳化」と「至道」の銭文を、楷・行・草三体で書いたことは、やはり重い意味がある。皇帝が直接貨幣の銭文に関与したことは、象牙でデザインを決めるのとは異なり、格段の権威を貨幣に与えることになる。だが、誰も大きな声では言えないが、この時の御筆銭すべて、とくに草書のそれは、どうみても感心した代物ではなく、こうした形で次々と貨幣が恒常的に流通することには、違和感を持つ人たちも多かったのではあるまいか。三代真宗の初期は、契丹との戦いで、銭文どころではなく、それが恰好の注し水となって、御書は兎も角、三体銭は自然消滅した。ただ、実際に書くか否かは別として、銭文は原則として皇帝（君主）の領分に属するという、宋代に関する限りの暗黙の了解が出来上がったことは間違いないだろう。この後、徽宗皇帝の「大観」を中心に「崇寧」「宣和」には瘦金体の紛れもなき御書がある。また、神宗、高宗にも御書銭に関する記事が散見し、実物の有無は兎も角として、そうした底流が存続していたことは否定できない。唐の「開通元寶」は、当代有数

の書家歐陽詢の八分隸書と、正史に明記されている。ところが数多い宋銭の銭文が、その時々誰の手に成るものかは、皇帝のそれを除いて、文献的にも実物の上からも、全く手がかりがない。後世、「東坡元豊」を始め、司馬光や米芾の筆とする俗説が流布されるけれども、宋代には却ってそのような話は見られない。皇帝に最も近い文化人であり、かつ何人かの著名な書家もいた翰林学士あたりが、それに関与していたに違いないと推測はできても、事実は一切不明である。それとて、銭文は皇帝の領域にあり、たとえ御筆でなくても、臣下の筆者はその名を遠慮すべきであるという、暗黙の了解があったためとしか思えない。如上の事柄から、私が導き出す想定は、国初から六十年、科挙が軌道に乗り、新興士大夫が理想に燃えて宋朝の中核に成長し、その象徴の一つとして、文字（漢字）の原型とも言うべき「篆書」が、銭文の機軸として採用されたことは、時代の要請に応じるものであったという点である。ただ、篆書は象徴的には重要であっても、実際には堅苦しく親しみ難いものでもある。そこでペアーとして、より一般的な字様も使用される。それは時代の嗜好その他の要因により、北宋時代には楷書、行書、隸書といった相違を見せるけれども、中心はあくまで「篆書」であり、その点は書画その他に汎用される印章の多くが篆書であるのと地盤を共通する。この点は日本その他、漢字文化の輸入国では、本当には理解し難いところであろう。こうした前提を置いて、改めて「對銭」について考察してみよう。

第二節 對銭と新銭上供

四川が宋の領有に帰したのは、太祖の早い時期であったが、孟蜀併合の当初から、宋朝はその統治政策を誤り、太宗の淳化年間（九九三―五）

の王小波・李順の乱を頂点として民情混乱が続いた。その対策の一つとして、成都を中心とした四川をいわば経済特区に定め、貨幣に鐵錢の使用を強制した。銅錢素材を産出せぬこともあって、以後南宋に至るまで、四川は鐵錢区となり、交子（紙幣）の使用と相俟って、幣制上は内地と別扱いされる。その錢文は、原則としては、内地と同様だが、四川の鐵錢で「對錢」が取り上げられることは皆無に等しい。また仁宗の天聖から十数年をへた、寶元・康定年間以後、陝西西部・甘肅一帯で、タングート族西夏との軍事衝突が起り、多数の軍隊を派遣した宋側は、給料を始め軍糧調達のため、貨幣の必要性が急上昇し、これらの地方や山西においても鐵錢を鑄造、銅錢と併用せざるを得なくなる。北宋時代を通じて、以後陝西の鐵錢はその数量や種類を増すが、ここでも「對錢」が取り上げられるケースは決して多くはない。このほか南宋になると、対金最前線となった淮南とその周辺が鐵錢使用地域となり、乾道・淳熙以後、多種多様の背面を持つ鐵錢が鑄造されるが、この時代になると錢文はすでに楷書に統一され、「對錢」は消滅してしまう。概して言えば鐵錢使用地域では、「對錢」はさして話題にならぬとして大過なからう。最初にこのようなことを書くのは、いずれの地域でも、鐵錢で「對錢」が問題にならぬ事実と、鐵錢が国都に納入される通貨ではなかったこととの関連性を念頭に置いてのことである。

仁宗の天聖以降、主として銅錢鑄造監で、どのように「對錢」が作られていたのであろうか。現在では、中国と日本を問わず、驚異的な数量の窖藏や墓中の埋藏などの宋錢が発見されている。試みに二〇〇五年の『錢幣考古文献目録』の両宋の部分だけでも、主要雑誌や報告書に逐一あたり、その詳細を検討することさえ容易ではない。ところが、それら報告書類は、遺物の状態を正確に伝えているように見えて、現実には報

告者の主観に左右され、重要な事項が欠落している場合が少なくない。私が調べようとしている「對錢」に関して、某某錢は何枚、長さ何センチ、重さ何グラムと几帳面に記載されていても、天聖以後約十六〜二十種に及ぶ「對錢」を持つ錢種の内容、つまり「天聖通寶」に篆書が何枚、楷書が何枚、「元祐通寶」に篆書が何枚、行書が何枚などという数字は、九割以上の報告では省略されている。ことは日本における、これまた膨大な北宋の埋藏錢の報告においても同様である。あるいはもとの調査資料にはそれが記載されているにも拘らず、紙数などの都合で省略されるケースもあるが、その有無は、私の考察に少なからぬ影響を与えかねない。中国の報告では、山東萊州の總工会院で一九八四年に発見された窖藏銅錢のうち、北宋十八種類と、二〇〇〇年遼寧省遼中発現の金代窖藏銅錢のうち、折二錢などをも含んだ北宋二十種の書体内訳が記録されており、それらに、日本中世埋藏錢資料から三点その他を加えて、当面の渴を癒さなければならぬ。多少の疑問は残るが、とりあえずそれらを表示してみよう（表I）。いずれも窖藏にいたる過程などは全く不明で、すべて推測の域を出ないにせよ、二種類（太宗時代のそれは三種類）の貨幣の数字に、それほど差はなく、むしろ近似している場合が多いことは否定できない。換言すれば、主要な鑄錢監では、同じ錢文で字体の異なる銅錢を、ほぼ同量ずつ鑄造していたと、ひとまず考えて大過ないのではないだろうか。

南唐で歳に六万貫の銅錢を鑄造していた、唐代からの伝統を持つ饒州（潘陽・江南東路）の鑄錢監は、宋代に入り七万貫に増額されたが、当初は原料不足に悩んでいた。太宗の太平興国六年（九八一）転運使となった張齊賢は、南唐の旧臣を使って銅山の開発に努力し、饒州の錢監を水平監と名づけ、年間三十万貫の増額に成功した。その後、太宗後半か

表 I 北宋同一年号錢字体類別一覽

	静岡 大門				八幡 本城				羽咋 北吉田				萊州 總工会院			
	篆書	楷書	行書	草書	篆書	楷書	行書	草書	篆書	楷書	行書	草書	篆書	楷書	行書	草書
淳化元寶		180	158	189		39	44	47		11	11	12				
至道元寶		336	306	293		100	80	78		25	27	17				
天聖元寶	1341	1788			302	452			82	130			1146	1534		
明道元寶	183	132			27	40			15	14			153	148		
景祐元寶	381	596			109	157			31	45			2307	2941		
皇宋通寶	3612	4206			923	1079			261	307			2307	2941		
至和元寶	275	412			78	111			22	27			237	336		
至和通寶	100	142			45	21			5	7			109	110		
嘉祐元寶	307	451			81	93			38	31			225	330		
嘉祐通寶	765	818			192	186			55	63			527	589		
治平元寶	579	636			124	138			38	49						
治平通寶	106	119			17	24			3	14			61	68		
熙寧元寶	2785	3321			695	766			237	271			2315	2648		
元豐通寶	3373	7230			827	1000			267	319			1760	2211		
元祐通寶	2741	2996			671	766			161	218						
紹聖元寶	1249	1352			302	375			80	98			862	904		
元符通寶	474	453			133	129			29	33			334	369		
聖宋元寶	1196	1220			310	343			84	92			775	787		
政和通寶	1069	1208			316	368			69	102			890	981		
宣和通寶	111	113			21	32							384	287		

	鳥取 西品治				関金宿				日南宮内				遼中 金代岩藏			
	篆書	楷書	行書	草書	篆書	楷書	行書	草書	篆書	楷書	行書	草書	篆書	楷書	行書	草書
淳化元寶		3	3	1						27	21	18		42	36	38
至道元寶		3	3	2		13	19			41	23	37		62	72	65
天聖元寶	14	16			72	92			174	260			220	204		
明道元寶	3				11	3			34	17			21	28		
景祐元寶	3	3			16	47			40	78			74	48		
皇宋通寶	2	2			182	223			288	404			470	510		
至和元寶	1	4			7	19			23	41			54	76		
至和通寶		1			1	6			6	16			16	20		
嘉祐元寶	2	5			4	18			26	40			64	82		
嘉祐通寶	8	3			19	37			66	49			72	98		
治平元寶	3	4			22	31			51	57			72	102		
治平通寶	1	1			1	2			3	9			8	12		
熙寧元寶	20	39			118	166			199	52			350	375		
元豐通寶	37	56			211	278			326	393			246	430		
元祐通寶	25	42			177	153			237	270			261	116		
紹聖元寶	9	16			55	86			131	135			118	114		
元符通寶	5	1			15	20			48	43			50	64		
聖宋元寶	12	13			73	76			112	114			104	60		
政和通寶	3	6			43	55			139	167			76	72		
宣和通寶	1	1			3				21	29			8	7		

ら真宗初年にかけて、池州永寧(江東)、建州永豊(福建)、江州廣寧(江西)に相繼いで錢監が建設され、真宗咸平年間には、この四監で年間百三十五万貫を鑄造できるまでに達した。この四監は、靖康の変までの北宋二十七年の間、銅錢監の中心として活動することになるが、とりわけ、原料や労働力の調達、そして重量のある貨幣の水運という諸条件に恵まれた、饒・池・江の沿江三監が、銅錢供給の主役を受け持つことになった。全体、宋代の鑄錢監については、日本・中国ともに多くの研究がある。この四錢監の鑄造額合計は、咸平から靖康まで、景德末年の百八十万を例外として、平均百三十万貫で推移し、最低で百五万貫となっている。従って英宗治平から神宗元豊にかけて、全国の鑄錢量が三百万から五百万と跳ね上がった時でも、この四監の鑄錢は百三十から百四十万貫と殆ど変わっていない²²⁾。ということは、北宋末、徽宗の崇寧から大觀年間を除き、主要な銅錢の大部分は、この四監で鑄造され、同時に問題とされる「對錢」もその多くが、ここで誕生したことになるだろう。私²³⁾が取り上げたいのは、これら四錢監とりわけ沿江三錢監の鑄造錢なのである。結論を先に言うと、各監により定額に相違はあるにせよ、四監鑄造の毎年の新銅錢約百五十万貫は、原則として、すべて国都開封府にある皇帝直轄の財庫「内藏庫」に納入されることが大前提だったことに注目したいわけである。

第二章で述べたように、宋代中央の財庫は、皇帝直属の「内藏庫」と、大藏省管轄の「左藏庫」に分かれ、前者の運用管理や収支については宦官が関与するだけで、全体の詳細は皇帝さえ十分には把握できていなかった。その内藏庫に、毎年百五十万貫近い新錢が搬入されるのだが、その用途の内訳については、若干の資料が残っており、それに基づく中嶋敏氏の研究によれば、以下のように纏められる。

太宗太平興国当初、銅錢七十万貫・銀十万両が内藏庫に納入され、以後二十年余りそれが続き、真宗末の天禧三年(一〇一九)の記録では総額百五十万貫になっている。内藏庫は毎年その中から三十万貫を三司(大藏省)に支出したが、三司はさらに三十万を要求、それをプールして、三年ごとの郊祀大礼の費用に充当せんとした。ただ現実には、四錢監の納入額は必ずしも一定しなかったため、百五十万貫を実際には七十万貫として処理していた。王安石は財政改革(理財)の一環として、この内藏庫にも目を向け、そこへの納入物を制限し、財務手続き全体の合理化を図った。その結果が、畢仲游の「中書備對」に残っている。それによれば、熙寧五年(一〇七二)の改革で、廣寧(江州)三十四、永豊(池州)四十四、永平(饒州)六十一、豊國(建州)二十、計百六十万貫の新鑄造錢のうち、信州鉛山県での買銅費二十、添鑄年額三十五万を控除した百五十万貫が新鑄錢の年額とされる。この中で、内藏庫の収蔵分十五万を除き、残り九十万は左藏庫に分與され、左藏庫では毎年三十三万を、三年ごとの郊祀の費用にプールする、という仕組が記されている。その後の事情を附記すれば、北宋末崇寧年間に當十大錢が実施されると、六十万貫(額面六百万)のうち半分は戸部(もとの三司・大藏省)、二十万が内藏庫、十万が元豊庫に配分された。なお江南に追われた南宋時代には、新鑄錢の歳額が十五万貫に激減し、上供新錢が財政上占める重要性は殆ど失われた、とされる。

中嶋氏の主要な論議はここでは省略し、「對錢」だけに話を絞ることにしたい。私は、額面上百五十万貫とされる、四監の新鑄錢の殆どが、「對錢」の枠に入ると推測している。それらは、裏返しにすると、中心となる錢監から皇帝に直接納入される新鑄銅錢という、国家財政にとって極めて重要な意味をもつ献上品に他ならなかった。従って最新の年号の、

少なくとも熙寧までは篆書と楷書が対になったそれら銅銭には、物理的にも文化・芸術の面でも、最高の水準が要求されて当然である。南宋の法規集『慶元条法事類』の財用門・鼓鑄には、新鑄銭の抜き打ち検査や、基準以下の品が混入している時の懲罰規定が何条か掲載されている。膨大な宋銭の写真や拓本を眺めていると、このような法規に合致しない銅銭があまりに多いことにも一驚する。恐らく、北宋時代の内蔵庫への新鑄銭に限って言えば、こうした規定は比較的厳重に守られていたのであろう。ただし、『大辭典』や『上海博物館藏錢幣集』に見える宋銭は、大部分が内蔵庫に納入して恥ずかしくない優れた貨幣であり、日本で普通に手にできる宋銭とは、「格」が違う点も留意しておかねばならない。兎も角、百万貫、枚数にして十億枚というまっさらの一文銭が、毎年内蔵庫に運び込まれ、そこから必要に応じて各方面に支出されたことは間違いない。断るまでもないと思うが、宋代の文献では、錢綱もしくは上供錢、上供錢綱といった用語がしばしば使用される。特に錢綱は糧綱や絹帛綱とならんで、地方から国都へ河川と運河を使い、一定の船団を組んで送達する漕運の種類を指すに過ぎない。従って、たとえば両税の銅錢部分を運搬納入する錢綱も普通に存在するわけである。ここでいう「錢綱」は、それらと異なり、主要鑄錢監から内蔵庫に直送される新錢搭載の船団だけを指す点は区別しておいて頂きたい。

毎年都に運ばれる新鑄錢だけでも、十一世紀前半でこれだけの量に達する。それらの用途の第一は、繰り返し触れた通り、官員とその周辺、そして軍人への給料である。その詳細は衣川強氏が分析されているが、たとえば四十万の正規軍（禁軍）の料錢（貨幣支給分）だけで、毎年二百四十万緡が必要であり、西夏戦で兵員が増強されると、忽ち二倍に急増する。それに労働力として少なからぬ廂軍もあり、彼等の上官たちを

含め、宋代でいう「武階」をもつ官員に与えられる俸給の貨幣部分だけで、毎年の上供新鑄錢の数倍に相当する。仁宗から後、陝西で鐵錢を増铸したり、南宋で江北の広い対金防禦地帯を鐵錢地域にせざるを得なかったのも、すべて軍隊への貨幣支給と関係している。ここでもそうした事実だけ指摘し、「對錢」と関わる部分だけに話を限定したい。国都開封府に四錢監から運んで来た新錢は、神宗熙寧まではすべて小平錢でかつ銅錢だった筈である。宋は政治・軍事・経済など多くの側面で、国都とその他の場所で、制度や政策を異にすることが珍しくない。貨幣もその一つで、外城の外の兵營に住む兵士を僅かな例外として、銅錢を個人的に、開封府城外に持ち出すことは禁止されていた。宮城を含め、三重の城内の貨幣経済は、それにより安定的に維持できたわけである。政府発行の専売手形や、金・銀・絹帛などの高い貨幣価値を有する品々も、すべてその前提に立って取引の手立てが講じられていた。その銅錢は、長く民間で使われてきた古い年号の旧錢と、今年作りたての新錢が当然混在することになる。一旦新旧が混ざり合つと、「對錢」などという概念は雲散霧消してしまうのが当然だろう。上記の数字で、とくに内蔵庫に確実に残された十五万貫は、良質な銅錢でかつ「對錢」だった可能性が高い。王禹偁の時には、まだ篆・楷をペアとする観念はなかったろうが、太宗は宰臣や學士院の高官たちに、三体の御書錢を各一貫、合計一人三千文を恩賜している。天聖以後もそうした慣例は続き、現在我々が言う「對錢」が、宰臣あるいは特別の人たちに与えられた可能性は高い。また左蔵庫に分与された九十萬貫の新錢とて、鑄錢監ごと、あるいは鑄錢工匠ごとの微妙な差は少なくなかったにせよ、「對錢」つまり篆書と楷書の銅錢数はほぼ同じだったに相違あるまい。さすれば、左蔵庫から、制度に従い俸給の一部として、銅錢が支出される際のことを想像してみ

よう。高官や有力者には、新銭が「對銭」として優先的に支給され、位階・職次が下がるにつれ、新銭以外の旧銭が混じり、兵員までくると、旧銭ばかりで「對銭」はおろか新銭の顔も拝めない、というのが通例ではなかったか。ついこの間まで、ボーナス支給日に札束を数える光景が新聞に出たものだが、その時手の切れるような新札ばかりが貰えたのは、やはりお偉方だったろう。職銭と料銭に区分されていた宋代の官員の俸銭は、神宗元豊以前と以後で相違はあるが、仮に中央高官で月百貫とあれば、実際に支給される銅銭が六割でも、六万枚に達し、地方の県知事で二十貫としても、二万枚もある。これらがすべて生活のため支出されるかどうかは、官員個人の生き方と表裏するから、人によっては、一部を「對銭」として貯え、あるいは窖藏されても不思議ではない。なお、熙寧以後は、小平銭のほかに、重宝銭や折二銭が铸造され、時期によつてはかなりの量にのぼる。厄介なことに、こうした銅銭は、国都では歓迎されず、時に折二銭の流入を認めはするが、やはり主流とはならなかった。折二銭が四大錢監で铸造されたかどうかは疑問であり、陝西の錢監以外では、廣南の韶州や惠州などが、その铸造を受け持ったように見受けられる。「熙寧重宝」やかなりの折二銭にも「對銭」が存在し、それなら国都納入の新銭のほかに「對銭」がある理由を考えなければならなくなる。私は、「對銭」はあくまで四大錢監の内蔵庫納入の新銭と関係し、それ以外はたとえあつたにせよ、一種の模倣に過ぎず、二義的な意味しか持たなかったと考えている。

この他にも、「對銭」を考えるために立つ文献史料が幾つかある。神宗の元豊年間、五百万貫を超える铸造量を記録に残した宋代銅銭は、当時十七あつた銅銭監で铸造されたわけだが、上述の主要四監を除く各監の铸造量が、やはり『中書備対』に書き残されている。詳細は省くが、

その総額として十三監で三百四十六万の数字を挙げる。この中で廣南の二監と衡州熙寧監の一部、合計百五十五万貫以外は、いずれも本路にあて副すると説明している。それは三十余年後の崇寧五年に、十監二百八十九万貫の铸銭額を挙げるうち、主要四監の百三十三万には、上供銭を铸するにかかると記すのに対し、他の六監の百五十六万貫は逐路支使銭等を铸するにかかると断つているのと共通している（『羣書考索』后集卷六〇、財用・銅銭、『続資治通鑑長編紀事本末』卷一三六、當十銭）。厄介なことに、四監以外の各監は、少なくとも熙寧以降は、大錢（折二銭）を主として铸造していたようであり、それが主として地方での需要に応じるものとする、皇帝に献上するための「對銭」という意味にも変化が生じるであろう。また地方を対象とするならば、わざわざ二種類の書体を、同数铸造する必要などない、という意見が噴出してきて不思議でない。さらに時代が下がって崇寧・大觀にさらに大型の當十銭（實際の価値は當三）が政策として铸造されるようになると、小平銭を熔融して當十銭を私铸することが広範に行なわれ、小平銭の量が著しく不足してくる。加えて徽宗後半には、御書瘦金体の楷書が錢文の中心になると、「對銭」の意味はすっかり薄れてしまう。

話が前後するが、上掲『中書備対』の廣東や湖南の錢監に少し言及して置きたい。銅銭の需要増大と並行して、江南各地で銅山の開発が推進されたが、仁宗慶曆年間、江西・湖南に近い韶州でまとまった銅産地が見つかり、そこに铸銭監（永通）が設けられた（『武溪集』）。遅れて英宗治平四年（一〇六七）には、廣州の東方に当たる惠州（阜民監）でも铸銭が開始され、『中書備対』などの統計では、神宗時代この両監の歳額は八十万と七十万、合計して百五十万と、四大錢監に拮抗する数字を挙げる。おまけに、仁宗皇祐年間には、韶州錢監を四大錢監と並べ、五

者の歳鑄額を百四十六万余とする史料があり〔龍雲集〕卷二八、「策問」、
『宋史』卷一八〇、食貨志・錢幣)、阜民監の方も、神宗は「鑄する所の
の錢は内藏の歳額に係り、ただ前年より移撥して転運に与え銅を買わし
む。いま既に羨余あれば、宜しく復た内藏庫に帰すべし」と言っている
〔長編〕卷二五四、熙寧七年六月甲寅)。兩監が新錢を内藏庫に上供す
ることが事実なら、当然「對錢」の必要も起るであろう。しかし、神宗
の発言の翌年には、阜民監の折二錢十萬貫が、廣州市易務の本錢として
借し出されたり〔長編〕卷二六七、熙寧八年六月癸丑)、邵・惠兩方と
も、買銅の資金に回され、それで余剰があれば内藏庫に納入する(上記
『中書備對』)と言われている。さらに徽宗崇寧三年になると、「韶州永
通監では、毎年当二錢二十萬貫を鼓鑄し、小平錢に直すと四十萬になる。
併せて小平錢四十三萬も鑄造するから、合計八十三萬貫となる。うち三
萬貫は専売品の香藥購入に充て、残り八十萬は専ら岑水場の買銅本錢応
副に充当する」〔羣書考索〕后集卷六〇)、との記事に出会う。これは
熙寧・元豐の頃は六百萬斤を産出し、各地錢監の原銅供給源となってい
た韶州岑水場に、買銅本錢を供給する永通監の機能低下への対応策にほ
かならぬ。ことは更に変化し、折二錢をやめて新しく當十錢十萬五千貫
(小平錢額面百五萬貫)を鑄造し、その全額を内藏庫に納入せよという
事態をも生じる。こうした推移を眺めていると、崇寧の當十錢の特例を
別にして、兩錢監の鑄造錢がたとえ上供されたとしても、まずここで鑄
造されてきた折二錢を小平錢に兌換せねばならない。さらには、南の端
の兩監から、河南北部の開封まで、どのようにして新鑄錢を運搬するか
も頭の痛い問題である。海運が全く計算に入れない当時の状況で
は、韶州あるいは惠州から、広東内の河川を遡航して、湖南・江西にで
きる限り近接し、陸路大庾嶺を越えて贛水か湘江の上流に辿りつかねば

ならぬ。そこから先、とくに流路や水量の不安定な贛水上流では、何回
か船を換える必要もある。要は水運で銅錢を運ぶといっても、この錢綱
には沿江三監と比較にならぬ困難が横たわっており、開封政府の机上プ
ランだけで、ことは解決しない。銅の原産地に近く、鑄造に便利で、事
実年間百五十萬貫の鑄造額があったとしても、それらはこの地域一帯の
需要に応じることが優先される。そうした点からも、四大監同様に対に
なる字体の銅錢が、ここで大量かつ恒常的に作られる必要性があったと
は、私にはどうしても思えない。

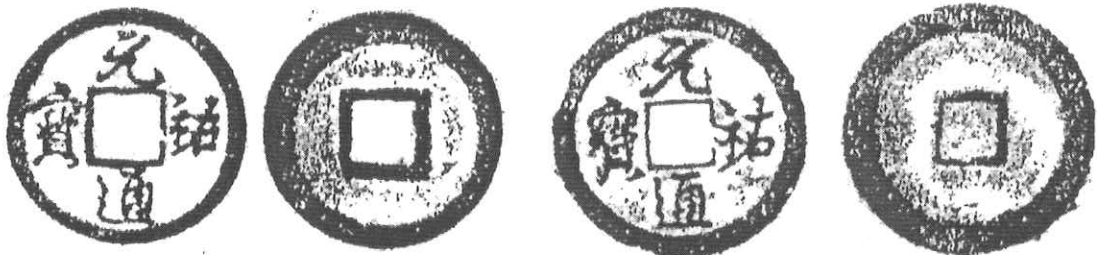
長くなるから、この辺りで、「對錢」が何故生まれたかという単純な
疑問に対する私の答えを、中間的に要約しておきたい。宋代、篆書を軸
に、楷、行、隸の書体を時に応じて貨幣に配対したのは、中国文化の根
底となる文字への尊崇の明確な表現であるとともに、前代までの貴族社
会のような特権がなく、新しい皇帝に科擧をつうじて認められ、その官
僚に採用された新興士大夫たちの、一つの精神・文化の象徴だったから
に他ならない。従ってまた、錢文はじめ貨幣の全体から、彼等新しい士
大夫たちの芸術的感性を含めた美意識も十二分に看取できることにな
る。そして何よりも重要なことは、新しい政治・経済・社会の媒体とし
ての貨幣に、それに相応しい権威を賦与するため、皇帝の財庫に献上さ
れる毎年の新錢は、二体の錢文が対になるよう演出された、というのが
さしあたっての仮説的結論である。

「對錢」は、一般には、五代十国の南唐で始まったとされる。錢文に
篆書を使用したのは、南唐李璟の保大年間(九四三―五七)の「唐國通
寶」と「開通元寶」なのだが、ここでも徐鉉の名が書き手として登場し
ている。両方とも輪郭がやや広く、穿が小さい整った形のものも多く、

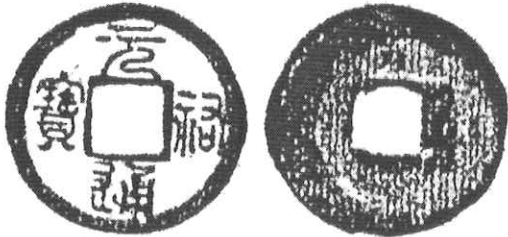
従ってその中の篆書と楷書の一部が「對錢」扱いにされることになる。現在の目で見れば、それは確かに「對錢」風に映るが、仁宗の天聖年間、宋代の「對錢」が出現するまで、八十年も間が空いているわけで、無媒介に両者を結びつけることには賛成し難い。宋代に入り、既述の通り、太宗後半の「淳化」「至道」に三字体の貨幣が出現する。しかしこれらは、三種が一セットを為すに過ぎず、版別により幾つかの組み合わせが作られても、それを「對錢」とは見做し得ない。北宋仁宗の天聖から、南宋孝宗の淳熙まで、宋三百年の半分の期間、「對錢」が作り続けられた。それでも百五十年以上の長い年月であるから、「對錢」の字体にも変化が生じ、同時にその存在もまた不変ではなくなる。その間の事情も一瞥しなければなるまい。仁宗天聖から、英宗治平を経て、神宗熙寧に至る約半世紀、十二種類の錢文に「對錢」が見られる。その殆どは小平錢で、字体も篆書と楷書の対が通例であった。このうち「皇宋通寶」などには篆・隸の「對錢」を区別するむきもあるが、私は楷書と隸書は、現実には大差なく、隸書が独立して篆書と対配されるのは、徽宗政和以降の期間に過ぎなかったと考えている。凶録を見ていると、確かに隸書に分類できる字体がある。翻って考えると、そもそも四字錢文の始祖である「開通元寶」の書体が八分隸書であり、その字体は、錢文鑄造の時、常に人々の脳裏に焼きついていたはずである。その楷書との相違点は、「通」のしんにゆう扁とか、「寶」の冠と下部の二筆以外には、さまで大きな相違はなく、泉幣家の意に沿わぬにしても、徽宗時代以外は、楷書の範疇に入れて支障はないだろう。それは、四字の錢文の中に、別の字体が含まれている場合と同様に、一種の遊びに過ぎなかったとも言える。四大錢監を除く地方の錢監では、むしろ規定の「錢様」は遵守する建前でも、時には工匠たちが気分により、多少の悪戯をすることも普通に考えられ

ることだし、楷書まがいの隸書が使われ、字体混合の銅錢ができて、それほど目くじらを立てる話ではない。

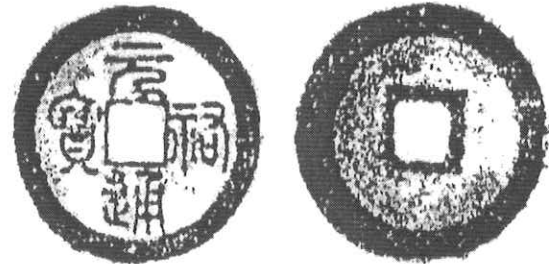
十一世紀の後半、第六代皇帝神宗の時代は、王安石が登用され、その改革は特筆大書される。彼は貨幣政策の上でも幾つか注目すべき改革を行なったが、ここでは、新法に伴い貨幣の数量を増大させたことと、海外への銅錢流出を認めたことを指摘するにとどめる。神宗前半の王安石時代は、「熙寧重宝」の鑄造はあったが、錢文は篆・楷の枠にとどまっていた。ところが、王安石が下野し、元豊と年号を変えた神宗親政時代に入ると、俄然楷書に代わって行書の錢文が採用される。「元豊通寶」はわが国でも残存の最も多い宋錢であるから、行書のそれをご存知の方も多いと思うが、その上級品は、文字がまさしく躍動し、重厚で気品に充ち、書法芸術としても立派なものと言えるだろう。恐らく熙寧まで続いた錢文の楷書もマンネリズム化し、加えて「熙寧」の二字が、楷書として不評判な点があったのかも知れない。とまれ、「元豊」行書の錢文は好評だったらしく、このあと、「元祐」「紹聖」「元符」「聖宋」と四種の錢文が二十三年に亘りそれを踏襲する(図10)。従ってこの時期の「對錢」は小平錢と折二錢を問わず、篆書に行書を対配するのが原則になる。ところが、徽宗が即位し、間もなく蔡京が宰相として権力を握ると、自分たちの利益を優先し、特に財政面での新政策を次々と打ち出す。貨幣では、実質三文を十文とする當十錢を鑄造し、経済を混乱させるが、この大錢をはじめ、崇寧・大觀の年号錢を徽宗の瘦金体の御書で飾ったため、楷書以外の字体は遠慮を余儀なくさせられる(図11)。當十錢や折五錢は無論のこと、小平、折二錢とも、瘦金体の四字を持つ銅錢は立派なもので、宋代貨幣中の白眉と称しても宜しかろう。ただ、急造の京師錢監はじめ、沿江錢監の一部でしか當十錢は鑄造できぬ上、流通面や大



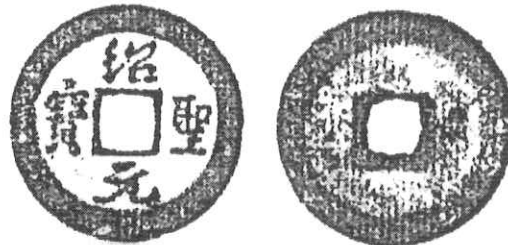
鐵元祐通寶・折二・行書俯寶



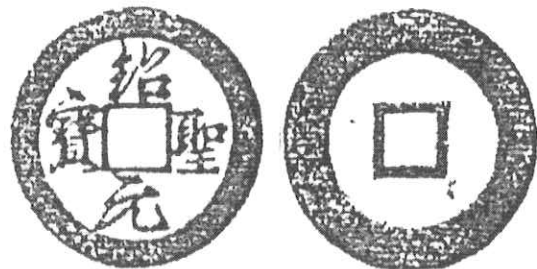
元祐通寶・折二・行篆書細輪廣穿對錢



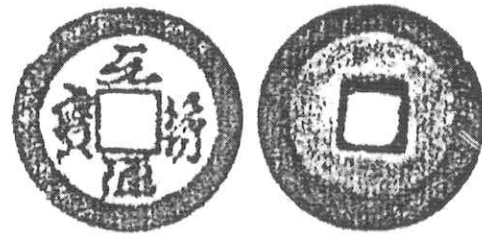
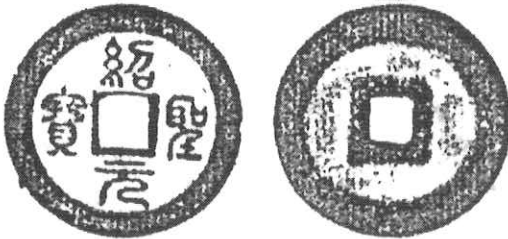
鐵元祐通寶・折二・篆書闊祐



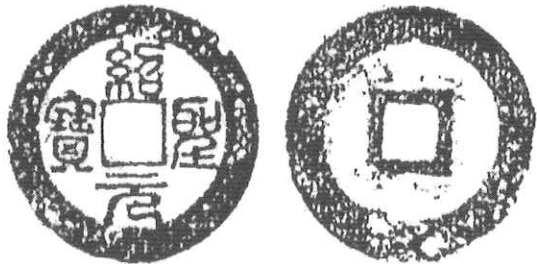
紹聖元寶・折二・行篆書狹聖對錢



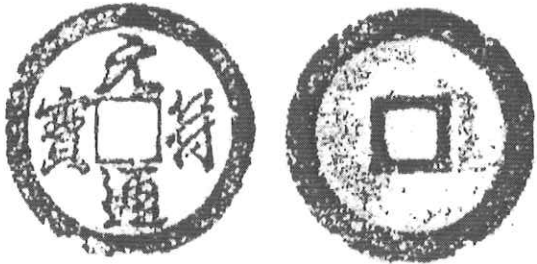
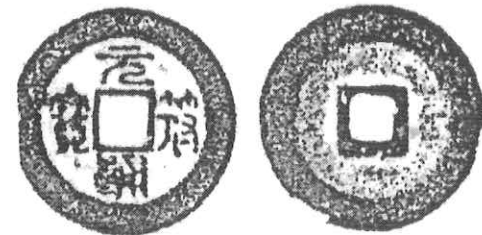
紹聖元寶・折二・行書鐵母短寶



元符通寶・折二・行篆書闊通接郭對錢



鐵紹聖元寶・折二・篆書正字



鐵元符通寶・折二・行書闊通

図10 北宋後期の行書折二銭（銅銭・鐵銭）

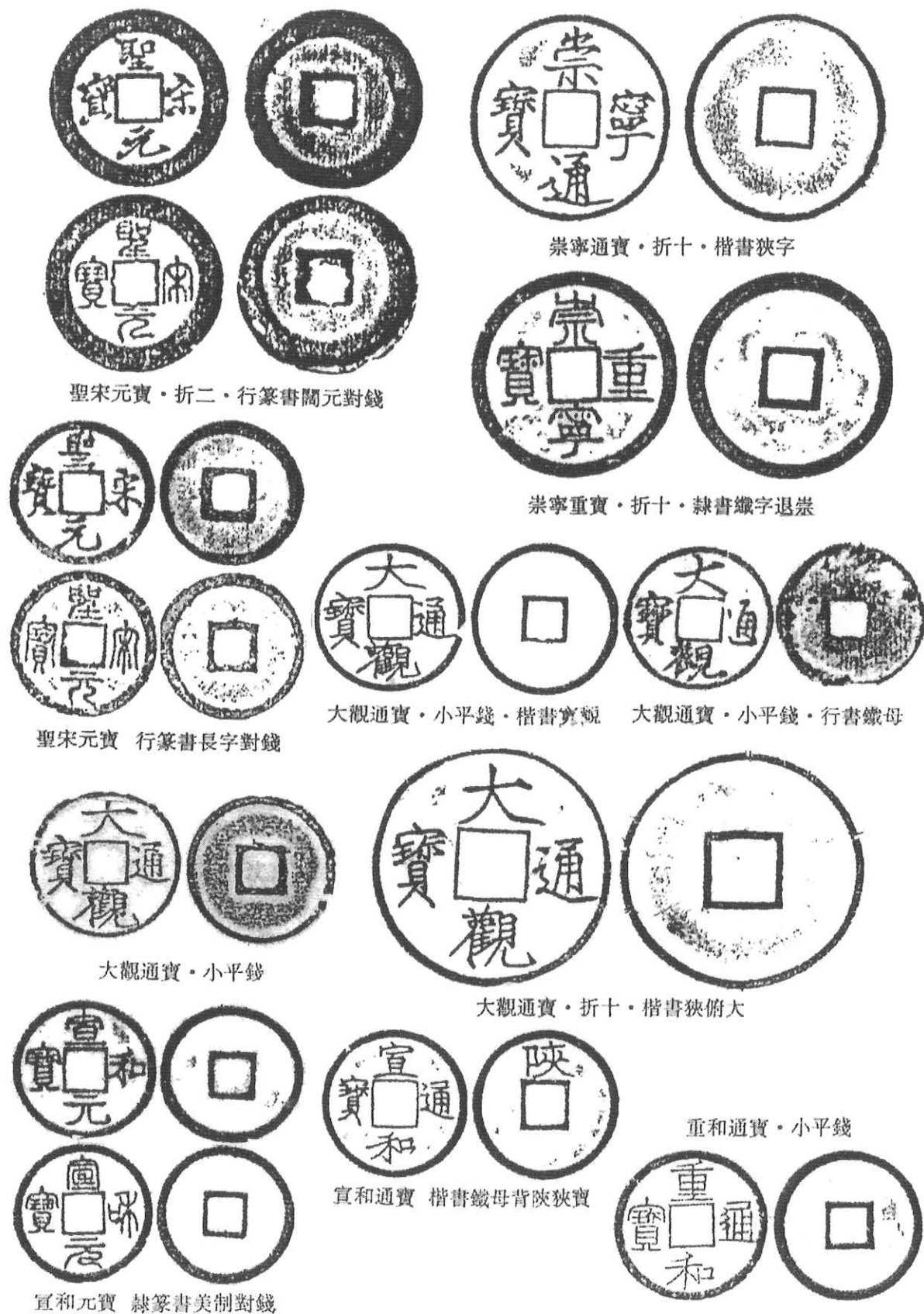


圖11 北宋末·徽宗時代銅錢 (含瘦金體)

銭におきまりの私鑄銭の増大が加わり、通貨政策全体では所期の効果を齎さなかった。余談になるが、二〇〇五年五月、安徽省安慶の東、長江岸の樅陽県で、江底から砂を吸収採取していた船が、大量の銅銭を吸い上げた。最初はその価値を知らなかった人々も、やがて深さ二〇メートルの江底泥砂からの銅銭採取に熱狂したという。この時だけの銅銭が発見されたかは不明だが、すべて新品の「崇寧元寶」當十銅銭で、版式も大差がないと報告されている（章新亮、陶治政「長江安慶段出水崇寧通寶銅銭」『中国錢幣』二〇〇五—二）。報告では、樅陽に近い舒州同安監の鑄造品ではないかと推定している。当時の文献では沿江大錢監のほかに、舒州でも當十錢鑄造が命じられているから、その蓋然性は高いかも知れない。いずれにせよ、徽宗前半で、それまでの上供「對銭」に、一つの区切りがつけられた。當十錢騒動が一段落した政和、宣和の徽宗末年に至ると、「對銭」が復活する。錢譜などでは、この時代の字体を楷・隸・篆とするが、注意して見ると、軸として篆書に對配されている字体は隸書である。政和銭については、楷書には前代の瘦金体の名残がみえるけれども、徽宗の真書ではなく、単なる鑄銭工匠の模倣であろう。それでは具合が悪いため、「對銭」には隸書が主流に使われた。先にも触れた通り、この隸書とて、気分は楷書と隔たりが少ない。他方宣和銭は、やはり隸書が篆書の相手とされる。ここでは、陝西で鑄造された、「陝」の字を背面に刻む小平銭に楷書がある。²⁷このような銅銭が皇帝のもとに運ばれるはずはないから、それに対する篆書銭が、銅・鐵ともに存在しなくて当然だろう。

直接には蔡京集團の失政と、徽宗の皇帝としての無能力さ故に、宋朝は国都開封を追われ、江南に逃避する「靖康の変」を招く（一一二六）。その前後約十年、年号にして靖康・建炎から紹興にかけては、金軍の南

進などで新皇帝高宗は逃げ惑い、貨幣どころの話ではなくなった。とは言うものの記録ではこの時期でも、錢幣の史料は残っているし、靖康と建炎を錢文に持つ種類の銅・鐵銭も少なからず現存する。しかし、紹興十二年（一一四二）の秦檜の和議までは、饒州などの錢監から国都臨安（杭州）に送られる銅銭さえ、実質は数万貫程度と言われるから、現代の泉幣家が、靖康・建炎の「對銭」に熱中しても、それほど生産的とは言えないであろう。私は宋代銅銭の意義、なかでも文化史としてのそれは、徽宗の時代で終焉を迎えたと考えている。縷説してきたように、宋代の新しい政治・経済・社会を背景に、北宋の銅銭は唐代と異なる目覚しい発展を遂げた。その百五十年に及ぶ道筋の中で、多くの試行錯誤が繰り返され、改良と淘汰の結果、元豐の頂点を迎えた。すべて頂点に達すればあとは下降に入るだけである。銅の原材料は急激に枯渇し、海外流出や死蔵が銅銭不足に追い討ちをかける。起死回生を狙った蔡京の小手先の貨幣政策も失敗し、時を同じくして北から女眞の侵入が始まる。

徽宗の崇寧・大觀の銅銭芸術の精華は、私の目には、滅び行く宋銭の放つ最後の光芒と映る。従って、「對銭」にせよ何にせよ、南宋百五十年の金属貨幣は、北宋の遺産の、魂なき継承ともいうべく、そこに何らかの積極的な意味を見つけようとしても、あまり生産的な成果は期待できないであろう。南宋が漸く落ち着いた十二世紀後半、孝宗の乾道から淳熙にかけて、年間の銅銭鑄造額は、僅かに十萬から十五萬貫、北宋時代の一小錢監の歳額がやっつとである。無論そうした数字だけでは、南宋江南の経済や社会を論じるわけにはゆかない。しかし少なくとも銅銭そのものに限って見れば、それが人々の関心を集める存在でなくなった点、言葉を変えれば、錢文の字体や貨幣の形態などへの興味が失われ、枝葉末節だけに拘泥し始めた事実を、指摘しておかねばなるまい。とまれ、

宋代の貨幣は北宋の滅亡とともに一つの画期を迎え、宋代貨幣の特色も、重要なものはあらかた出尽くしたと言つて差し支えなからう。

第三節 版別の問題

日本・中国を問わず、泉幣家たちは「版別」の二字に対し、我々部外の者には理解し難いほど、神経を尖らせておられるように見える。中国の貨幣用語で「版別」というのは、個々の貨幣の、表裏の形制、銭文、記号など、幾つかの要素につき精密な観察を加え、その貨幣の性格（個性）を明らかにすることかと思われる。秦漢帝国の時代から、中国の金属貨幣は、天地を象るとされる、円形で四角の穴を持つ「方孔円銭」の形状を持つ、直径二・五センチの銅銭を主としてきた。その伝統は、唐初六二二年に鑄造された「開通元寶」で一つのエポックを作り、以後、清朝に至るまで、大小はさておき、原則としては表裏の円周線（輪）を浮き立たせ、中央の穴（穿）を四角で囲み（郭）、輪・郭の空間の上下・左右に四字を配することが定型となる。この銅銭は、他の歴史世界の貨幣のように、プレス技法は用いず、範型に高熱で溶かした原料液を流しこむ鑄造貨幣であった点と、表裏の文様が、漢字もしくはそれに準ずる記号から離れなかつた点が、著しい特徴となっている。前文でも度々触れた通り、唐代の「開通元寶」以後、貨幣鑄造は、砂型二面を用意し、陽刻した表と裏の「母銭」をそこにサンドイッチ状に挟み、両面の型をとつたあと、「母銭」を外して湯道をつけ、表裏の砂型を合わせて緊縛、湯道から原料溶液を流し込む方法をとる。すでに第二章の諸節で詳述したように、この鑄造法では、「雕母」はじめ「母銭」の果たす役割が極めて大きい。特に、各鑄銭監の工匠が、その時々の「銭様」に従つて、銅や錫などの金属に字様を彫る作業が、その時の銭文の字様や位置を左

右する。仮に、一つの砂型で六十四個の銅銭が鑄造され、その「雕母」全部を一人だけで彫り上げたしよう。すべてが手作業だから、同じ銭文の「雕母」とて、そこには微妙な相違が当然生じる。また、ある程度時間をかえた作業なら、その日の気分次第では、同じ工匠でも違った銭文を彫ることもあり得よう。ここで私の言いたいことは、宋代のような鑄銭法を使い、最大二十六に達する銭監を持ち、しかも銭文の内容や字体に多くの変化がある時代、その気になれば、「版別」の微妙な差異からだけでも、合計すれば何百、何千という数の貨幣が探し出し得るといふ点である。多くの愛泉家の不断の努力と熱意により、歴大な宋銭の版別研究は高い水準に達している。その結果として、当該貨幣の鑄造時代、流通区域、鑄造銭監、真偽問題や珍品・稀観品の鑑定はじめ、收藏家や研究者に必要な基礎知識がもたらされることが強調される。ただ正直なところ、それらの知識は、どちらかといえばマニアックな性格が強く、その成果を有機的に結び付けて、貨幣研究に役立つ立体像を作り上げるには程遠い感じがする。それらは愛泉家や蒐集家がいかにも熱中しても、研究者の持つ問題意識と噛み合うには前途遼遠に思われる。

最初にも書いた通り、唐代三百年の貨幣の銭文は、その殆どが「開通元寶」で占められていたと見做して大過ない。概説的には、この銅銭は、国初武徳から玄宗開元まで、開元・天宝以降、そして武宗會昌の三期に区分して説明が加えられる。例えば、初期の優れたものは、①「開」の門構の短い縦画二本が、左右横三線の下二本で止り、上部は空いている。②「開」の下部は「井」状で、上にあがっている。③「通」のしんにゅうの点。④「元」の第一筆が短い、二筆の左あるいは右、時に両方が跳ねる。⑤「寶」の貝の下部が丸味を帯び、左右の二画が隸書体、といった特徴を持つとされる。この程度の版別の解説なら、拓本や写真と引き

合わせて、素人でも十分に理解できる。『大辭典』の唐・五代の「錢幣述語積義」を見ても、「文字」の部分に記載する「開元通寶」四字についての十四の版別区分は、上記①から⑤の範囲とその変化を挙げるに過ぎない。もつとも、この「錢幣述語積義」なる代物は、最も広義の版別と関係する『大辭典』中の用語解説に過ぎないが、唐・五代でも、その数は八十九に達する。ところが、同じ『大辭典』の宋代の「述語積義」では百二十八に増加し、これらは宋遼西夏金の錢幣中の基本的また常見の類別である、と断っている。ただし、唐・五代の八十九が単純に三十九増えたわけではなく、八十九から削減されたものもあり、また錢文の位置に関する述語などは、四から十四に増加しているなど、細かい点になると無条件には従えない。第一章で挙げた『大辭典』の宋代所収四百五十の宋錢の分類は、「術語積義」の定義に従っているわけであり、同時にそれが現段階での宋錢版別研究の有力な指標となっていると考えてよからう。

全体は、一、錢体(二十一)、二、文字(五十四)、三、錢文位置(十二)、四、紋飾(二十二)、五、紋飾位置(十三)、その他(五)から成る。忌憚なく言えば、次元の違うものが平気で並べられていたり、同じ内容と言えるものの別出、項目の入れ違いを始め、同じ項目内の用語が優劣・順序なく列挙されていたり、泉幣家には自明のことかも知れないが、素人が見ると、雑然たる印象を受ける。たとえば、錢体の部分、1、様、錢径に大中小あり、大様・中様・小様と呼ぶ。2、錢は面・背(表・裏)あり、背は光背・平背(平滑)、3、輪郭(輪)闊、挟、中、重、4、内郭(郭)廣、細、隱、5、錢肉厚、薄、6、穿廣、狭、花、などとすれば、単に二十一条を羅列するより、簡単に分かり易くなりはないか。また、最も重要な文字の項で、正、大、小、粗、細、闊、挟、

長、短、縮、斜、扁に肥、瘦と羅列され、肥は粗、瘦は細と書かれても、それだけで字形が目に見えれば、熟練の泉幣家以外はさまで多くはあまるまい。私が『大辭典』の図版について検討を繰り返しても、その区別はまことに微々たるもので、主観によりどうにでも取れる場合が多すぎ。宋錢の「述語積義」の中で特徴的な部分は、三の錢文位置である。

ここでは、唐代もあつた連輪、離輪、接郭、離郭の外に、接郭連輪、離郭離輪、接郭離輪、離郭連輪の四つを加え、文字の位置を更に詳細にせんと意図した部分と、貨幣の縦線と穿を目安に、字の位置の変化を次のように規定したところであろう。すなわち、縦の直径線から左にずれれば「進」、右であれば「退」、横は穿から上気味なら「昇」または「昂」、下気味なら「降」を使う。なお上・下の二字もその位置に高低があれば「昂」「低」の一字を加える。さらには、各文字の左端が上がり気味で右端が下がり気味なら「仰」、逆に右高左低なら「俯」をつける。以上の版別基準を実例にあたり、たとえば、「天禧通寶」小平錢の、「楷書狹寶仰寶」と「楷書狹寶昂寶」の区別などは、図版を比較しても、すぐには納得できない。また篆書「元豊通寶」小平錢に、「大字豊連輪俯元」とあるのに異議は唱えぬにせよ、連輪、俯元と断わっていない同様の図版を容易に幾つも発見できる。ほかの錢譜や図録はそれほどでもないのに、『大辭典』の南宋の部分は、「對錢」に必要以上に拘り、それと関連してか、毛筋ほどの版別の違いで別扱いにしようとする姿勢が目立つ。流石に中国でも、このような傾向に批判的な意見が出始めているかに見える。宋錢の歴史研究では一頭地を抜く劉森氏も、際限のない錢文の書写筆画の差異を説くことに精力を浪費すべきでない旨の発言をされている。思うに、版別研究は錢幣研究の多くの側面での基礎となる必須の仕事である。しかし、その必要性が説かれる時に理想として掲げた諸

問題の殆どは、単なる錢幣表裏の、精密な觀察に基づく類別だけでは解明できる性質のものではない。このため版別研究は、主として愛泉家活躍の独壇場となり、珍奇稀少の貨幣の追求に、その主要な目的を移しているのではないか。『大辭典』の唐から金までの部分を通読して、素人であるが故に、私はそうした感触を強くした。劉森氏は、一九七二年に安吉の墓から出土した、十八枚の「崇寧重寶」の錢樹と、一九九一年寶雞で出土した「建炎重寶」十九枚の錢樹が、大きさ、文字の位置その他、すべての面で不揃いな点を取り上げ、そこに版別研究では解明できない問題の所在を指摘されている（劉森「中国古錢版別研究爭議—兼論宋錢的版別」、『中国錢幣』二〇〇二—）。とまれ、時代が南宋に入ると、貨幣鑄造にも著しい変化が生じ、「對錢」は消滅し、版別研究もそれらに依りて活動分野を限られてしまうことになる。

第四章 南宋の貨幣

第一節 南宋銅・鐵錢の様相

女真族の王朝金により、徽宗・欽宗皇帝はじめ皇族の殆どを、蓄積してきた財宝とともに、東北の地に連れ去られた宋朝は、僅かに残った徽宗の第九子趙構を戴き、命からがら江南に逃れる（靖康の変・一一二七）。その後数年間は、金軍の江南侵攻で、趙構（高宗）自身沿海各地を逃げ回り、漸く杭州（臨安）を行在として落ち着くまでに、数年を要した。やがて宰相秦檜が権力を握り、金と和約を結び（一一四二）、江南の宋朝（南宋）がひとまず安定する。しかし建炎と紹興前期の十数年は、江南の大部分は未曾有の混乱に陥り、それが安定を取り戻すまでは、貨幣鑄造として、場当たりの状態を余儀なくされたのはむしろ当然だった

ろう。四川の鐵錢区域を除き、饒州永平監と、江西南部の虔（贛）州に逃避した錢監がどうやら稼動し、紹興末に至っても、それに韶州監が加わる程度では、鑄錢量や上供額も北宋の比ではない。靖康の変以後、三十年余りの比較的長期に亘るこうした鑄錢状況は、すべての面で下降線を辿っていた宋代の金属貨幣の衰退に、決定的ともいえるべき追い討ちをかけた。いかにも南宋王朝は、この後百年以上の命脈を江南半壁の地で長らえる。しかしそこで鑄造された銅錢や鐵錢は、いかに多種多様な版別を持つといえども、北宋のそれに見られた精密度、緊張感、そして芸術性、あるいは獨創性などはすべて影をひそめ、ただマンネリズム化した様式を踏襲する銅や鐵の小片に過ぎなくなっている。根本的には、金属貨幣はすでに第一線から後退し、流通經濟の媒体としては、交子、錢引、會子など名称と淵源は異なるにせよ、「紙幣」がその代替としての地歩を占めてしまう。北宋後半、五百万貫はさて置き、年間二百万貫近く鑄造されてきた銅錢は、南宋になると十分の一以下に減少してしまふ。それで北宋と同様な「貨幣經濟」社会が南宋にどのように継承されたのかという疑問にも当然答える必要がある。ことからは北宋の銅錢が南宋の紙幣に移行したというような単純な問題ではすまない。南宋の紙幣と政治・經濟・社会の關係は、甚だ複雑であり、紙幣と金銀・絹帛そして銅・鐵錢などの位相關係といった問題も絡んでくる。それらを簡潔に説明する力など私にはないし、またそれはこの小論の枠を遥かに超えてしまうので、ここではその事実の指摘に止めざるをえない。ただ、南宋百五十年の間に、五十種以上の年号錢文を持つ金属貨幣が継続する以上、歴史の大勢は別にして、それらにつき一応の概観くらいはしておく必要がある⁽²⁸⁾。

南宋の錢幣につき、その特色や注意すべき点を、これまた箇条書きに

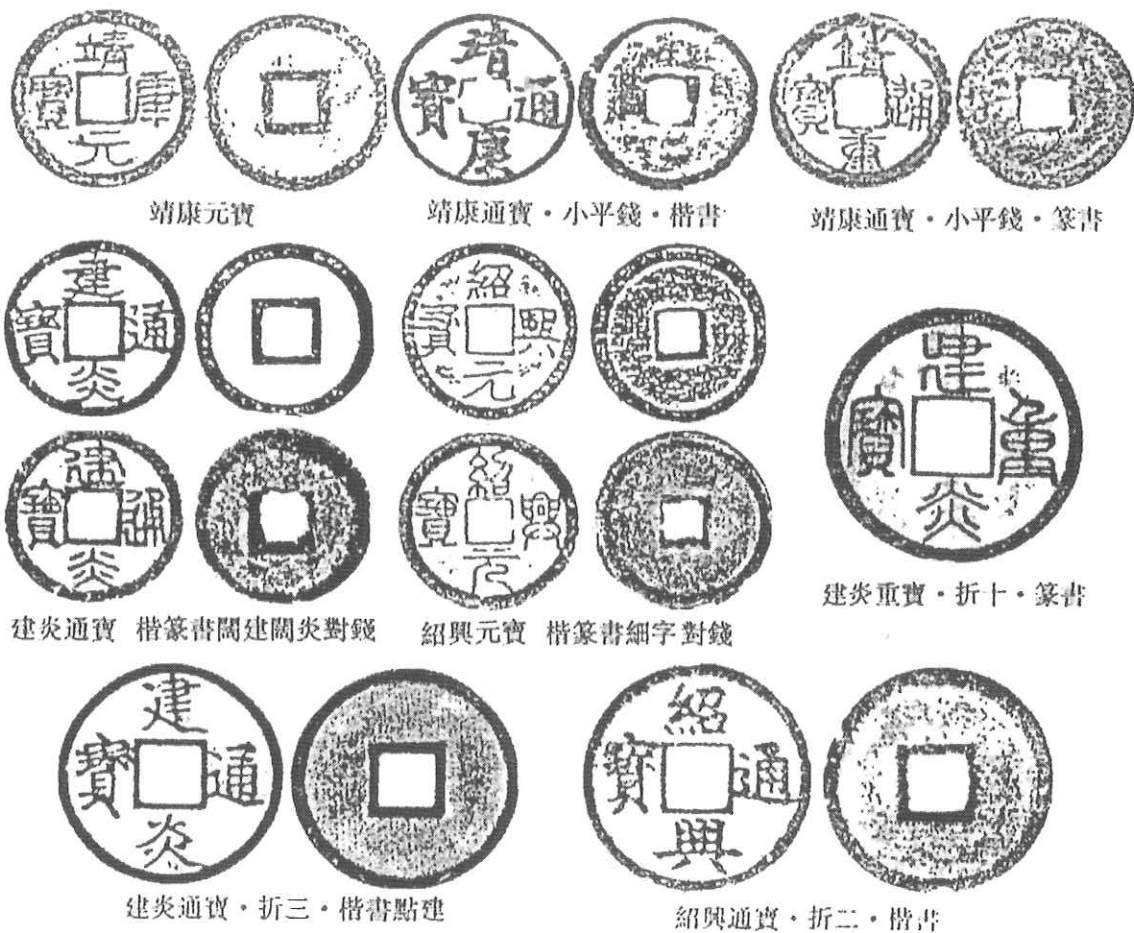
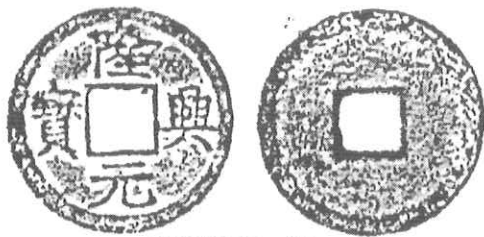


図12 北宋・南宋移行期の貨幣

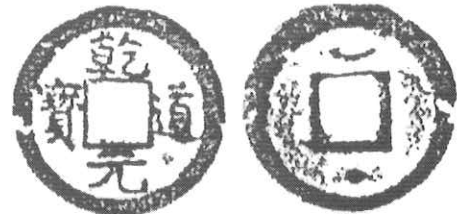
してみたい。

① 高宗の年号である建炎・紹興の三十数年は、混乱期とあって、貨幣の様式は北宋末のそれを踏襲するだけであった(図12)。従って篆・楷(隸)の字体、「對錢」、小平・折二銭など、すべてが北宋の通りに存在し、時には瘦金体の字様が混入しているものさえある。それが二代目の孝宗に入ると変化が顕著になり、特に淳熙年間なかばに一つの画期を迎える。

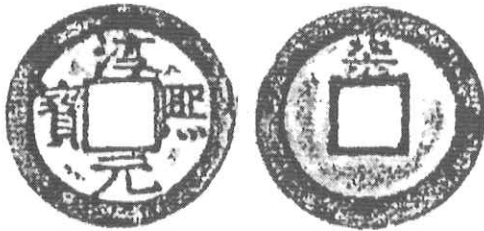
② 淳熙なかば、一一八〇年ごろを境にした変化は、一つは字体が楷書に一本化された点である(図13)。このあと篆書の銭文が例外的に二、三出現するに過ぎず、従って当然「對錢」の問題も、自動的に消滅してしまう。いま一つは、背面に鑄造年、鐵銭ではさらに錢監名が鑄入されるようになった点である。この背面の鑄造紀年は、銅銭では小平・折二を問わず南宋末まで遵守される。一方鐵銭は、四川と淮南・湖北等に大別され、それぞれが、時期や鑄銭監により、様々な個性を持つ。南宋の二代皇帝孝宗の時代、金の完顔亮(海陵王)が無謀な江南侵攻を試みて失敗した結果、宋は金に対してやや優位な関係を結ぶことができ、淮水から大散関に及ぶ北緯三三〜四度線を国境と定めた。そこで淮水と長江の間や西の漢水流域を緩衝地帯とし、軍隊を駐屯させた。特に淮南では、乾道二年(一一六六)鐵銭の使用が提案され、やがてそれが実行に移される。この場合、沿江各地に従来の銅銭監とは別に、やや小規模な鐵銭監が幾つか新設され、供給を開始する。その鐵銭には鑄造監名の一字を、紀年銘とともに鑄込む(紀監)。これら淮南鐵銭の鑄造監は廃止、復置を繰り返す。寧宗の嘉定半ばまで約五十年間継続する。一方、四川の中心地成都近辺と漢水上流の利州では、折三、折五などの大鐵銭が



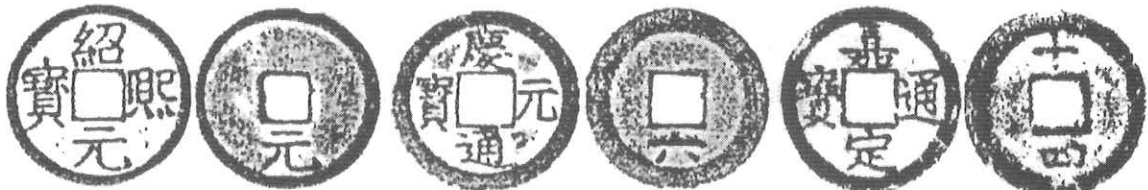
隆興元寶・折二



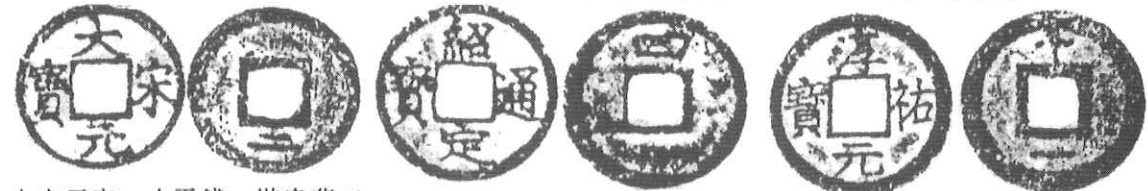
乾道元寶・折二・楷篆書背星月對錢



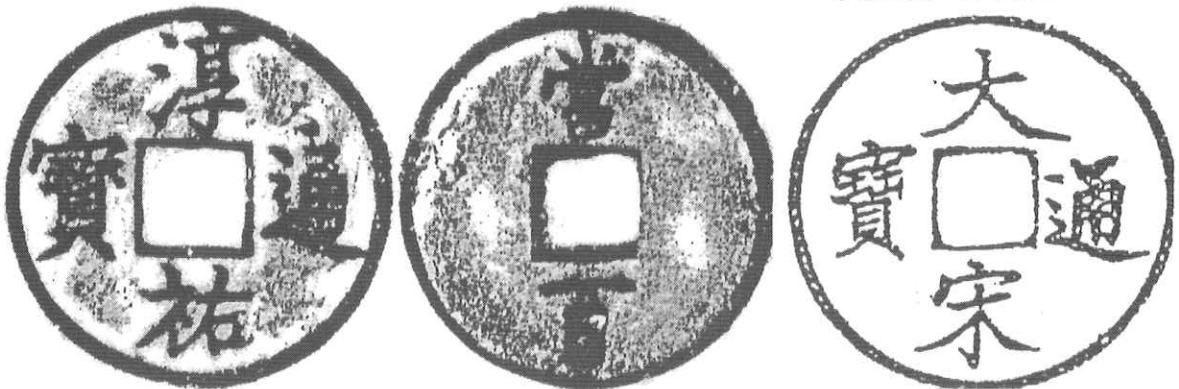
淳熙元寶・折二・楷書背柒



紹熙元寶・小平錢・楷書背下元 慶元通寶・小平錢・楷書背六 嘉定通寶・楷書背十四



大宋元寶・小平錢・楷書背二 紹定通寶・小平錢・楷書背四 淳祐元寶・楷書背十一



淳祐通寶・當百・楷書背當百

大宋通寶・折十・楷書背當拾



皇宋元寶・小平錢・楷書背元

景定元寶・小平錢・楷書背四

咸淳元寶・小平錢・楷書背七

図13 南宋時代の銅錢

鑄造され、表裏とも錢文の変化・種類に富む。

③ 異民族の侵攻に起因する混乱もあるが、南宋に入り最も大きな問題は、銅銭の原材料の欠乏である。南宋の文献では、鑄造銅銭の歳額として十〜十五万貫の数字を挙げるに過ぎない。神宗元豊の頃の五百万はおろか、北宋前半の百〜百五十万貫とは比較にならぬ数字である。このため、南宋では上述のごとく會子とそれに準じる紙幣を使用した。銅銭は姿を消したわけではないけれども、その減少・欠乏は社会・経済に少なからぬ影響を与え、同時にそれは、銅銭への人々のかかわりに変化を生じさせることに繋がる。たとえば、各錢監に欽定の「錢様」を渡し、それを手本に「雕母」を彫り、砂型で精密に「母錢」を鑄造することが、果たしてどの程度まで行なわれたであろうか。淮南や四川の鐵錢の裏面を眺めていると、まさしく百鬼夜行に近く、そうした手続さや、その裏にある貨幣への心遣いの、片鱗さえ窺うことができない。

第二節 背面の文字と記号

唐の「開通元寶」以後、金屬貨幣の背面に、ある種の記号や文様が現れ、ついで大抵は一字の文字が出現する。これは、五代・宋と繼承されるが、とりわけ南宋になると、幾つかの次元の違った文字や記号が同一貨幣に刻され、前代とは別の意味を持つことになる。唐初の優れた「開通元寶」には、「甲痕」と呼ばれる、爪先でつけたような短い線状の疵様の隆起がまま見られる。そこから、太宗武德皇后が誤ってつけた「つめあと」が、そのまま踏襲されたものとか、いや楊貴妃の爪痕だとかいったお話が作られる。恐らく本来は鑄造時のミスが、瓢箪から駒で、一種の人為的裝飾となって繼承されたものを除くと、やがて、月と星が

背面の文様として頻出し始める。その個別考証や意味づけは、数多くの人たちが試みているが、思いつきばかりで、あまり説得力のある結論は出ていないから、宋代を含めて、月・星やそれに準じる文様の話題は省略する。他方文字の方は、唐も末近い武宗の會昌五年（八四五）、有名な會昌の廢仏の結果、全国の仏寺の仏像や各種莊嚴具の銅が鑄潰されて出現した、大量の「開通元寶」すなわち「會昌開元」に現れる。廢棄された銅製の仏像・仏具の分量が多く、かつ地方の中心となる府州を、二十数箇所選んで鑄錢監とし、その場所を表示する一字を錢背に捺したのがそれである。通説では、京（長安）、昌（揚州）、藍（藍田県）のほか、洛・益・荆・越・襄・宣・洪・兗・潤・福・廣・鄂・平・興・梁・潭・桂・丹・梓・永の二十種が存在し、合計二十三字を数える²⁰。恐らく、当時各地に散在していた、各種各様の開元錢が集められて「母錢」となり、概して精度の低いやや小型の「開通元寶」が相当量鑄造されるときに、その背面に二十三字の一つを印した所謂「紀地錢」が登場する。おおむね「州」で代表されるこれら紀地の一字は、背面を彫り、砂型に捺して鑄造したものではなく、粗雑な「はんこ」状の一字だけを、裏面の砂型に捺していったと想定される。中国の錢幣関係の書物では、「會昌開元」の背面一字に「戳」という、日本人には馴染み薄い字を充てる。この「Chou」という字は印章を意味し、はんこを捺すと訳せる。宋代に普及する「銀錠」の印記に対しても、この「戳」の字が使用される。砂型に並んだ銅銭の背面に、片端から一字ずつ手作業で捺してゆくのだが、どうしても乱雑になる。残存数量が決して少くない「會昌開元」の裏面を見ていると、紀地の一字が稚拙で多様なのはまだ良いとして、「洪」の字などは捺す場所が不定の上、横向、転倒が枚挙に暇なく、ほかの場合とて、字が輪や郭にかかったり、二重捺しをしたり、専門の工匠が真

面目にやった仕事とはとても思えない。会昌の糜仏熱に浮かされた人々が、あたかもかの紅衛兵騒ぎのように、我も我もと新しい銅銭造りに参加した結果のように、私の目には映る。唐滅亡の直接の引き金となった黄巢の乱まで、あと三十年の歳月を残すこの時期、会昌銭とくにその裏面を眺めていると、その鑄造には「貨幣経済」といった立派な概念とは別の要素が色濃く流れ、それを南宋なかば以降の宋銭背面と比較すると、貨幣に対する感覚の著しい弛緩、さらに言えば「亡国の兆」がすでに現れているようにも感じられる。

五代最後の中原王朝後周の世宗は、武宗と同様に糜仏の皇帝として知られ、事実彼の場合も、仏像などの銅を鑄潰して、自己の「周通元寶」に役立てた。しかし、彼の新しい政治体制への意欲を物語るように、この銅銭は、唐盛期の「開通元寶」の忠実な模倣を心掛け、「会昌開元」とは全く異なる優れた貨幣であった。宋は太祖から真宗まで三代の約六十年は、その流れを継承し、銭文は異なっても良質の銅銭を、著しく数量を増やしながら鑄造していった。この間は、背面は、唐中期までと同様に、月か星が形状や位置、あるいは組み合わせを変えて、アトランダムに鑄出されるに過ぎず、そこに何らかの意味が籠められていたとは思えない。「会昌開元」の紀地の文字は、その後消滅し、五代地方政権、例えば湖南の馬氏の大銭に「天」、福建王氏のそれに「閩」などの字が刻されはしても、偶発的、一時的現象にとどまった。十一世紀半ば、四代皇帝の仁宗後半、繰り返し触れたように、陝西・甘肅で西夏と抗争が始まると、陝西に鑄銭監が新設され、そこで鑄造された「至和重寶」などの銅・鐵銭に、「號」「坊」「河」「同」など紀地が現れる。ただ、それらは限定された場所の一时的なもので、たとえば沿江の主要鑄銭監の銅銭には、紀地銭は全く見られない。この趨勢は北宋を通じて変化なく、「熙

寧元寶」に「衛」（一説「衡」）、「元豐通寶」に「銅？」、「紹聖通寶」や「聖宋元寶」の「汾」「上」などが稀に見られる他、陝西や河東で「陝」（入とあるべき部分が人に作られている）がやや多く鑄入されたに止まる。

南宋高宗時代の混乱時代には、四川の鐵銭に「川」「利」などがあつた以外、江南の銅銭は北宋のままであった。ところが、南宋二代皇帝の孝宗の淳熙七年（一一八〇）以後状況は一変する。変化の第一は「紀年」であり、第二は「紀監」である。この場合、原則として銅銭は紀年だけ、鐵銭は紀年と紀監の両者を持つ。では何故この時点で、こうした方策が採られたのであろうか。

南宋初の混乱期、麻痺した鑄銭監の機能は回復せず、銅の原料不足が追い討ちをかける。社会がやや安定に向かつて、市場に銅銭は欠乏し、勢い「私鑄銭」が横行する。紹興二年の詔では、「近歲韶州所鑄新錢、不甚磨錯、湖東人号为韶錢。又倣之私鑄、夾以沙土、謂之沙錢。每千財直二三百（近歲、韶州鑄るところの新錢、甚しくは磨錯されず。湖東の人号して韶錢と為す。またこれに倣いて私鑄し、夾むに沙土をもつてす。これを沙錢という。每千わずかに直二・三百）」（「建炎以來繫年要録」卷五二、紹興二年三月丙辰）といっている。また、錢背の改正が行なわれたのと同じ時期にも、次のような上言が残されている。「泉貨之乏、公私所患。臣近從江西一路窺見、人間多是沙毛。蓋緣游民無賴之徒、群聚山谷、銷毀崇寧大錢之一、模鑄沙毛二十。毛錢脆薄、易于破壞、十數年來、此錢甚行。多是金銀鋪及諸色庫戶、以見錢六百換易、私相貿易、動以千萬緡計。（泉貨の乏しきは公私の患らうところなり。臣近ごろ江西一路より窺見するに、人間多くこれ沙毛なり。けだし游民無賴の徒、

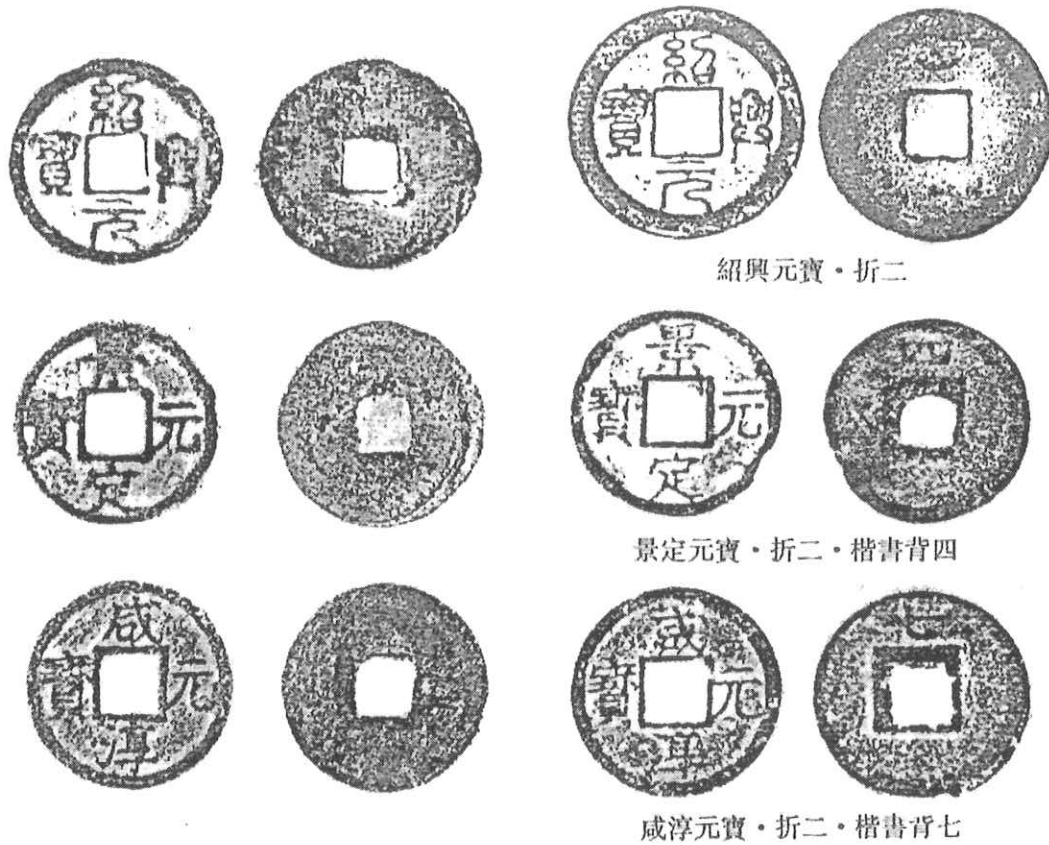


図14 南宋時代の私鑄銭（左側）と本物の比較

山谷に群聚し、崇寧大銭の一を銷毀して、沙毛銭二十を模鑄す。毛銭は脆薄にして破壊に易きも、十数年来この銭甚だ行なわる。多くこれ金銀鋪及び諸色庫戸、見銭六百をもって換易し、私相貿易すること、ややもすれば千・万緡を以って計る。」（『羣書考索』后集、卷六〇）。これらは私鑄銭でも特に粗悪な、沙泥を混入した「沙毛銭」について論じているものだが、鉛や錫あるいは鐵などで水増ししたものから、図版や拓本で表面を見ただけでは判別できないものまで、千差万別である。私鑄銭の大部分は、材質や文字の違いのほか、銭背が平滑ないわゆる「平背」という点で区別できる。翻沙の工程で背面の鑄造を省けば、材料と労力の大幅な節約になり、当然利益も大きくなる。『大辭典』の南宋の部分には、建炎から咸淳まで、十四種類の私鑄銅銭約六十枚の図版を載せる。それらの表面だけから、私鑄とそうでない銅銭を判別することは、日本人にはかなり難しかろう（図14）。いずれにせよ、小平銭の絶対数の不足を背景に、その他幾つかの要因が加わって、南宋前半は私鑄銭が横行し、実効ある禁止策を講じる必要に迫られた。翁樹培が『古錢匯考』巻五の「淳熙元寶」で引用している、『永樂大典』所引の『宋史』には、「淳熙」七年後、盜鑄する者多きに因りて、遂に諸監をして、逐年背文の上、年数を鑄せしめ、もってこれを別つ。その弊遂に止む」と記す。紀年銭出現の一つの理由が私鑄防止にあったことは疑いない。

また、陳元靚の『事林廣記』巻五、貨寶類・貨泉沿革を見ると、宋朝孝宗の「淳熙元寶」の項に次のような一文が挿入されている。「淳熙」七年以後、折二銭錢背、有年数者、為錢監多只就民間、増直買見行新銭以進。朝廷知之、欲杜其奸。遂令諸監、逐年以所納新銅銭背、鑄年数、以別之。其弊遂止。（七年以後、折二銭の銭背に年数あるは、錢監多くただ民間につき、直を増して見行の新銭を買い、もって進む。朝廷これ

を知り、その好を杜^とさんと欲す。遂に諸監をして、逐年納むるところの新銅銭の背をもつて、年数を鑄し、もつてこれを別つ。その弊遂に止む」。主要錢監には一定の鑄造額が割り当てられ、多くの場合「對錢」の形式で、国都開封の皇帝庫に送られた規定は、南宋に入ると殆ど実体を失ってしまった。それでも各錢監は、僅かな上供額の辻褃を合わせるため、市中通行の新銭を割り増し価格で買い取り、それを上供銭の数に加えていたという話である。無論この話の裏側には、鑄造原料や工賃の費用より、プレミアムをつけて市中銭を買っても、錢監の儲けになるという状況が存在していたことは想像に難くない。とまれ、中央では、少しでも多く新鑄銭を欲しがり、それに付込んで錢監側も、不正を働いていたことが知られる。『事林廣記』では折二銭だけのように書くが、淳熙七年以降の背面の紀年は、小平と折二、銅銭と鐵銭の殆ど全体に普通化している。

この二つの問題に対し、紀年、紀監鑄入の措置は、ある程度は効果があったと見て大過あるまい。それが南宋末までほぼ百年近く、不断に踏襲されたことが何よりの証左になる。具体的に見ると、孝宗乾道六年（一一七〇）以後、寧宗嘉定末年（一二二四）まで、鐵銭の背面に紀監の文字を残す鑄錢監は、江北一带と江西で合計十指を数える。それらは、乾道・淳熙・紹熙・慶元・嘉泰・開禧・嘉定の年号に亘り、慶元を除き「通寶」「元寶」両方にまたがり、また小平・折二を問わない。ただし、十錢監の字がすべて揃う年号銭などはなく、同じ錢監の年号銭でも、紀年が全部見られるわけではない。延べ六十年の期間、継続して比較的多数残るのは、舒（舒州）、舒同（舒州同安監）、同（同安監）、松（舒州宿松監）、蕲（蕲州蕲春監）、漢（鄂州漢陽監）などで、あとは廣（江州廣寧監）、安（黃州齊安監）、定または光（光州定城監）、そして治（興國

軍富民監）、豊（臨江軍豊餘監）、裕（撫州裕国監）が散見する程度である。南宋淮南鐵銭の鑄造監は、消費地域に近接し、かつ原料と燃料供給の容易な場所が優先されたため、長江中流の南北に集中し、ごく一部が江西に置かれることになる。従って錢監の規模も概して小さく、通常は短期間、長いものでも鑄造は断続的である場合が多い。銅銭では、紀年の数字が、たとえば「紹熙元寶」なら穿の下に「元」から「五」までが、「嘉泰通寶」なら穿の上に「元」から「四」までの数字が刻まれる。同一年号銭なら紀年数字の位置は一定だが、錢文の相違で上下が変わる点については、特にルールはない。それが鐵銭となると、紀年と紀監の両者が必要になり、それに月・星紋なども加わり、さらには年号が十年を超えると、スペースの問題が生じて、十二なら十と二、十四なら十と四を上下に分けたりする。その時々に応じたこうした処置は一見賑やかながら、正直言えば雑然たる様相を帯びてくる。⁽²¹⁾それらは図15以下により一目瞭然であろう。一九八五年七月、江蘇省高郵で大運河の浚渫工事に、御碼頭と呼ばれる地点の泥土から十万枚の銅・鐵銭が発見され、ここに上記淮南の鐵銭が大量に含まれていた。⁽²²⁾この地点では、清朝の嘉慶十八年（一八一三）にも、全く同様な貨幣数万枚が採取されており、高郵城北部の承天寺跡と呼ばれるこの場所には、鐵銭貯蔵庫が置かれていたと推測されている。この発見により、淮南鐵銭の実物が容易に目撃できることとなり、同時に宋錢蒐集家たちや版別研究家たちが、そこに群がり集まる原因ともなる。淮南の鐵銭は、理宗の紹定から端平初年（一二三四）まで、僅かながらその実物を見ることができ。しかし、理宗の端平初年といえば、チングス汗の第三子で、二代汗位を継いだオゴタイが、黃河以南に追い詰められた女真族王朝「金」を滅亡させたその年にあたる。「端平通寶」の鐵母銭に「春・元」を刻むものが存在しても、



鐵乾道元寶・小平錢・楷書背春柒



鐵乾道元寶・小平錢・楷書背同捌



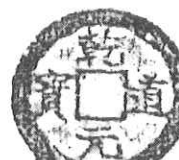
鐵乾道元寶・折二・楷書背邛



鐵乾道元寶・折二・楷書背左同



鐵乾道元寶・折二・楷書背松月



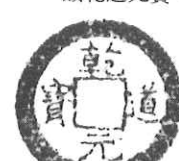
鐵乾道元寶・折二・楷書背廣



鐵乾道元寶・折二・楷書背裕



鐵乾道元寶・折二・楷書背豐



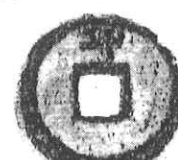
鐵乾道元寶・折二・楷書背治



鐵乾道元寶・折二・篆書背上正下星



鐵乾道通寶・折二・篆書背安



鐵淳熙元寶・折二・篆書背邛



鐵淳熙元寶・小平錢・楷書背舒同月



鐵淳熙元寶・小平錢・楷書背松九



鐵淳熙元寶・折二・楷書背利



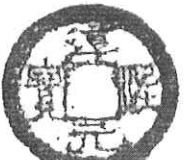
鐵淳熙元寶・折二・楷書背舒松



鐵淳熙元寶・折二・楷書背舒同



鐵淳熙通寶・小平錢・楷書背春十六



鐵淳熙元寶・折二・隸書背春玖



鐵淳熙通寶・折二・楷書背同十六



鐵紹熙元寶・小平錢・楷書背光二



鐵紹熙元寶・小平錢・楷書背定二



鐵慶元通寶・小平錢・楷書背春元



鐵嘉泰元寶・折二・楷書背漢元

圖15 南宋時代・江北の鐵錢

実際にはその鐵錢はすでに鑄造できなかつたであろう。

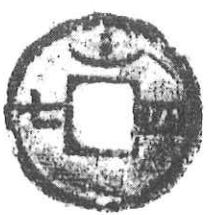
ところが、同じく南宋の鐵錢使用区域である四川では、淮南・江北とは全くといって良い位、異なつた背文の鐵錢が大量に鑄造される。四川の鑄錢監は、当然ながら原料の鐵と燃料供給に便利な場所に設けられる。北宋初期には成都の西南、雅州百丈峯の錢監が記録に残るが、鐵錢の使用が普遍化すると、成都周辺では、百丈の東北にあたる邛州の惠民監と、岷江を下つた嘉州の来遠監、とりわけ前者が中心となり、第一章第二節で述べた、北部興州の濟衆監が加わる。それが南宋になると、濟衆監がやや南の嘉陵江に沿つた利州(綿谷)に移動して紹興監と改名し、惠民、来遠と並んで四川鐵錢の鑄造を分担することになる。これら諸監が曲りなりに起動するのは、高宗の後半期以後のことだが、わりに早い時期に、利州紹興監を代表する「利」、邛州惠民監の「邛」の紀地の一字が、少数ながら背面に姿を現わす。ただ嘉定府来遠監の「定」は、南宋も後半にならぬとお目にかかれない。

四川の鐵錢の背面が賑やかになるのは、十二世紀末の光宗紹熙年間以降である。これら鐵錢は直径が三センチ、重さ八〜九グラム以上と大型で、折二、折三、折五などの価値を与えられるが、折二は少なく、その価値が正しく分かるように、「紀値」を加えるのが通例である。百聞は一見に如かずというから、錢文と背面を多数図示し(図16以下)、簡単な解説を加えるに止めたい。図16には、利州紹興監鑄造の、紹熙から開禧年間までの大鐵錢を網羅する³³⁾。ここでは「紀値」は「孕み月・星二」と俗称される、上弦の三ヶ月の中に点(星)二つを穿上に入れ、「三三」つまり「折三」の価値を現わす。利州にはないが、「孕み月・星一」なら「折二」となる。この「紀値」は、南宋四川の大鐵錢のうち、主とし

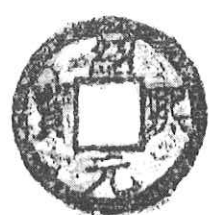
て利州で使用されていたようである。この他、全部のどこかに「四六」から「六二」までの数字が入っているがそれは後述する「炉紀」の番号と言われ、別に「慶元通寶」や「嘉泰元寶」の穿上に、「利六」とか「利元」とあるのは「紀年」である。ところが「川」の「紀地」を共通して使う、邛州惠民監の鑄造大錢になると、最後の「聖宋元寶」を除くと、原則として「紀値」がなかつたかと思われる。ここでも、「三四」から「四四(四七)」までの「炉紀」番号が附けられているが、穿上に「川六」、「川一」、「三川」などの字が見える³⁴⁾。表面の錢文や下の「炉紀」番号との関係の考証が必要だが、とりあえずは、これらの数字は「紀年」と解しておく。そこで問題になるのは、「炉紀」の番号数字である。現在のところ、この数字は、毎年一度炉が開かれる時、附けられるものと解されている。利州紹興監は、紹興十五年(一一四五)の創置だが、「紹熙元寶」を二年(一一九二)の鑄造とすれば、四十六年で、背面の「四六」と一致するように思われる。思われると言うのは、この「炉紀」と称される番号には、色々な疑問も残るからである。たとえば、「慶元通寶」の「五六」に続く「嘉泰元寶」も同じ番号である。これに対しては、改元されても、鑄造の年度は継続しているため、番号は変わらない、と説明されると、そうかなと肯いてしまふ。ところが図17の惠民監の鐵錢を見ていると、「慶元元寶」「川六・卅七」が、改元とともに「嘉泰元寶」「川一・卅八」と番号も変わり、明らかに紹興監の方法と異なる。その間の細かな理由の究明は、恐らく不可能であろう。翻つて惠民監の大鐵錢背面を眺めると(図17)、ここにも「三四」から「四四(四七は除外)」までの「炉紀」が並ぶ。邛州のこの監は、紹興三十一年(一一六一)復置されたと『玉海』(卷一八〇)が記載する。さすれば、「川六」即ち慶元六年(一一〇〇)の「慶元元寶」の番号は「四十」となるべきであら



鐵紹興元寶・折三・楷書背孕雙星四六



鐵紹興元寶・折三・楷書背孕雙星四七



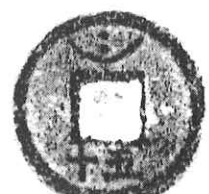
鐵紹興元寶・折三・楷書背孕雙星四八



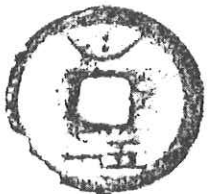
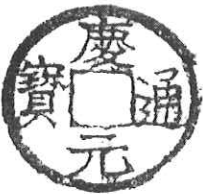
鐵紹興元寶・折三・楷書背孕雙星四九



鐵紹興元寶・折三・楷書背孕雙星五十



鐵慶元通寶・折三・楷書背孕雙星五十



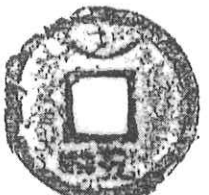
鐵慶元通寶・折三・楷書背孕雙星五一



鐵慶元通寶・折三・楷書背孕雙星五二



鐵慶元通寶・折三・楷書背孕雙星五三



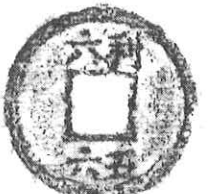
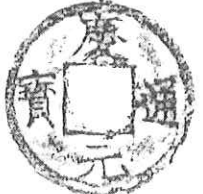
鐵慶元通寶・折三・楷書背孕雙星五四



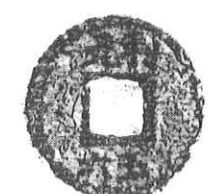
鐵慶元通寶・折三・楷書背孕雙星五五



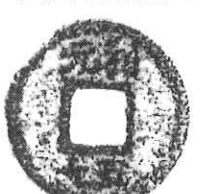
鐵慶元通寶・折三・楷書背孕雙星五六



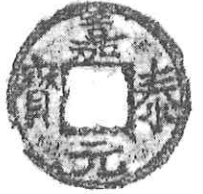
鐵慶元通寶・折三・楷書背利六五六



鐵嘉泰元寶・折三・楷書背利元五六



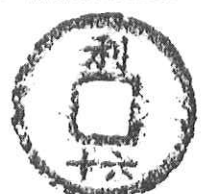
鐵嘉泰元寶・折三・楷書背利元五七



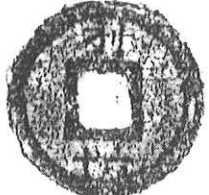
鐵嘉泰元寶・折三・楷書背利元五八



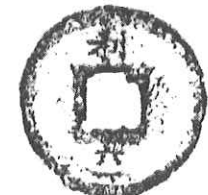
鐵嘉泰元寶・折三・楷書背利元五九



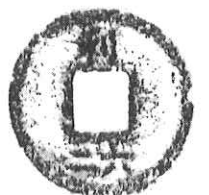
鐵嘉泰元寶・折三・楷書背利六十



鐵開禧元寶・折三・楷書背利六六



鐵開禧元寶・折三・楷書背利六一



鐵開禧元寶・折三・楷書背利六二

圖16 南宋中期・利州路の番号鐵錢

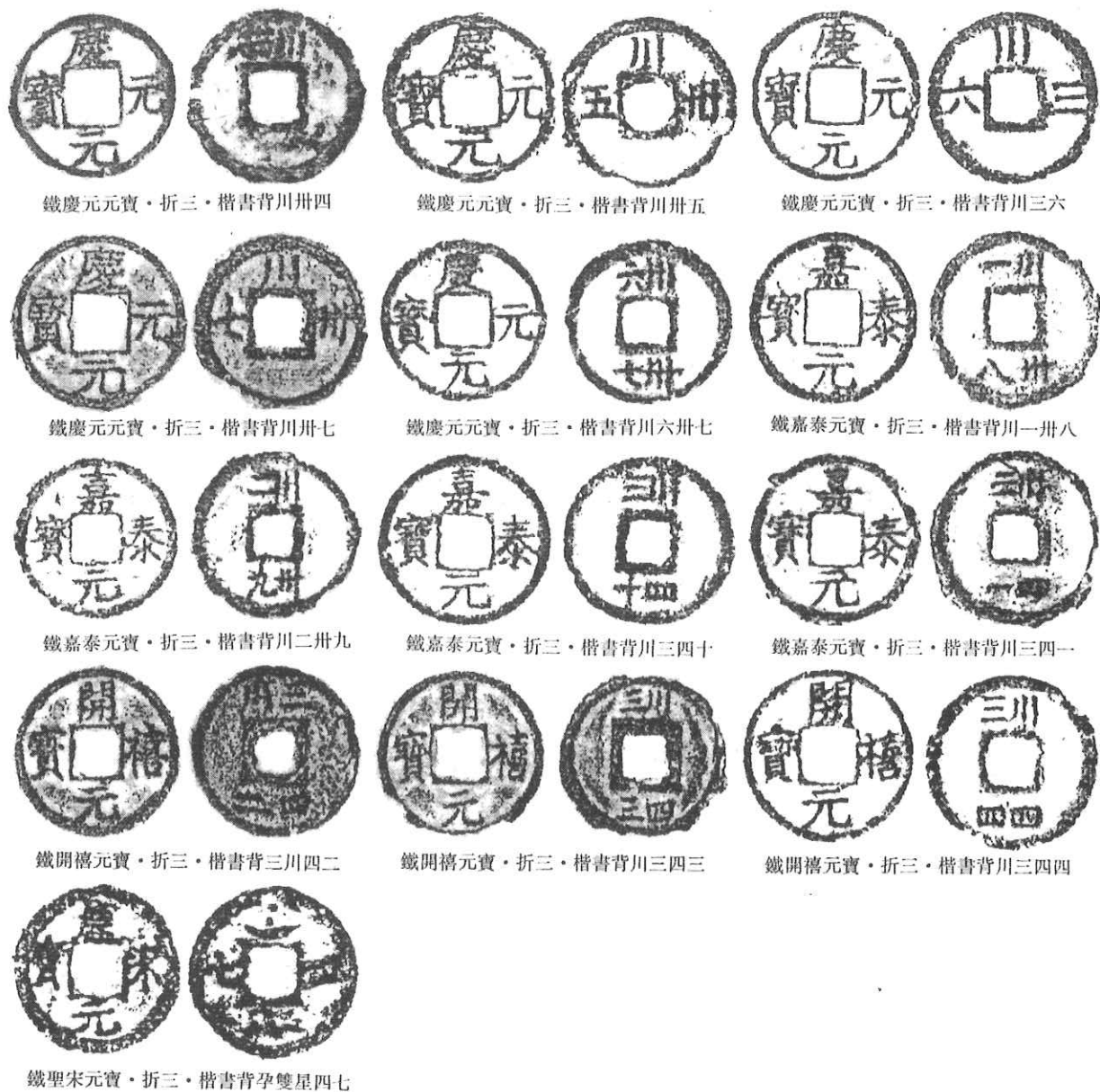


図17 南宋中期・成都府路の番号鐵錢

うが、実際は「卅七」である。その間に铸造しなかつた年があり、その番号が順送りにされたといった推測は誰でも思い浮かべられようが、本当のところはこれまた不明である。このような問題は、それこそ幾らでもあり、たとえそれらを説明してみてもさほど役にはたつまい。たとえば、上記利州の部分で除外例とした、「孕み月二点・四七」の「聖宋元寶」(図17最下段)を御覧頂きたい。いったい「聖宋元寶」の錢文は、北宋徽宗初期、建中靖国を避けてわざわざ作られた錢文であり、こんな所で再度出現してはならぬ筈である。徽宗当ても鐵の折三錢が存在していたが、この寧宗聖宋は表の錢文はともかく背面が全く違い、そこに「四七」の「炉紀」と思しき数字が刻まれている。この「聖宋元寶」は、同時に铸造された「聖宋重宝」とともに、寧宗嘉定年間に四川に出現したが、現存する品は僅少である。この折三鐵錢が偽物でなければ、惠民監の「炉紀」は「四七」まで続いたのかも知れない。

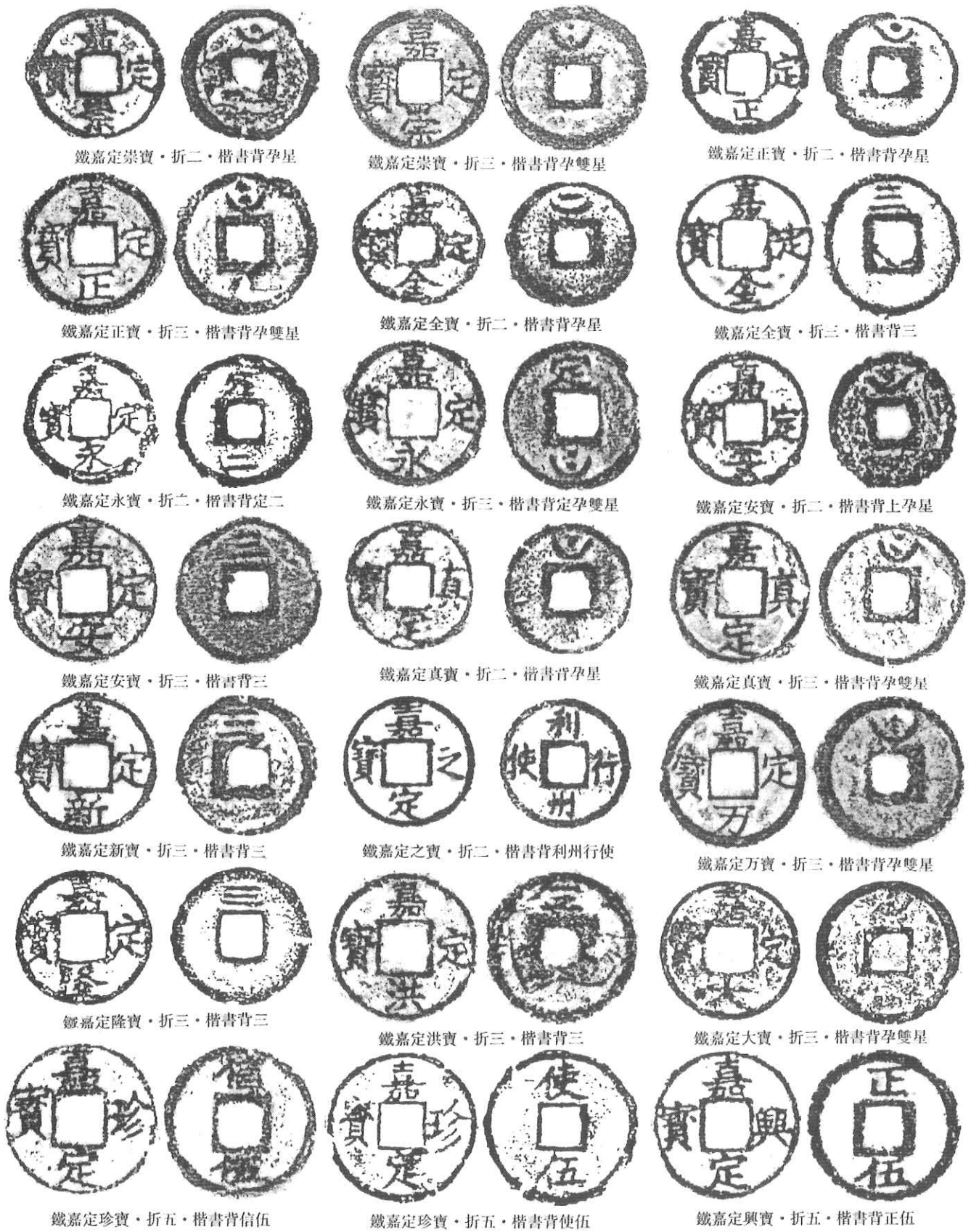


図18 南宋嘉定年間の四川鐵錢とその背面（一）

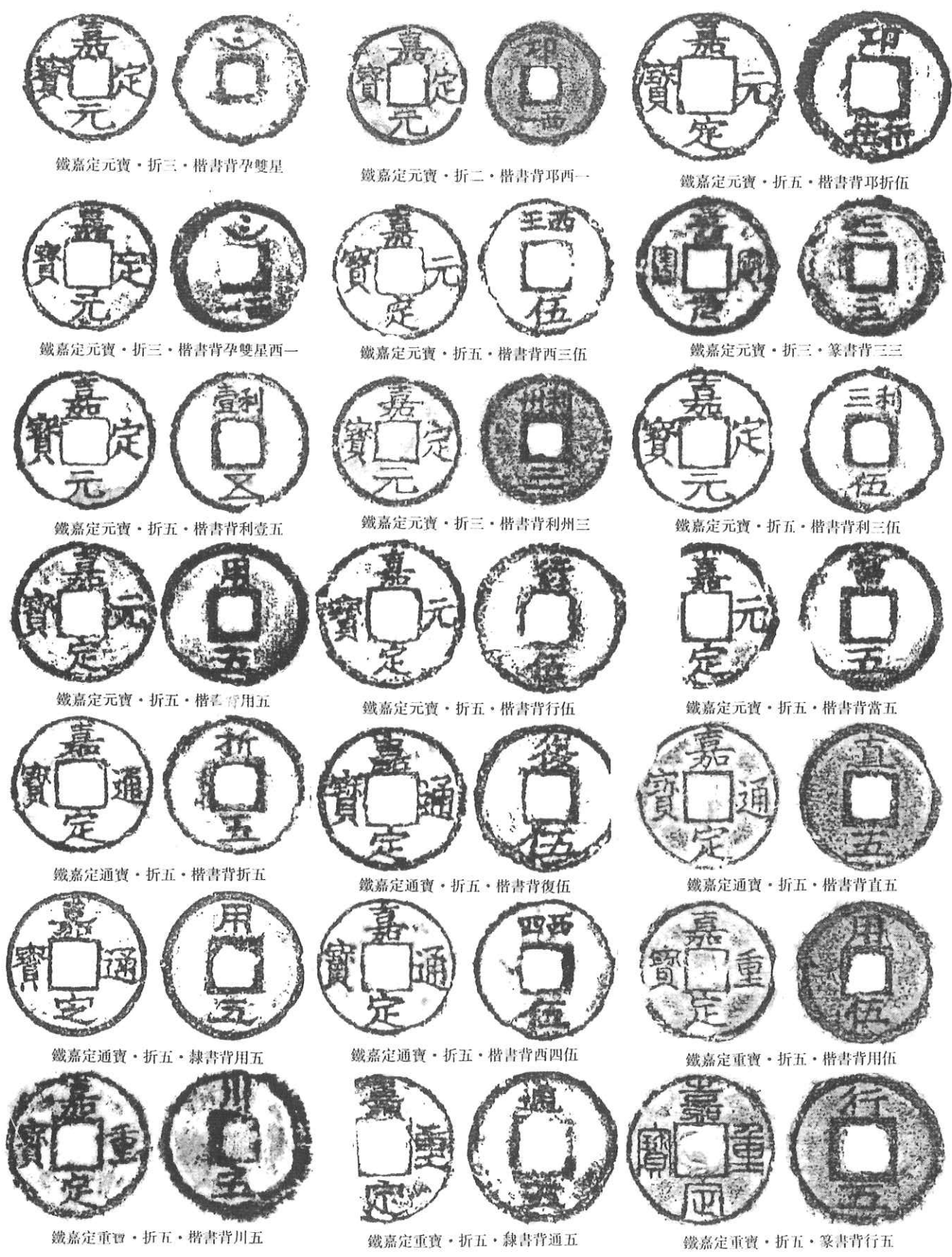


図19 南宋嘉定年間の四川鐵錢とその背面 (二)

南宋第四代皇帝の寧宗嘉定年間（一二〇八—一二四四）、四川の鐵錢にそれまでなかった大きな変化が起る。背面は暫く措いて、まず表面錢文の多様化に驚かされる。³⁵通常の「通寶」「元寶」「重寶」とは別に、「嘉定」の年号の次に、従来全く見られなかった二字が、何の脈絡もなしに次々と現れる。図18、19を参照頂きたいが、それらは「崇寶」「正寶」「全寶」「永寶」「安寶」「真寶」「新寶」「之寶」「万寶」「隆寶」「洪寶」「大寶」「珍寶」「興寶」「泉寶」「封寶」「至寶」と十七種類を数える。これらに、通常の「通寶」「元寶」「重寶」を加えると二十字になるから、五言詩か、或いは何か意味のある文章になるのかも知れない。この二十種類の鐵錢の半分は、折二と折三や折三と折五を持つから、裏面の「紀値」もそれに応じて変わり、それだけ種類が増える。また、折二・折三・折五の間には、鐵錢の大きさや重量にそれほど目立った相違がないため、孕み月星や数字の「紀値」が必要になる。特に折五錢の背面には、これまた目新しい一字がアトランダムに加わる。「正伍」「正五」「信伍」「使伍」「權伍」「用伍」「用五」「行伍」「行五」「復伍」「直五」「通五」「折五」「當五」などがそれで、折三錢ではなく「折五錢」ですよという表示に他ならない。この中の、「五」と「伍」の相違、あるいは錢文の直読、旋読その他の要素から、これら鐵錢が、四川三監のどこで鑄造されたか、見当のつく場合もあるが、それとてたいして役には立つ事柄であるまい。

では何故この時期に、四川の鐵錢にこのような変化が生じたのか。それを直接語る史料は、図版の嘉定鐵錢実物以外になく、例によって当時の歴史的状况から推測せねばならない。嘉定に先立つ寧宗の開禧二年（一二〇六）、権力を握った韓侂胄は、無用の対金軍事行動を起こして失敗する。奇しくもテムチンが、モンゴル可汗に推戴されたのと同じ年である。この時、金と接する四川北部の防衛は、代々この地方に勢力を扶植

してきた呉曦に任されていたが、彼は金に寝返り、蜀王として韓侂胄に叛旗を翻した。彼は間もなく部下に殺されたが、韓侂胄自身も処刑され、中央、地方とも大きな混乱が生じる。嘉定と年号の改まった時点（一二〇八）で、四川はなお安定しなかった一方、中央の統制力は格段に弱まってしまった。間もなく、チンギス汗の西夏や金への攻勢が加速されると、四川の物情も次第に浮き足だつてくる。そこで鐵錢に話しを戻すと、利州と邛州の錢監で継続されていた「炬紀」の番号が、両者とも「開禧元寶」で終止符を打ち、それ以後姿を消してしまうことに気付く。それに代り、まるで堰を切ったように、多種多様な大鐵錢が出現し始める。そこでは、もはや中央政府はおろか、四川各路の統制や命令系統の壊滅ともいえる状況が浮き彫りされている。鐵錢の鑄造は、建前と現実のいづれにおいても、各錢監の自由に任され、工匠たちは、自分たちの好みに応じた錢文を創作し、折二、折三、折五の貨幣を鑄造し、裏面に必要事項を加える。この場合三監相互の情報交換などは想定できるが、かつてのように、中央あるいは少なくとも「路」の責任者が、「錢樣」を指定したり、あるいは鑄造品を検閲する体制は跡形もなく消滅していた点は確かであろう。

嘉定十七年（一二二四）寧宗が崩御し、理宗が皇位を継ぐ。韓侂胄の失脚以後、史彌遠が全権を握り、寧宗の嘉定と理宗の宝慶・景定の合計二十五年の間、南宋の政治は彼の思うままであった。その死により、理宗は一息つき、世に「端平更化」と称されるように、開放感が漂ったが、指導的役割を果たす人物はいない。この端平・嘉熙の数年、四川の鐵錢は嘉定とはまた違った様相を見せる。³⁶錢文だけで二十種、ほかの要素を加えるとその倍になる四川鐵錢は、種類は豊富でも、殆ど同じ鐵錢に過ぎない。いくら中央政府との絆が緩んでいるとはいえ、これではあまり

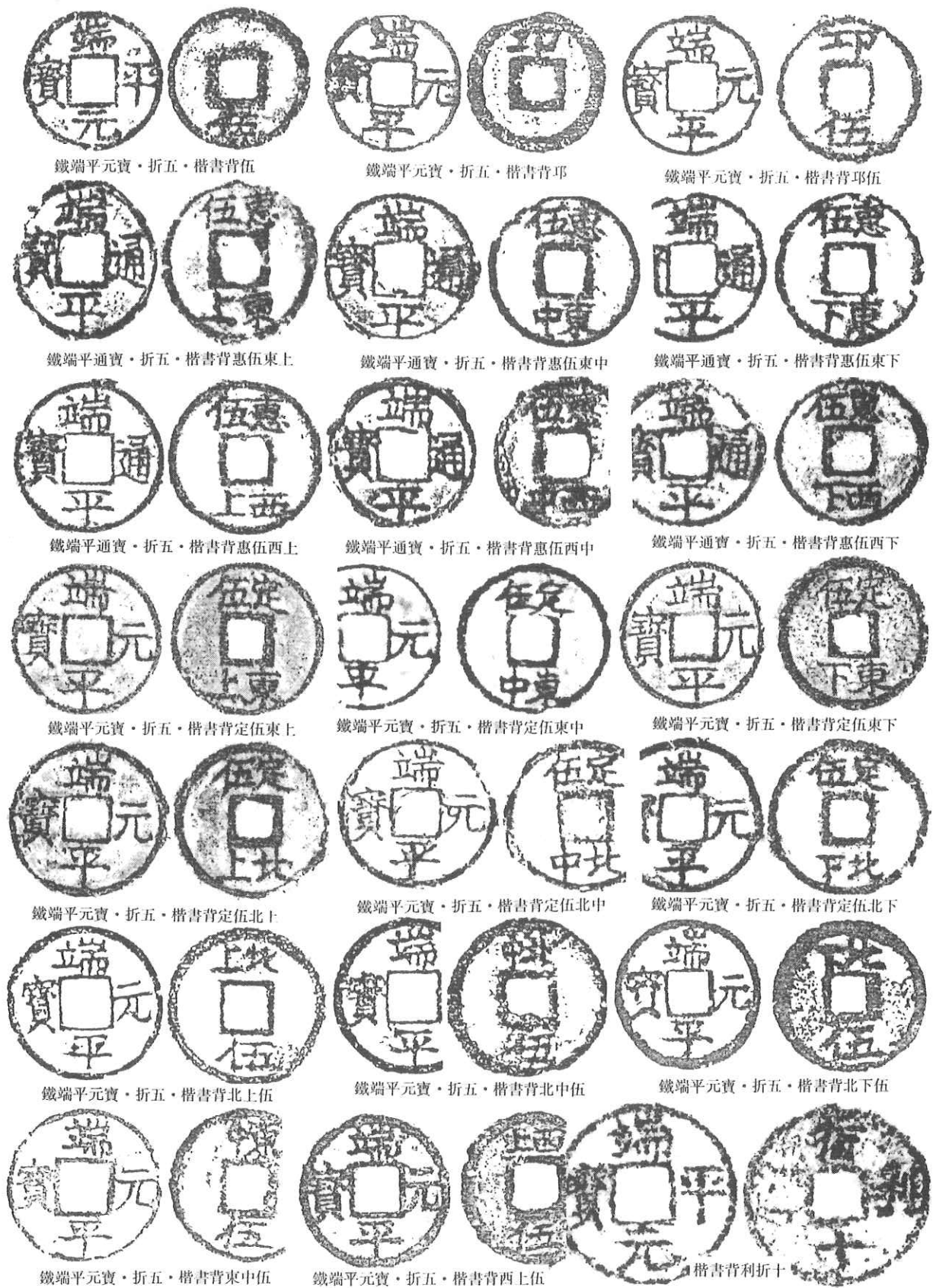


圖20 南宋末・四川錢監の紀地・紀炉鐵錢（一）

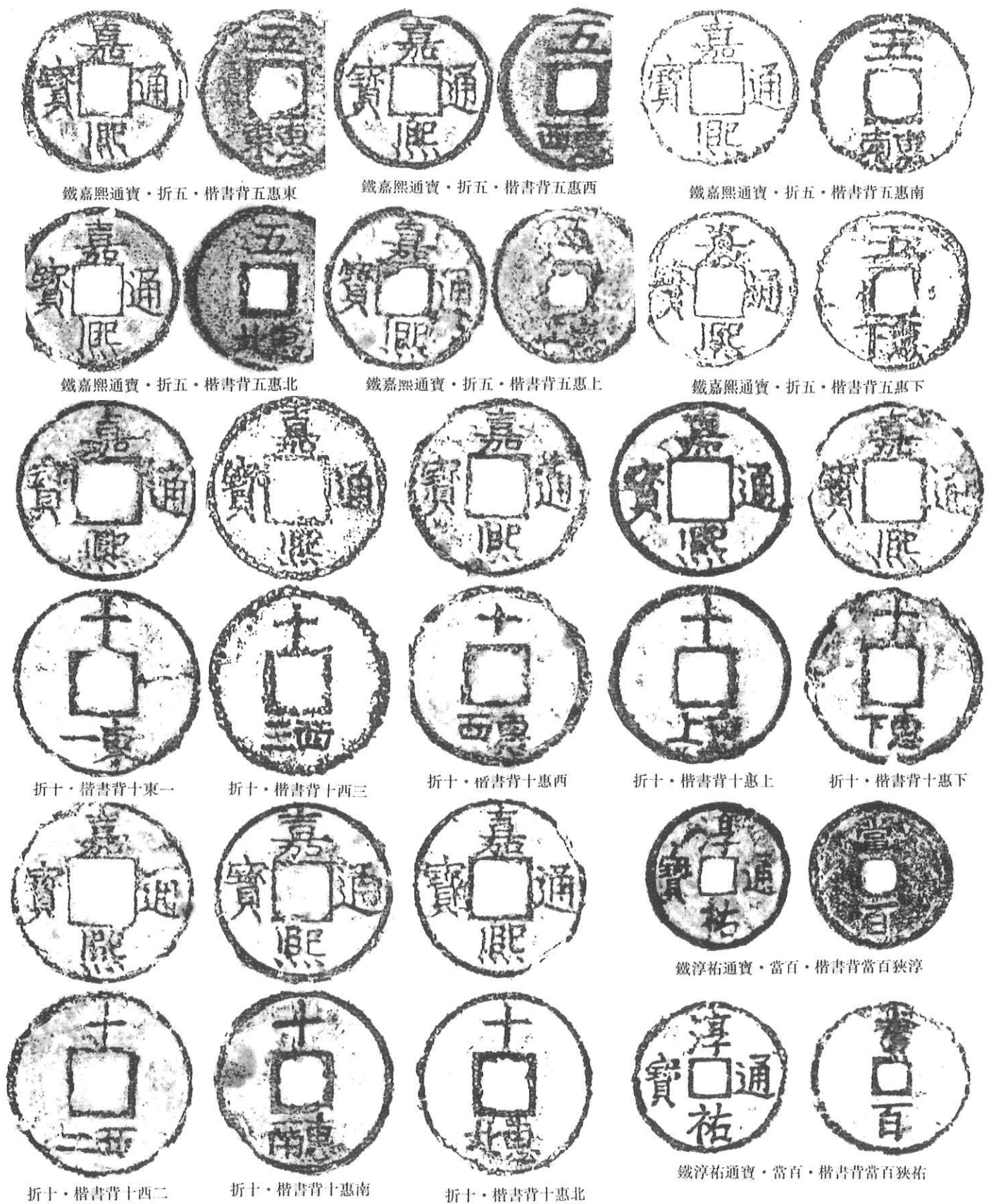


圖21 南宋末・四川錢監の紀地・紀炉鐵錢（二）

にひどく、何とかしろといった声が当然上がるだろう。多分そうした批判を受けて、理宗端平年間に入ると、銭文は「端平元寶」「端平通寶」に収斂され、続く嘉熙年間「嘉熙通寶」に統一される(図20、21)。また「紀値」は折五と折十が主になるから、穿の上下どちらかに「五」「伍」「十」をつける。それ以外に新しい記号として、邛州惠民監の「恵(邛)」、または嘉定府来遠監の「定」の「紀監」名とともに、「東上」「東中」「東下」「西上」「西中」「西下」「北上」「北中」「北下」などの二字が添えられる。「嘉熙通寶」になると、それが、「恵東」「恵西」「恵北」「恵南」あるいは「恵上」「恵下」「東一」「東二」「西一」「西二」「西三」などと変わる。普通には、この記号は各銭監の鑄銭炉の位置を示し、鑄造炉の責任を明記するものと解されているが、何故この時期に、急にそんなことを背面に彫り付けるかという説明はできず、現在のところでは、誰でも頭に浮かべる思いつきの域を出ていない。

四川で雑多な「端平元寶」や「端平通寶」の鑄造が始まった端平元年(一二三四)は、既述のように、オゴタイを指揮官とする蒙古軍により、辛うじて黄河以南で余喘を保っていた「金」が滅ぼされた年である。これにより、江北一帯で使用されていた南宋の鐵錢も、当然その姿を消すことになる。蒙古軍は、南方への進撃の手を緩めず、翌年には、すでに四川の西辺を南下して雲南踏査を開始、端平三年にはオゴタイの次子闊端が、陝西から四川に侵攻し、成都にも蒙古軍が姿を現わす。蒙古朝廷内部の権力争いのため、メンゲ可汗が本格的に南宋攻撃に出る宝祐元年(一二五三)まで、なお十七年近くの歳月があり、江南の南宋社会では些か胸を撫でおろすことができたが、四川はそうはいかなかった。毎年、蒙古軍の鐵騎は四川各地に波状攻撃をかけ、人々をパニックに陥れた。近年、四川各地で窖藏の鐵錢が次々と発見され、そのあらましは「四川

文物』や『考古』、『中国錢幣』などに報告されているが、嘉定、端平、嘉熙などの鐵錢が多く含まれ、この時期に、争って窖藏が行なわれ、それが二度と持ち主の手に戻らなかった状況を窺える。かくて、本格的な蒙古侵攻の十数年以前、賑やかだった南宋四川の鐵錢鑄造劇は実質ではその幕を閉じる次第となる。

むすびにかえて

唐と宋の間に、革命的とも呼べる変革があったことは、日本の中国史学者にはほぼ共通の認識となっている。この小稿で扱った貨幣の分野もその例外ではなかった。ここまで、唐代の貨幣を念頭に置きつつ、主として宋代三百年の貨幣について概観し、その問題点や疑問を列記してきた。その場合筆者は、少し高い位置から宋代貨幣の全貌を俯瞰する姿勢をとった。日本でも中国でも、宋代貨幣に関する文献史料による研究は、それなりの水準にあるといつてよいだろう。しかしたとえば、北宋と南宋を較べると、同じく百五十年の期間ながら、研究の質量にはかなりの差異があることを否定できない。たとえば四川の鐵錢のように、文献史料が少ない分野では、当然ながら未解決の問題が少なくない。他方、早くから大量の「宋錢」が流入しており、最近統々と発現している埋藏錢も加えて、わが国では、その多数の実物を見ることはさほど難事ではない。また中国でも、ここ二十年の近代化に伴う開発により、さまざまなかたちで地下に窖藏されていた「宋錢」が夥しく人々の目に触れるようになった。残念ながら現在の段階では、必ずしも文献と遺物が有機的に統合されているとはいえない。中国では季刊の雑誌『中国錢幣』が中心となり、各地で錢幣関係の月刊誌や通説が発行され、新しい貨幣図録

も陸続と刊行されている。一方日本でも、埋蔵銭の研究は関係者の努力により大きな成果をあげつつある。冒頭に書いたように、そうした時期に黒川古文化研究所で、所蔵の貨幣をじかに手にする幸運に恵まれた筆者は、現時点に於ける日本と中国の諸研究、文献と実物両者を通じた、「宋銭」の総合的俯瞰と、疑問点や問題の提示をまず行なっておくべきだと考えた。そうした知識がないと、いくら宋銭の図録を眺め、事典などの末尾に附載されている統計や地図を眺めても、「宋銭」の性格は、十分には浮かび上がって来ないであろう。その点から言えば、小稿で役に立つのは、あるいは末尾に附した南北両宋の銅銭と鐵銭の時代別一覧表かも知れない(表Ⅱ、Ⅲ)。日本の埋蔵銭報告を通覧していると、「宋銭」のうちの限られた部分しか流入してきていない。宋代史をやっている者は、まずそれが気になる。そうした点もこの表で一目瞭然になる。

本稿題目の「表・裏」の「表」は目で見ることのできる「宋銭」の即物的な問題であるが、「裏」つまりその歴史的解明となると、簡単にはことがすまなくなる。本文内でも言及したように、十一世紀後半、中国史上銅銭の最高鑄造量に達したといっても、その背景に経済的原因による貨幣経済の発達などという安易な用語は使用できない。また、その銅銭鑄造量とて、五十年後には二十分の一以下に低落している。大量の銅銭の海外流出や鑄潰しによる他の銅器への転用が、想像以上に多かったとはいえ、貨幣の鑄造量が、いかに原料の涸渇とはいえ、五十年の間に二十分の一に落ち込み、社会全体に「錢荒」(銅錢欠乏)を現出させながら、その状態であと百数十年も続くというのも、其処だけ見れば不思議な話である。宋代の皇帝独裁政治と官僚体制、それを支える社会経済は、確かに唐代と比較すれば格段に発達し、その一つの柱として「銅銭」の著しい増加と流通があったことは間違いない。しかしそれは、近代西

欧的な「貨幣経済」の発達とはやはり性格を異にしていた。「銅銭」は原則として県以上の「城市」とそのごく近郊だけに使用が限られ、国都開封府などでは城外に銅銭を持ち出すには厳しい制限があった。また、北宋後半から大量に流通した「折二銭」とて、開封での使用は制限され、何よりも「銅銭」と「鐵銭」の使用地域の設定は、貨幣経済はおろか貨幣流通の阻害要因になるはずである。そして何よりも、銅銭の金屬としての価格は安価で、しかも大量には所持できず、高額取引には誰が見ても不適當である。銅銭より重い鐵銭の使用地域だった四川の富商たちが、「交子」(兌換紙幣)を発行し始め、仁宗の天聖初(一〇二三)、それが官営に切り替えられた。額面は一貫から十貫まで十種ほどあり、使用期限(界・一年)が定められていた。南宋の紹興三十年(一一六〇)、江南地方に、戸部発行の「會子」として、装いを新たに紙幣が登場する。額面一貫だが、のち二百、三百、五百文(錢)も作られ、やはり「界」が設定されて、新旧の交換が行なわれるが、詳細はここでは触れない。このほか、貨幣的価値を有する財貨として「銀」と「絹」がある。すでに唐代から、遠隔地の賦税は、銀餅などに替えて長安に送られていたが、宋代に入ると、皇帝の主宰する国家的祭祀のたびに、中央高官を中心として「銀」が賜与される。また三代皇帝真宗の澶淵の盟以後、北の契丹(遼)、次の仁宗からのち西の西夏に、毎年定額の銀を歳幣として贈与することになると、全国から一定の形式の「銀錠」を納入させる制度ができあがる。近年、各地からそうした「銀錠」がかなり多数発見されているが、おおむね五十、二十五、十二・五両で、中央の凹んだ分厚い舟型楕円形をしており、その用途、送付責任者などを刻み、興味深い資料となっている。こうした「銀」は、京師などの「金銀鋪」と呼ばれるギルド商人の手で売り捌かれたであろうが、高額取引に内輪で使われて

も、それが法定貨幣として流通することは原則的にはなく、多くは銀器などに加工されたかと推測される。とりわけ南宋に入ってからのもので、貨幣の「裏」の問題としては、銅銭と紙幣と銀（絹）の三者の絡み合いあるいは噛み合わせが最も重要であるが、その研究はこれからの宿題とするほかない。

上に書いた事柄と次元は違うが、筆者は鑄造技術の面でも気になる「裏」疑問を幾つか抱えている。たとえば、活字母銭で論議的になっている「元豊通寶」以下数種の行書年号銭は、筆者は練達な職人が、柔らかい銅に、硬い金属を使って四文字を彫つたものと想定している。ではこの場合、彫刻に使用した硬い金属とはどんなものか、またその道具はどんな形をし、何と呼ばれていたかは、今となつては皆目見当がつかない。清朝の「雕母」の現存例は多いが、それとてどんな道具で彫られたかに言及する人は殆ど皆無である。二〇〇七年四期の『中国銭幣』に、四川武勝の嘉陵江の水中から、清の雍正・乾隆時代の「坏錠」と名付ける銭幣材料が発見されたとの報告が載っている。重さ五・六グラム、長さ八センチ程度、青銅製でちょうど両端の尖つた三度豆のような形をしている。熟練者がこうした道具を指で巧妙に操り、先端の部分で銅の銭型に文字を彫つてゆく姿を筆者は想像する。これは無論空想にすぎないが、ほかにも技術的にきちんと説明されていないことが多々ある。たとえば、砂土に「錢母」を捺しつけて鑄型を作る時、文字のある表面と輪郭だけの裏面の厚さが同一になっていたかどうかも明確ではない。何故そのような疑問を持つかという点、多数の宋銭をいじっていると、奇妙なことに気付く。表の面の中央の「穿」は、おおむね郭の線に沿って直線的に切り開かれている。誰もがこの「穿」の内側に鑿をあて、裏面も同じ大きさの真四角な穴が開いていると思うはずである。事実、石巻

の鑄銭場絵図では、「穿」に鑿をあてる工程が描かれている。「富本銭」や「和同開珎」の昔から、日本では仕上げの段階で「穿」に鑿をかけ、表裏一体の穴に仕上げることは自明と思われているに相違ない。ところが宋銭のかなり多くは、なるほど表の「穿」は曲りなりに恰好がついているが、裏面の穴は不整の場合がむしろ普通に見られ、鑿を使って表と裏を整形した痕跡など残っていないものばかりである。膨大な鑄銭のノルマを達成するために、「穿」孔の整形工程を省いたことは十分あり得よう。しかし、それなら、たとえば鑿で表の「穿」の四角を打ち抜いたとして、その内側をどのように削り取ったのか。素人が考えれば、表と裏から鑿を入れ、穿孔を一気に開けることは、さして難事とも見えないが、どうして表と裏の穴の形状や大小が違うのか。この問題を含めて、宋銭の多くは、銭文面は比較的丁寧であつても、裏面は鑄型のズレを含めて概して粗雑である。それは現存宋銭の磨耗が、裏面が平滑化し、ツルツルになつているにも拘らず、表面の文字はそれほどではないのは何故かという疑問にも繋がる。後期「和同開珎」に見られるような、裏面の「輪」の深い精妙な浚えなどに、通常の「宋銭」でお目にかかる機会には稀である。こうした点に関して、技術関係の専門家の御教示を仰ぎたいものである。

黒川古文化研究所には、宋銭などの中国銭のほかに、「和同開珎」にはじまる「皇朝十二銭」もある程度の量を収蔵している。宋銭の精査が終り、皇朝銭に手を付け始めると、これまで日本史の学界ではあまり問題にされていなかった、古代貨幣への疑問を、私は持つようになる。こゝとは最近大きな成果を挙げている「中世埋蔵銭」の分野でも同様である。簡単にいうと、これまでの日本における、古代・中世の貨幣研究は、専

ら日本史の枠内だけで取り上げ、その解明を追求してきた。それはそれで大切なことではあるが、そのほかに、古代日本の貨幣の源流をなす、中国の貨幣、とりわけ「開通元寶」以後の唐と宋のそれとの関連性をなおざりにしてはいけないと、私は強く感じるようになった。つまりは、日本古代の貨幣研究の根本的部分において、唐宋の貨幣とそのあり方の比較もしくは影響という視角が、是非とも必要ではないかと言いたいのである。その具体的な内容について、幾つか準備を行ないつつあり、また機会を見つけてご批判を受けたいと考えている。

註

(1) 『黒川古文化研究所収蔵品目録』、第二二日本の貨幣と第二三の中国の貨幣が合冊になっている(一九九五、黒川古文化研究所)。

(2) 昭和に入った日本での宋代貨幣の研究は、加藤繁博士により開拓され、日野開三郎、中嶋敏氏らにより継承された。就中、加藤博士の東京大学の講義原稿が、『中国貨幣史研究』として刊行され、その半分が宋代貨幣制度で占められていてありがたい(一九九一、東洋文庫)。また日野氏の数多くの論考は、『東洋史学論集』の第六、七巻に(一九八三、三一書房)、中嶋氏のそれは『東洋史学論集』(一九八八、汲古書院)に纏められており、後学を裨益すること大である。このほか、中嶋氏主編の『宋史食貨志譯註』第四篇の「錢幣」には、原史料の訓読とともに、詳細な註が付されていて便利である(二〇〇二、東洋文庫)。なお中国で作られた、汪聖鐸編『兩宋貨幣史料匯編』(二〇〇四、中華書局)は、手っ取り早く宋代の貨幣文献史料に当たりたい時に重宝である。

(3) この錢文を「開元通寶」と読むか、「開通元寶」と読むかは議論のあるところで、宋代にできた『新唐書』の食貨志では、どちらでもよいような書き方をしている。事実としては、唐代すでに地方的な少数の貨幣に過ぎないが、「建中通寶」の名も存在し、「元寶」と「通寶」は並立していたようである。五代から宋へとこの流れは変わらず、宋代には同じ年号錢で両者があることも稀ではない。しかし、つい先頃物故された中国錢幣界の元老唐石父氏は、錢幣文化の継承という観点から、どうしても「開通元寶」でなければならぬと主張される(『唐代錢幣文化的継承』『陝西金融』増刊錢幣專集九、一九八八)。なお唐氏の説は「武德錢文の研究」として『方泉処』(創刊準備号、一九九二)に日本語で詳しく述べられている。現在の中国では、大勢としては、「開元通寶」が一般的のようだが(陳鐵卿「開元錢文不応読開通」『文物參考資料』一九五七、五期)、些か唐先生に敬意を表して、本稿では「開通元寶」を個人的感情で優先させておく。また「會昌開元」については第三章第二節にも言及がある。

(4) 五代中原王朝の貨幣は、前三朝、特に後梁のそれは材料が少なく、詳細は分からない。後唐の「天成元寶」と後晋の「天福元寶」を中国の図録から引用するが、天福錢などは左回りが混じるといふ前例のない状況である。これら貨幣は鑄造量として少なく、殆ど日本には渡来しなかったであろう。後漢、後周の二王朝になると、新しい息吹が加わったためか、「開通

元寶」を模倣した良好な銅銭が出現し、その流れが「宋通元寶」に引き継がれる。なお、宮崎市定『五代宋初の通貨問題』（一九四三）、星野書店、『宮崎市定全集九』所収、一九九二、岩波書店）は、五代の通貨問題よりも、むしろ宋代官僚体制と通貨問題を総合的に考察するための、重要なヒントが随所に見られる。

(5) 五代中原王朝以外に、四川と江南を両雄として合計十国の地方政権が順を追って分立した。その中では湖南の「楚」、杭州の「呉越」、福建の「閩」、廣南の「南漢」などが独自の貨幣を铸造したが、「楚」を除くと、わが国の皇朝十二銭さながらに、小型で粗悪な鉛銭などが多く、ここでは四川の王氏「前蜀」と江蘇・安徽一带を占めた「南唐」に限定する。特に唐代の文化を継承し、それを宋代に伝える役割を果たした「南唐」が重要である。図3でも、「唐」を表示する銭文とともに、隸書や篆書で文字を彫っている点、特に目を惹く。

(6) これも細部にわたると異論が出よう。小平銭の「聖宋元寶」は北宋末なのに、鐵折五銭の「聖宋重寶」は南宋後半、図の「大宋通寶」のほかに当十の大型銅銭もあり、こちらは旋読でなく対読になっているから別の一種に数えるべきだと言われそうである。寧宗と理宗時代の「元」「寶」の重複銭はいずれも鐵銭で、中央の常識も漢陽や四川では通用しなかったのかも知れない。

(7) 図5と図6は国初から七代皇帝哲宗までの約百四十年間の宋銭を列べる。この時期の年号は全部で二十七あるが、太祖の建隆・乾徳・開寶、太宗の雍熙・端拱、真宗の乾興、仁宗の寶元・皇祐の八年号の年号銭はなく、仁宗康定は少数の鐵銭だけがある。仁宗の比較的長い前半期には、別に「皇宋通寶」が大量に铸造され、わが国の中世埋藏銭にもそれが群を抜いて多い。仁宗即位の天聖以降、いわゆる「對銭」铸造が開始され、図でも九例ほど載せてある。このほか、北宋のこの時期は、「元寶」は旋読、「通寶」は対読が通例だったことがわかるが、元豊以後暫く「元寶」が使えなくなると、行書体の筆勢とも関係して、旋読の「通寶」が続く。

(8) 鐵銭の問題については、上記日野論集・第六卷に「銅鐵銭問題の研究」と名付ける部分が設けられ、詳細に論じる。中国においては、概説書や事典類には各時期の鐵銭使用区域の地図が掲載されているほか、「中国錢幣」などには十指を超える鐵銭地区に関しての論文が見える。

(9) さし当たっては図15を参照。より詳しくは第三章第二節で説明する。

(10) 『石卷鑄銭場絵図』と『鑄貨図録』（毛利コレクション）は幾つかの複製本があり、容易に目にできるが、筆者は『江戸科学古典叢書』三六（一九八二、恒和出版）を使用している。ちなみに佐野英山の『鑄貨図録』は個々の職人や作業をならべ、仕事の内容を表記しており、大正十二年の大阪東澗智海の複製本などは綺麗な色刷りである。それに対し『鑄銭場絵図』は鑄銭の実際が段階的かつ総合的に描かれており、極めて興味深くかつ有用である。

(11) 梅原郁「宋代の内蔵と左藏―君主独裁制の財庫―」（『東方学報』京都第四八冊、一九七二）。

(12) 清朝を中心にした話ではあるが、参考になるのでその幾つかを挙げておきたい。錢卓「清朝母銭」（『中国錢幣』一九九〇―）同「試談雕母、母銭的鑑別」（『中国錢幣』一九九三―）、黄思賢「雕母的討論」（『中国錢幣』一九九八―）、齊宗佑「对咸豐部頒樣錢的認識」（『中国錢幣』二〇〇五―）。

(13) 図7は黒川古文化研究所が所蔵する萬治二年（一六五九）铸造の通称「長崎貿易銭」であり、実際には宋代とは無縁な「元豊通寶」なのだが、「雕母」一点と「母銭」（種銭）・「流通銭」各一点の差異がわかるので、参考のために掲げておく。

(14) 王仕国氏に「四川廣元兌現木質宋年号銭」なる簡単な報告（『中国錢幣』二〇〇二―）があり、ついで戴志強氏の「南宋木質雕母銭的發現和研究」（『中国錢幣』二〇〇三―）の長い論考が出る。

(15) 夾錫銭は鐵に錫を混ぜた貨幣で、北宋末崇寧年間に出現する。その詳細は、中嶋敏氏が考察を加えられているほか（前掲註『中嶋論集』）、中国では、『陝西金融』錢幣專輯（六）、一九八七に数点の報告がある。張湘生「西安南大街出土的夾錫銭」、黨順民「北宋鐵夾錫并非劣銭」、吳琪榮「北宋夾錫銭為害很大」など。なお総論として、戴志強ほか「夾錫銭問題再研究」（『中国錢幣』一九九九―）を参照。

(16) 次の図10でも明らかのように、神宗と哲宗の二代、長安を中心とした陝西南部で、折二の行書と篆書の大形鐵銭が大量に流布する。図9では、比較的關係が近いと想定できる、鐵母（銅雕母）と流通銭を挙げてみた。

(17) 王景洋ほか「論鐵範銅試鑄的必要性」（『陝西金融』二〇〇三―十二、張光明「関于鐵母、鐵範銅、銅範鐵」（『陝西金融』一九九七―九）。

(18) 関漢亨「清代雕母銭取藏小記」（『中国錢幣』一九九八―四）ほか、前掲

註(12)の諸論文。

- (19) 宋代鑄錢監の考察は、日本では前記註(2)の日野氏のものの基本になっているが、最近の中国では時代と地域、銅錢と鐵錢を区分し、部分的には実地調査も加えて木目細かく研究が行なわれている。ここでは代表的な数点を挙げておこう。劉森「北宋銅錢監述略」(『中国錢幣』一九八八—三)、同「南宋銅錢監述略」(『中国錢幣』一九九七—一)、汪聖鐸「陝西鑄錢監考」(『中国錢幣』一九九八—一)、邱思達「宋代的鐵錢監和鐵錢」(『中国錢幣』一九八八—二)、許懷林「饒州永平監」(『宋朝的鑄錢中心』(『中国錢幣』一九八八—三)など。また『中国錢幣大辭典』の「宋遼金夏編」の末尾附録には、「宋代鑄錢監一覽表」がつけられているから、コピーにして手で常用すれば便利である。

(20) 図5の「淳化元寶」と「至道元寶」の三体錢を参照。

- (21) 最近の中国での「宋錢」の発現記録は、劉玉娥・許詔立「錢幣考古文献叙録」(二〇〇五、中州古籍出版社)に網羅されているが、実際には各種雑誌や報告類を集めただけのものである。そこでは「天聖元寶」何枚とか、「元豐通寶」行・篆幾枚とか、窖藏錢何斤・何万枚と書いてあっても、各字体が何枚ずつかなどという、こちらの知りたいことは殆ど記録していない。もとの報告や雑誌にはあるかと、かすかな希望を持って調べても徒労ばかりである。日本にいと、原載のローカルな雑誌や報告類が手に入り難く、インターネットでも現実にはなかなかうまく出てこない。漸く探しだせた中国の二例は、「萊州市出土大量窖藏錢幣」(『四川文物』一九九二—二)、と「遼中出土的金代窖藏錢」(『中国錢幣』二〇〇五—三)である。多数の貴重な埋藏錢資料を公表して下さっている永井久美男氏の場合も、書体の違いによる数量は省いておられる。そこで永井氏にお願いして、三例のご教示を受けた。厚くお礼申し上げる次第である。また最近手にした『山陰の出土錢貨』(二〇〇四、出土錢貨研究会中国ブロック大会事務局)にも、三例の記載があったので使わせて頂いた。これらの数字を眺めていると、そこから興味深い問題が引き出せるように私には思えてくる。

(22) 日野開三郎「北宋時代における銅鐵錢の需給について」(前掲註(2)の『日野論集』所収)。

(23) 中嶋敏「北宋時代に於ける新鑄錢の上供と財庫」(『社会経済史学』一一二—三、一九四二、前掲註(2)の『中嶋論集』所収)。

(24) 衣川強「宋代官僚社会研究」(二〇〇六、汲古書院)の第六章「官僚の

俸給」。

- (25) 図6と10を参照。太宗の御書に行書があったが、それから九十年を経た神宗親政の「元豊」以後、哲宗の「元祐」「紹聖」と「元符」、徽宗の「聖宋」と行書体の貨幣が連続して鑄造される。その中には「書法芸術」の一つに加えられる品も混じっている。その名残は以後の錢文にも稀に現れるが、おおむねの行書の錢文は、この時期に限定して大過ない。

(26) 図11の「崇寧通寶」と「大觀通寶」が、風流天子あるいは亡国の皇帝と悪口を言われる、八代皇帝徽宗(十二世紀初頭)の、得意とした「瘦金体」と呼ばれる御書の錢文である。崇寧・大觀ともにやや異体字もあるが、銅錢・鐵錢とも曲りに御書「瘦金体」を手本にしている。これらのうち「大觀通寶」は、銅錢が小平錢と折二・折三・折五・折十、鐵錢に小平錢・折二の錢別があるが、日本には大觀の小平錢しか流入しておらず、埋藏錢の数量も多くはない。恐らく崇寧・大觀の折二錢以上や鐵錢は、後世蒐集家の購入品以外は殆ど入ってこなかったであろう。その事もまた一つの研究課題にはなる。なお、南宋の「紹興元寶」折二錢や「慶元通寶」折五錢、「大宋通寶」當十錢などに、「瘦金体」模倣の名残が看取される。

(27) 図11最下段の楷書鐵母「宣和通寶」背面の「陝」字はその一例である。

(28) 南宋貨幣錢文の概観としては、屠燕治「南宋錢樣考」(『中国錢幣』二〇〇二—一)が簡便である。ここでは、図12以下を御覧頂きたい。

(29) なお「會昌開元」は図1を参考されたい。

(30) 図14に南宋の私鑄錢を数個挙げる。右側の本物と比較されたい。南宋の私鑄錢は、文献にある「沙毛錢」のような悪錢は別として、通例は、背面に年号がなく、原材料の節約のためやや小型で軽い、表面の写真や拓本だけからは本物と大差なく、この程度の違いは本物でも普通に見られるうえ、混ぜて使っても殆ど実害はなかったろう。筆者は私鑄錢の性格やあり方が、中国と日本で根本的に違うと想像している。

(31) 図15になると、これだけで雑然とした印象は拭えず、おおむねの貨幣は銅・鐵、小平・折二を問わず、品位あると言える代物でなくなる。おまけに、乾道と淳熙の貨幣には次のような不統一も見られる。「乾道元寶」の鐵小平錢に初めて紀年・紀監両者が出現するが、その紀年では「柒」「捌」の字が使用される。次の「淳熙元寶」になると、鐵錢は小平・折二とも紀年はやはり「柒」「捌」から始まり、小平錢では「玖」「拾」以後、折二では「十一」以降普通の数字に代わってしまう。つまり淳熙九年以降は、紀

年に代用漢字が使用されなくなつてゆく。乾道の紀年が七年に始まるのはよいとして、続く淳熙も七年まで紀年なしに「淳熙元寶」が鑄造され、突然「桀」の紀年が出現する理由がわからない。ちなみにそれ以後は、銅錢では寧宗嘉定の十五年から三年が見えぬ以外は、度宗の咸淳八年まで、九十年以上に一応は紀年の数字（元年は「元」）が刻まれている。この図でも容易にお分かり頂けるように、鐵錢の紀年と紀監の文字の位置は行き当たりばったりで、同一錢監でも整合性はみられない。なおここで密接に係する江北の鐵錢監については、陳浩「江北鐵錢若干問題探索」（『中国錢幣』二〇〇二—）に詳細な説明がある。

(32) 劉恩甫、田步迎ら「江蘇高郵出土南宋鐵錢的初步清理報告」（『中国錢幣』一九八七—）、「聶廣鴻ら「高郵出土南宋鐵錢補録」（『中国錢幣』一九八八—）、ほか単行の報告書も刊行されている。

(33) 図16は光宗紹熙から寧宗開禧まで、最長で十七年間、恐らく開炉の年次に従つて大部分は下部、少数は穿の左右に「四六」から「六二」までの数字を入れる。同じ「利元」に「五七」と「五八」、同じ「利」の「六十」に「嘉泰」と「開禧」があるなど、わからない部分が残る。なお、図16以下の四川鐵錢の図は、掲載の都合で2/3程度に縮小してあることを申し添える。

(34) 図17は前図とほぼ同時期の成都路の鐵錢番号である。こちらは「三四」から「四四」と番号が若く、利州との関連はないように見える。開禧から嘉定の十六年をとばして、理宗の聖宋元寶に至る番号が「四四」から「四七」というのも十分には納得できない。

(35) 図18と19の二つは、十三世紀初、寧宗の嘉定年間の四川の鐵大錢を網羅する。とりわけ嘉定の年号をつけた四川の鐵錢には、現在のところ二十種の名称が知られており、相互の関連や脈絡らしきものは感じられない。いったい宋代四川の鐵錢には、通常は蒐集家とてさして関心を示さず、鐵という性質も加わり、鑄造量と比べ残存量は著しく少ない。ところが、北からモンゴル族の圧力が強まると、俄然各地で鐵錢の埋藏隠匿が盛行する。新中国の經濟發展による各種開發に伴い、それらが次々と纏まって姿を現わす事態を生む。以下図21までの四川鐵錢は、殆どが最近新しく発見されたもので、そうした埋藏が行なわれなかった十二世紀以前の四川鐵錢は、依然として陽の目を見ることが少ない。このような南宋四川鐵錢のさまざまな背文については、陳鴻志「南宋鐵錢背文探索」（『中国錢幣』一九九八

—）が網羅的である。

(36) 図20と21について。理宗の端平から嘉熙という時代は、四川は蒙古の脅威にさらされて浮き足だつていたに違いない。物価高騰に諦め気分も加わり、より大きな折五錢が鑄造される。その特長は御覽の通り、東上とか北中とかいう二字である。炉の位置といわれるが、そんなものを入れて何の役に立ったのだろうか。

(37) 本文で繰り返したように、筆者は本稿執筆の基底に、三百年間に亘り鑄造された「宋錢」の総合的な俯瞰図作成を置いている。表ⅡとⅢはそのための「稿本」と言える。この一覽表は、主として中華書局の『中國錢幣大辭典』（二〇〇五）の、北宋と南宋篇に依拠している。但しこの書物とて多人数による合作であり、統一のとれていない部分もまま見られる。周知のように、宋錢の図録は、中国・日本とも、古來著名なものだけで十指にあまる。そこに記載されたものと『大辭典』が必ずしも一致するわけではない。しかし今回は、とりあえず『大辭典』を中心に、ほかの図録でその闕を最小限補うにとどめた。言い訳がましいが、この表には不注意による誤り以外に、不備なところが少なくない。たとえば全体の項目やその位置が記人事項の分量により、異なつていたりする。「稿本」と名付ける所以であり、今後時間をかけてより精度の高いものにしてゆく所存である。一覽圖の項目につき、若干注記しておきたい。左端の皇帝の部分、年号の下の数字は、その年号の継続年数である。「方向」は錢文が縦・横に読む「直讀（対讀）」か左旋回の「旋讀」かの区別であり、同じ錢文に両者がある時は「直旋」となっている。字体は『大辭典』に拠るが、楷書と隸書の区別は微妙であり、この表が正確とは言いがたい。右端の三項目は『大辭典』掲載の、同一錢文の版別区分と掲載拓本数をその頁数とともに挙げる。個別時代錢がどれ位鑄造され、現存しているかの簡単な目安にもなるだろう。

表Ⅱ 北宋銅錢・鐵錢一覽(稿) [材質が無印は銅錢]

皇帝	錢文	方向		材質	種類	字 体	長 cm	重 g
太祖	宋元通寶	(直)	通寶		小平	八分隸體	2.32-81	2.9 - 5.4
16					類折二	隸書		
				鐵錢	小平	隸書	2.3 - 5.2	3.2 - 4.5
太宗	太平通寶	直	通寶		小平	八分隸體	2.31- 6	2.3 - 5.2
8				鐵錢	小平	八分隸體	2.32- 6	3.2 - 5.2
				鐵錢	大鐵錢	隸	4.3	30
5	淳化元寶	旋	元寶		小平	楷・行・草 太宗御書	2.31-54	2.3 - 5.7
3	至道元寶	旋	元寶		小平	楷・行・草 太宗御書	2.43-52	3.4 - 4.8
				鐵錢	小平	行		
真宗	咸平元寶	旋	元寶		小平	楷	2.14- 6	2.2 - 5.8
				鐵錢	大鐵錢	楷	3.54	14
4	景德元寶	旋	元寶		小平	楷	2.42-63	3.2 - 5.2
				鐵錢	折十	楷	3.57	14.3
9	祥符元寶	旋	元寶		小平	楷	2.3 -64	2.5 - 5.9
				鐵錢	類折二	楷	2.8 - 9	6.4 - 9.8
				鐵錢	折十	楷	3.32-52	13 -15.5
	祥符通寶	旋	通寶		小平	楷	2.32-57	2.4 - 4.7
				鐵錢	小平	楷		
				鐵錢	類折二	楷	2.9	6.5
				鐵錢	大鐵錢	楷	3.5	
5	天禧通寶	旋	通寶		小平	楷	2.34-71	2.3 - 5.2
				鐵錢	類折二	楷	2.8 - 9	7.7 - 9
仁宗	天聖元寶	旋	元寶		小平	楷・篆	2.33- 7	2.7 - 5.4
9					折二	楷・篆		
				鐵錢	小平錢	楷・篆		
				鐵錢	類折二	楷・隸・篆	2.64-85	4.9 - 8.3
2	明道元寶	旋	元寶		小平	楷・篆	2.5 -61	3.3 - 5.2
4	景祐元寶	旋	元寶		小平	楷・篆	2.33-58	3.0 - 4.5
				鐵錢	小平	楷		
				鐵錢	類折二	楷	2.65-84	5.1 - 8
2	皇宋通寶	直	通寶		小平	楷・篆・隸	2.27- 6	2.0 - 5.9
	(寶元)				折二	楷・篆		
				鐵錢	小平	楷・篆	2.28-82	3.5 -84
				鐵錢	折二	楷・篆		
1	康定元寶	旋	元寶	鐵錢	小平	隸	2.34	5.6
8	慶曆重寶	直	重寶		小平	楷		
		旋直			折十	楷	2.8 - 3.2	5.7 - 8.9
		旋		鐵錢	折十	楷	3.32- 5	11.8 -15
2	至和元寶	旋	元寶		小平	楷・篆	2.33-49	2.7 - 4.8
	至和通寶	直	通寶		小平	楷・篆	2.42-52	3 - 4.2
				鐵錢	小平	篆		
	至和重寶	旋直	重寶		小平	楷		
					折二	楷	2.9 - 3.5	9 -14.8
				鐵錢	折三	楷	3.38- 5	12.7 -14

背 面	鐵 母	對 錢	備 考	頁	版別	図様	分 布
月 星各種	○		版別 字体変化多し	7	33	32	各地
			詳細不明	19	1		
				20	6	14	四川
月 星各種	○			22	18	34	陝西
				28	4	8	四川
月			建州鑄造? 類折十	29	1	1	福建
星	○			30	25	33	各地
星			版別各種	37	9	25	陝西
			大辭典ナシ				
星(稀)				42	13	17	陝西
			川峡鑄造 銅鐵比1:9	48	3	3	四川
				46	10	15	
	○		鐵大錢				
月 星	○広穿			49	22	43	
	○			59	3	6	
				50	2	4	四川 甘
			判別各種 真宗御書?	57	8	13	
			大辭典ナシ				
			大辭典ナシ				
			大辭典ナシ				
				61	16	34	各地
				67	2	3	四川 甘
		楷・篆	天聖以下三錢 避諱で通寶なし	68	15	32	各地
		開始	大辭典ナシ 要考				
			大辭典ナシ				
	○			74	6	16	四川 陝
月		楷・篆		76	11	22	各地
		楷・篆		81	9	20	各地
			大辭典ナシ				
				84	4	5	四川 陝
月	○	楷・篆	錢文真・隸混用	85	101	161	各地
			九疊篆三種あり稀				
				115	10	27	四 陝 山西
			大辭典ナシ				
			極めて稀	120	1	2	山西
			小平錢でも「重宝」				
	○		一当三 要考	121	7	12	
	○			123	4	5	陝西 甘
	○	楷・篆		124	17	22	各地
		楷・篆		129	6	9	各地
			大辭典ナシ				
				131	1		
號 坊 紀地の始まり	○			131	7	8	
坊 河 同	○			133	9	24	

皇帝	錢文	方向	字	材質	種類	字 體	長 cm	重 g
8	嘉祐元寶	旋	元寶		小平	楷·篆	2.27-53	2.5 - 4.7
	嘉祐通寶	直	通寶		小平	楷·篆	2.33-58	2.8 - 5
英宗	治平元寶	旋	元寶		小平	楷·篆	2.22-5	2.1 - 5
4	治平通寶	直	通寶		小平	楷·篆	2.25-51	2.0 - 5.2
				鐵錢	小平	楷·篆		
神宗	熙寧元寶	旋	元寶		小平	楷·隸·篆	2.31-2.7	
10					折二			7
				鐵錢	小平	楷	2.4 -58	3.9 - 7.1
				鐵錢	折二	楷		7
	熙寧通寶	旋	通寶		折二	楷	3.25-49	14 -17.5
				鐵錢	小平	楷	2.5	3.6
	熙寧重寶	旋	重寶		折二	楷·篆	2.7 - 3.2	5.4 -10.5
					折三	真·篆		
8	元豐通寶	旋	通寶		小平	篆·行·隸	2.3 -63	2.5 - 7.3
					折二	篆·行	2.71-3.5	4.2 -15
				鐵錢	小平	篆·行	2.38-69	5.4 - 8
				鐵錢	折二	篆·行	2.85-3.5	4.2 -16
哲宗	元祐通寶	旋	通寶		小平	篆·行	2.32-2.5	2.8 - 5.9
8					折二	篆·行	2.76-38	5.1 -16
				鐵錢	小平	篆·行	2.15-75	2.31-10
				鐵錢	折二	篆·行	3.15-5	11 -15.7
4	紹聖元寶	旋	元寶		小平	篆·行·隸(稀)	2.23-53	2.2 - 5
					折二	篆·行	2.87-3.4	5.2 -15.7
				鐵錢	小平	篆·行·隸	2.46-7	5.1 - 8.1
				鐵錢	折二	篆·行	3.2 -48	11.8 -14
	紹聖通寶	直	通寶		小平	楷	2.3 -62	3.2 - 5.4
				鐵錢	小平	楷	2.38-57	3.8 - 6.3
		旋		鐵錢	小平	楷	2.38	5.9
3	元符通寶	旋	通寶		小平	篆·隸·行·楷(極稀)	2.31-75	2.7 - 5.2
					折二	篆·行	2.79-3.4	4.1 -14.5
		旋直		鐵錢	小平	篆·行·楷·隸	2.42-6	2.9 - 8.6
				鐵錢	折二	篆·行	3.2 - 5	10.8 -15
	元符重寶	旋	重寶		折二	隸		
徽宗	聖宋元寶	旋	元寶		小平	篆·行·楷·隸	2.32-74	2.8 - 7.0
1	(建中靖國)				折二	篆·行	2.9 - 3.5	5.5 -13.8
				鐵錢	小平	篆·行·楷·隸	2.01-61	3.7 - 7.8
				鐵錢	折二	篆·行·隸	3 - 3.5	7 -15.6
				鐵錢	折三	隸		
	(建國通寶)	直	通寶		小平	隸		
5	崇寧通寶	旋	通寶		小平	瘦金體 徽宗御書	2.42-52	3.5 - 4.5
					折十	瘦金體 徽宗御書	3.4 -61	10.2 -16
				鐵錢	折二	瘦金體 徽宗御書	3.13-6	7.7 -12.3
	崇寧重寶	直	重寶		折十	隸	3.2 - 7	
				鐵錢	折二	隸	2.6 - 3.3	9.2 -10.5
	崇寧元寶	旋	元寶		小平	楷	2.38	4.2

背 面	鐵 母	對 錢	備 考	頁	版別	図様	分 布
		楷・篆		138	16	29	各地
		楷・篆		143	13	27	各地
				148	39	68	各地
				159	10	16	
			大辭典ナシ				
背衛字 月		楷・篆	各書体字変多し	162	66	104	各地
	○		極稀	181	1	1	
				202	2	5	四川
			疑問あり	182	1	1	
月	○		鐵母のみ	182	4	4	陝西 甘
				203	3	3	四川
月 星	○		重宝でも小型折二錢あり	183	59	93	陝西
	○						
月	○	行・篆	隸書に俗傳東坡元寶あり	208	259	406	各地
月 星 銅?	○	行・篆		285	87	134	
				314	12	15	四川
星 月 三星 銅?	○			317	38	80	陝西
背陝字(稀) 月 星		行・篆		332	119	200	各地
	○	行・篆		368	18	28	
月 星				374	16	24	
	○			379	47	111	
星 月		行・篆		399	52	90	
	○	行・篆		416	4	9	
月				419	16	18	
				423	23	55	
				418	3	3	
汾 上			四川は背字なし	419	7	9	
月				435	1	1	四川
		行・篆		453	51	83	各地
	○	行・篆		451	7	11	
上			四川は背字なし	454	24	13	
				462	22	41	山西
	様錢?		珍稀				
		行・篆		470	75	116	
月	○	行・篆		493	9	10	
汾 上			四川は背字なし	497	34	50	陝 山西
				507	22	25	陝西 甘
孕月星二			大辭典ナシ				
			古錢譜のみに見える 詳細疑問				
			稀に真(行)あり	513	3	4	
	○		大小あり	514	72	184	
				589	14	27	
背十(少) 月 星			大小あり	547	82	243	
	○		夾錫錢あり	594	7	19	
				513	1	1	

皇帝	錢文	方向	字	材質	種類	字 體	長 cm	重 g
					折二	隸	2.68-3.3	8.7-10.5
				鐵錢	折二	隸		
4	大觀通寶	直	通寶		小平	瘦金體 御書	2.42-69	2.9-4.8
		旋			小平	楷		
		直			折二	瘦金體 御書	2.93-3.3	7.9-13.5
					折三	瘦金體 御署	3.55	11.1
					折五	瘦金體 御書	3.75	10.8
					折十	瘦金體 御書	4.47	17.7
					巨大錢	瘦金體 御書		
				鐵錢	小平	瘦金體 御書	2.43-62	4.3-5.2
				鐵錢	折二	瘦金體 御書	2.9-3.3	6.3-14.2
7	政和通寶	直	通寶		小平	篆·隸	2.35-68	2.7-4.8
					折二	篆·隸	2.7-3.4	4.5-13.2
				鐵錢	小平	篆·隸	2.2-6	3-6.5
				鐵錢	折二	篆·隸	2.9-3.4	6.6-14.6
	政和重寶	直	重寶		折二	楷	3.2	11
					大銅錢	楷·隸		
				鐵錢	折二	楷·隸	3.06-57	7.3-12.8
1	重和通寶	直	通寶		小平	篆·隸	2.55	4
7	宣和元寶	旋	元寶		小平	篆·隸	2.38-59	3.1-4.6
	宣和通寶	直	通寶		小平	篆·隸·楷(瘦金)	2.28-62	2.3-5.5
					折二	篆·隸	2.74-3.3	4.2-9.7
				鐵錢	小平	篆·隸·楷(瘦金)	3.35-83	7.2-8.8
				鐵錢	折二	篆·楷	2.8-3.1	7.2-8.8
欽宗	靖康通寶	直	通寶		小平	篆·隸·楷	2.34-58	2.5-4.6
2					折二	篆·楷	2.95-3.0	6-7.9
				鐵錢	小平	楷·隸	2.24	5.8
	靖康元寶	旋	元寶		小平	篆·隸		3.2-8
					折二	篆·隸	2.8-3.08	6.9-7.4

背 面	鐵 母	對 錢	備 考	頁	版別	図様	分 布
				589	1	1	
			大辞典ナシ				
	○		稀に行書あり 俗に米書大観 最近発見・珍	597	31	41	
	○			605	12	13	
				608	2	4	陝西
				609	1	1	
十九星				610	5	10	
			官炉様銭				
				612	3	6	
				616	44	88	
		隸・篆	政に異体字あり	630	95	154	
	○			658	26	42	
				666	12	19	
				670	107	217	
	○			666	1	1	
			陝西で対銭出土という				
				711	6	13	
		隸・篆		713	1	2	
		隸・篆		714	12	17	
瘦金の鐵母に背陝	○	隸・篆		718	107	177	
		隸・篆		750	45	74	
陝				765	28	51	
				775	11	15	
				780	9	10	
		楷・篆		782	4	5	
	○			483	2	2	
		隸・篆		779	1	2	
				779	2	3	

表Ⅲ 南宋銅錢・鐵錢一覽(稿)〔材質が無印は銅錢〕

皇帝	錢文	方向		材質	種類・字体	長 cm	重 g	錢母	對錢
高宗	建炎通寶	直	通寶		小平 篆・隸	2.38-56	3.9	○	篆隸
	建炎				折二 篆・楷	2.55-3.1	2.2-8.9		楷篆
4					折三 篆・真	3.14-26	6.2-8.4		楷篆
				鐵錢	小平 篆・隸	1.98-2.28	4.2-7	○	隸篆
	建炎元寶	旋	元寶		小平 隸・篆	2.23-2.35	3.9		楷篆
					折二 楷・篆	2.6			
	建炎重寶	直	重寶		折十 篆	3.25-46	7-9.2		
紹興	紹興通寶	直	通寶		小平 楷	2.29-51	2.5-4.4		
32					折二 楷	2.8-3.14	3.8-8.4	○	
					折三 楷	3.2-3.23	7-8.8	○	
					折五 楷	3.3			樣錢
					折十 楷	4-4.5	15.5		樣錢
				鐵錢	小平 楷	2.33-55	2.5-4.6		
				鐵錢	折二 楷	2.74-98	7-8.2		
				鐵錢	折三 篆				
	紹興元寶	旋	元寶		小平 篆・楷	2.3-4.3	3.5-4		楷篆
					折二 篆・楷	2.5-3.17	5.6-8.5	○	楷篆
					折三 篆・楷	3.20-22	8.7		
				鐵錢	小平 楷	2.04	4		
				鐵錢	折二 楷	2.5-2.8			
孝宗	隆興元寶	旋	元寶		小平 楷	2.38		○	
隆興					折二 楷・篆	2.76-3.06	3.4-8.3		楷篆
2				鐵錢	小平 篆	1.92-2.53	2.4-5.8		
		旋直		鐵錢	折二 楷	2.78-3.05	6.2-10.8		
	隆興通寶	直		鐵錢	小平 楷	2.42	6		
				鐵錢	折二 楷	2.9-9.2	7.8-8.3		
乾道	乾道元寶	旋	元寶		小平 楷	1.93-2.4	4.7	○	
9					折二 篆・楷	2.6-3	3.6-8.7	○	楷篆
					折五	3.4	8.6		
				鐵錢	小平 楷	1.96-2.55	4.2-10.2	○	
				鐵錢	折二 篆・楷	2.55-3.02	4.2-10.2	○	
	乾道通寶	旋	通寶	鐵錢	小平 篆	2.28	3.3-4		
				鐵錢	折二 篆	2.72-75	6.5-7		
淳熙	淳熙元寶	旋	元寶		小平 楷	2.28	3.3-4	○	楷篆
16					折二 篆・楷	2.5-3.15	2.7-8.3	○	楷篆
					折三 楷	3.3-3.4	11		樣錢
				鐵錢	小平 楷・篆	2.05-2.5	3.0-6.0	○	
				鐵錢					
				鐵錢	折二 楷・篆	2.6-2.98	4.5-8.5		
				鐵錢	折二 楷			○	
				鐵錢					
				鐵錢	折三 楷	2.95-3.5	7.8-12.1		

背 文	紀 年	紀地・紀監・方位	紀炉・紀範	備 考	頁	版別	図様	分布
川 月		川			3	20	45	
					10	41	76	
					24	3	8	
					27	3	4	四
					2	2	5	
月 星					3	1	1	
					26	1	2	
					47	8	9	
一が四本					49	13	30	
					54	2	4	
					55	1	1	
					55	1	1	
利					57	5	9	四
利					58	5	10	四
					28	7	10	
月 星				印	30	42	72	
					44	3	3	
					56	1	1	
月 星					56	3	3	
					61	1	1	
					61	23	37	
					69	7	9	四
					70	6	6	
					72	1	1	
					72	2	2	
松					73	2	2	
月 星 正 春 松		正			74	38	61	
					86	1	1	
星 月	春 柴 同 捌	松 同			86	23	42	
月 星 治 裕	拾 泉 広	松 同 春 印		乾に異体字	94	50	89	
					112	2	2	
		安			112	1	1	
月 星	柴 捌 九一十六				113	42	65	
月 星	柴 捌 九一十六	利 印 同 春		松	125	72	100	
孕月二星	同上				147	2	2	
利	松 柴・捌	松			150	35	42	
	同 柴・捌 9-15	同		舒同 春 泉 利 泉七あり				
	春 七-十一 十五	春 十六						
月 治 裕 豊	九-十二	利 印 泉 広			159	62	113	
孕星	同 柴・捌 9-15	同 舒同		舒同				
月	松 柴・捌 9-11	松 舒松		舒松				
孕月一星	春 柴・捌・玖・拾	春 十一		印 治 豊 裕				
孕月二星					183	1	3	

皇帝	錢文	方向		材質	種類·字体	長 cm	重 g	錢母	對錢
	淳熙通寶	旋	通寶		小平 篆	2.38	3.5		
		直			小平 楷				
					折二 楷			○	
		直		鐵錢	折二 楷	2.62- 3.0	5 - 7.5		
				鐵錢					
				鐵錢	小平	2.03-45	3.5 - 5.1		
		直		鐵錢	折二 楷	2.8	5.6 - .8		
	(純熙元寶)	旋	元寶	鐵錢	小平 楷				
光宗	紹熙元寶	旋	元寶		小平 楷	2.33-51	2.3 - 4.4		
紹熙					折二 楷	2.43- 3.08	2.8 - 8.72	○	
5				鐵錢	小平 楷	1.9 - 2.55	3.2 - 5		
				鐵錢					
				鐵錢					
				鐵錢					
				鐵錢	折二 篆	2.6 - 3.0	4.2 - 8.5	○	
				鐵錢	折二 楷				
				鐵錢					
				鐵錢					
				鐵錢	折三 楷	2.9 - 3.38	7.6 - 8.9		
	紹熙通寶	直			折二 楷			○	
					折五 楷			樣錢	
		直	通寶	鐵錢	小平 楷	2.4 - 2.5	4 - 4.5		
				鐵錢					
				鐵錢	小平 篆				
		直		鐵錢	折二 楷	2.85- 3.1	6.1 - 9		
		旋		鐵錢	同上				
		直		鐵錢	折二 篆				
寧宗	慶元通寶	旋	通寶		小平	2.36-55	2.5 - 6.7		
慶元					折二	2.61- 3.07	4.2 - 8	○	
6					折三	3.1 - 3.48	6.6 -12		
					折五	3.4			
					當五十	7.5			
		旋		鐵錢	小平	2.35- 2.5	2.8 - 5.5		
				鐵錢					
				鐵錢					
		直		鐵錢	小平			○	
		旋		鐵錢	折二	2.7 - 3.05	5.0 - 9.0		
				鐵錢					
		直		鐵錢	折二			○	
				鐵錢					
		直旋		鐵錢	折三	2.9 - 3.25	5.8 - 8.7	○	
	慶元元寶	直	元寶		折三	3.13-13		○	
				鐵錢	折三				

背文	紀年	紀地・紀監・方位	紀炳・紀範	備考	頁	版別	図様	分布
月					148	1	1	
	春十 十二一十六	春						
	同十五・十六	同						
	春十二・十五	春			148	2	2	
	同十五・十六	同			148	2	2	
	春十一一十六	春						
					183	11	13	
	春十一	春						
	同	同						
	(下)元一五	春元			191	15	25	
三巨星	(下)元一五	鐵母漢四			196	19	23	
	同二一五	同			205	15	17	
	春二一五	春						
	漢三・四・五	漢						
	定二 光二	定 光						
月星				篆書は紹熙で終る	210	18	27	
	同元一五	同						
	春元一五	春						
	漢二一五	漢						
	光二	光						
孕月二星				48 49	216	6	8	
	春三 定三	春 定			202	2	2	
					203	1	1	
	同二・三	同			208	6	8	
	春二・三 定二	春 定						
	同三 春三 定三	同 漢		篆書の停止				
	漢三 定二 春二	漢 定			220	8	12	
	同三	同						
	同三 春三	同 春		篆書ここで終り				
	(下)元一六				218	6	8	
春三	(下)元一六				230	17	25	
背永	(下)三一六				235	15	17	
					239	2	2	
					240	1	1	
	同元一七			慶元七年なし	243	21	32	
	春元一七			以下同様				
	漢元一五							
	春元・二							
	同元一七				253	21	44	
	春元一七							
	春元・二							
	漢元一七							
孕月二星				50-56	259	9	13	
					223	2	2	
川				36 37	241	5	5	

皇帝	錢文	方向	種類	材質	種類·字体	長 cm	重 g	錢母	對錢
嘉泰	嘉泰通寶	直	通寶		小平	2.34-54	2.3 - 4.87	○	
4					折二	2.66 - 3.02	3.21 - 9.6		
		旋			折三	3.4 - 51	6.83-11.4		
		直		鐵錢	小平	2.3 - 2.5	3 - 5.5	○	
				鐵錢					
				鐵錢	折二	2.75 - 9.5	5.5 - 8		
				鐵錢					
				鐵錢					
	嘉泰元寶	直	元寶		折二	3			
				鐵錢	小平	2.45	4 - 4.5		
				鐵錢	折二	2.82 - 2.9	5.5 - 8.2		
				鐵錢	折三	2.97 - 3.21	7.1 - 12.5		
				鐵錢					
開禧	開禧通寶	旋	通寶		小平	2.37-54	2.13- 4.55		
3					折二	2.6 - 3.05	4.4 - 8.14		
					折十	4.1 - 4.2			
				鐵錢	小平	2.4 - 2.45	3.5 - 4.4	○	
				鐵錢					
				鐵錢					
		直		鐵錢	折二				
	開禧元寶	旋	元寶		折三	3		○	
		旋	元寶	鐵錢	折三	3.02	11.7		
				鐵錢	折三	3.02	12.7		
嘉定	嘉定通寶	直	通寶		小平	2.31-54	1.9 - 5.0		
17					折二	2.6 - 3.01	4.1 - 9.5		
				鐵錢	折二	2.55-85	5.0 - 7.0	○多	
				鐵錢				ㄥ	
				鐵錢					
				鐵錢	折五 楷	3.3 - 42	11.4		
	嘉定元寶	旋	元寶		小平	3.38		○	
					折二	2.71			
					折五	3.2 - 23		○	
		直			折十	5 - 5.23	27 - 50.9		
		旋		鐵錢	小平	2.42	5.2	○	
				鐵錢	折二	2.6 - 3.1	5 - 11.5	○	
				鐵錢					
				鐵錢	折三	3.02-42	7.8 - 12.3		
				鐵錢	折三 篆				
		旋·直		鐵錢	折五	3.2 - 5.8	7.8 - 14.2		
	嘉定崇寶	旋	例外	鐵錢	折二	3.12	9.2		
				鐵錢	折三	3.23	9.2		
	嘉定全寶	旋		鐵錢	折二	2.9	7		
				鐵錢	折三	3.13-32	10.1 - 11.8		
	嘉定永寶	旋		鐵錢	折二	2.95- 3.14	9.7 - 10.4		
				鐵錢	折三	3.3	9.6 - 10.8		

背文	紀年	紀地・紀監・方位	紀炉・紀範	備考	頁	版別	図様	分布
月 春二	(上)元一四				262	17	23	
月 星	(上)元一四				267	19	23	
					272	4	4	
	同元 二 三				278	6	12	
	春元 二 三							
	同元 二 三				280	9	14	
	春元 二 三							
	漢元 二 三							
					262	1	1	
	同元 春元				274	2	2	
	同元 漢元 春元				274	3	4	
背利	利 利元			56-60	275	5	6	
背川	川一-三			38-41	275	4	4	
	(上)元 二 三				284	11	13	
	(上)元 二 三				287	14	15	
					290	1	1	
	同元 二 三				294	6	6	
	春元 二 三							
	漢元 二 三							
	漢元							
					284	1	1	
川	川三			42-44 64	284	1	1	
利				61-62	292	6	6	
	(上)元一十四				303	46	63	
	(上)元一十四				315	62	81	
	同元一三				338	37	56	
	春元一十七							
	漢元一十七							
用五 行伍					351	6	7	
利州	一・二				300	1	1	
					300	1	1	
利壺 利州 利三	五 伍				300	3	3	
折十				背折十なきあり	301	3	3	
利州	利州一				333	1	1	
	利州二				334	3	3	
印	二		西一					
孕月二星	利州三		西一	一は何か	334	4	5	
背三・三				鐵錢篆書(例外的)				
用五 行伍	利壺一三	利 印	西二	裏面版別多種	335	10	11	
孕月一星					355	1	1	
孕月二星					355	1	1	
孕月一星					356	1	1	
三					356	1	1	
孕月一星					357	2	2	
孕月二星	定三 定孕月二星				357	2	2	

皇帝	錢文	方向	種類	材質	種類·字体	長 cm	重 g	錢母	對錢
	嘉定真寶	直		鐵錢	折二	2.93	11.5		
				鐵錢	折三	3.22	12.3		
		旋		鐵錢	折三	3.1 - 3.2	9.3 - 11.6		
	嘉定安寶	旋		鐵錢	折二	2.9	9.1		
				鐵錢	折三	3.26	10.6		
	嘉定珍寶	直		鐵錢	折五	3.45	9.6		
	嘉定隆寶	旋		鐵錢	折三				
	嘉定洪寶	旋		鐵錢	折三	3.4	12.1		
	嘉定興寶	直		鐵錢	折五	3.35	10.2		
	嘉定正寶	旋		鐵錢	折二	2.95	8.6		
				鐵錢	折三	3.2	10.3		
	嘉定新寶	旋		鐵錢	折三	3.1 - 3.32	9.3 - 11.6		
	嘉定之寶	直		鐵錢	折二	3.02	9.3		
				鐵錢	折五	3.5	11		
	嘉定萬寶	旋		鐵錢	折三	3.0 - 3.3	8.3 - 9.8		
	嘉定重寶	直	重寶	鐵錢	折五 真	3.4 - 5.1	11.1 - 13.7		
				鐵錢	折五 篆				
	嘉定至寶	直		鐵錢	折五	3.4 - 5.4	8.1 - 14.1		
	嘉定封寶	直		鐵錢	折五				
理宗	聖宋元寶		元寶	鐵錢	折三	3.1	9		
寶慶	(寶慶)			鐵錢	折五	3.31-4.5	10.8 - 12.6		
3	寶慶元寶	旋	元寶	鐵錢	小平	2.56	5.5		
				鐵錢	折二	3.05	7.6		
					折三	3.15-3	9.8 - 12.5		
	大宋元寶	旋	元寶		小平	3.75-8.4	2.4 - 4		
	(寶慶)				折二	2.7 - 3.08	3.8 - 10.8	○	
				鐵錢	小平	2.58-2.6	4 - 5.8		
				鐵錢	折三	2.95-3.3	6.5 - 10.2		
	大宋通寶	直	通寶		當十	5.2	31		
		旋		鐵錢	小平	2.58	4		
紹定	紹定通寶	直	通寶		小平	2.34-5.6	3.03-5.3		
6					折二	2.5 - 3.3	3.4 - 8.2	○	
		旋		鐵錢	小平	2.5	4 - 4.5		
				鐵錢					
				鐵錢	折二				
	紹定元寶	直	元寶		當十				
		旋		鐵錢	折五	3.3	9.7		
端平	端平元寶	旋	元寶		小平	2.24-3.2	2.53-5.16		
					折五	3.35-5.3			
3		直		鐵錢	折三				
				鐵錢	折五	3.32-6.4	9.2 - 15.4	○	
				鐵錢	折十		23.5		
	端平通寶	直	通寶	鐵錢	小平	2.5	4	○	
				鐵錢	折五	2.42-5.3	9.2 - 12.5	○	
	端平重寶	直	重寶	鐵錢	折五	3.2 - 4.3	14.1		

背 文	紀 年	紀地・紀監・方位	紀炉・紀範	備 考	頁	版別	図様	分布
					358	1	1	
孕月二星					358	1	1	
三					358	1	2	
					357	1	1	
三					358	1	1	
使伍					360	2	2	
三					359	1	1	
孕月二星					360	1	1	
正伍					361	1	1	
					355	1	1	
孕月二星					355	1	1	
三				大題	358	1	2	
利州行使					359	1	1	
					361	1	1	
正・五					359	1	2	
用五					353	5	7	
行五								
惠伍		惠			361	1	2	
権伍				大辞典なし				
					362	1	1	
					362	2	2	
漢 月		漢			364	1	1	
孕星	定 惠三 正三			正二?もあり	364	1	1	
	定三				364	3	4	
	(下)元 二 三				365	10	15	
	(下)元 二 三				368	21	25	
月	春元 三 漢三				377	3	3	
三 利州行使	泉三 定三		西三		377	6	7	
當拾					374	4	6	
	漢三				379	1	1	
	(上)元一六				380	27	32	
星	(上)元一六	春五			386	26	33	
	春元一五				395	8	8	
	漢元 二 三							
				大辞典なし				
				極稀 大辞典なし				
					395	1	1	
	元				397	9	17	
					400	5	5	
叩								
	伍 定伍 叩五		北 東	大・中・下	408	15	21	
					413	1	1	
	春元				414	1	1	
惠	惠伍		東 西	東中 西上・中・下	414	7	9	
				稀 小端	407	2	3	

皇帝	錢文	方向	種類	材質	種類·字体	長 cm	重 g	錢母	對錢
嘉熙	嘉熙通寶	直	通寶		小平	2.36—5	2.5—5.9		
4					折二	2.84—3.06	4.2—9.9		
					折十	4		○	
				鐵錢	折五	3.52—3.8	10.6—13.4		
				鐵錢	當十	3.9—4.33	17.5—23.5	○	
	嘉熙重寶	旋	重寶		折三	3.69—3.7	11.8—19		
淳祐	淳祐元寶	旋	元寶		小平	2.2—2.52	2.2—4.8		
12					折二	2.58—3.13	3.4—9.9		
	淳祐通寶	直	通寶		小平	2.3—48			
					折二	2.78—92			
					折三	3.28—43			
					當百	3.5—5.4	11.6—42.9	○	
				鐵錢	當百	3.39—53	7.7—11.9		
寶祐	皇宋元寶	旋	元寶		小平	2.3—5.6	7.1—4.2		
6	(寶祐)				折二	2.66—3.1	3.1—10		
開慶	開慶通寶	直	通寶		小平	2.4—53	2—3.8		
1					折二	2.7—3.1	3.2—6.7		
景定	景定元寶	直	元寶		小平	2.32—52	2—4.7		
5					折二	2.63—3.23	2.7—7.7		
度宗	咸淳元寶	直	元寶		小平	2.21—46	2—4.7		
咸淳					折二	2.6—3.1	3.9—8.7		
10					折三	3.5			
				鐵錢	折二	2.85			

背 文	紀 年	紀地・紀監・方位	紀炉・紀範	備 考	頁	版別	図様	分布
	(下)元一四				417	15	22	
月	(下)元一四				421	18	24	
					426	1	1	
五 惠			東 西 南	東中 西上	428	6	8	
十 惠			北	偽物多し	430	11	11	
					426	2	4	
	(上)元一十二				435	43	57	
	(上)元一十二				446	44	56	
					459	3	3	
					459	5	7	
					460	2	2	
當百				小5 中1 大4	462	10	10	
當百				慶當二十文あり	468	4	4	
	(上)元一六				469	30	34	
	(上)元一六				476	24	25	
	元				486	6	10	
	元				488	6	9	
	(上)元一五				490	16	24	
	(上)元一五				495	15	24	
	(上)元一八				501	31	42	
	(上)元一八				510	34	50	
	九				520	1	1	
					522	1	1	